

モーレツ併合海賊

ノナノナ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

消息不明となった弁天丸を追って、独立戦争時にタイムワープした白鳳女学院ヨット部クルー達。正体不明の謎の存在を追っていて遭遇した相手は、宇宙大学の調査船だった。そこで明らかになる事実。独立戦争時、銀河帝国は介入はおろか自分たちの存在に興味すら持っていなかった。このままでは独立戦争は最悪の結果で終わり自分たちの歴史が変わってしまう。どうする茉莉香。どうする白鳳女学院ヨット部。

これはモーレッツ時間海賊の続きを見たくて書いたものです。書いてるうちにモーレッツ終戦工作が出てしまいましたが……。自分なりの終戦の在り方を展開してみました。

因みに、これが初めて書いたSSとなります。

目次

第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
121	115	108	104	99	94	89	83	79	74	69	65	58	52	48	41	38	31	24	21	16	10	5	1

第31話  
第30話  
第29話  
第28話  
第27話  
第26話  
第25話

166 157 152 147 142 134 125

## 第1話

一二〇年前の独立戦争で、自分の担当教授アテナ・サキュラーに出逢ってしまったジェニー・ドリトル。

長命種である彼女が未来で自分のことを知っている事態とはどういうことなのか、は置いといて。

問題はいまの彼女が単なる辺境星域の学術調査目的でここにいること。帝国軍による星域の監視でも併合目的のためでもない。なにより銀河帝国はこの星域に何の興味も知識も向けていない。

「歴史が変わっちゃうどころの話じゃないのよ」

ジェニーの悲鳴に似た声にヨット部員たちも注目する。

背後のスクリーンでは、アテナ・サキュラーが怪訝そうにブリッジの様子を見ている。

「すみません。少し待ってもらえますか」

「ええ、それは構わないけど」

ジェニーはそう断ると、いったんメインスクリーンの通信を切った。

ふう、と息を吐き、自分に注目するリンら部員たちの顔を見回した。茉莉香やリンを含め部員のほとんどがきよとんとした顔をしている。その中でグリーンエルは真剣な表情をしていた。事態の深刻さに気付いているのは、最年少のグリーンエルだけのようにだった。

「状況を整理しましょう」

ジェニーは事態を説明し始めた。

「帝国の監視艇か第三の勢力かと思っていた不審船は、じつは宇宙大学の学術調査船だった。目的は辺境星域の文明発達モデルについてのフィールドワーク。帝国はまだこの星域に対して何の興味も向けていない」

判っている現状をひとつひとつ上げ、いったん言葉を止める。

「これは、私たちの知っている歴史とは根本から異なっています。あと一週間で独立戦争に介入してくるはずの帝国が、用意はおろか介入する意思すら持っていない。このままじゃ、独立戦争はまったく

違った結果になる。おそらく植民星側のボロ負け、無条件降伏ってことになるでしょうね。・・・あの降伏文書が、署名入りで現実のものになる・・・」

銀九龍の調理場に掛けられていた、油煙で黒く何なのかもわからなくなつた額縁をジェニーは思い出した。

「ステラ・スレイヤーは、私たちの歴史と同じくこの時間帯にも存在しています。このステラ・スレイヤーは歴史通り海賊たちによって破壊されるかも知れないけど、宗主星系の勝利によって、そのあとどうなるのかは判らない。歴史では星間大量殲滅兵器という都合の悪い事実は帝国による併合のドサクサに紛れて隠蔽されたようだけど、帝国による併合なく終戦を迎えたのなら、その技術も隠蔽する必要がないわ。当然、星系軍も海賊も解体。私掠船免状は無効になるでしょうね」

つまりこのまま推移すれば、海賊のいない未来が待っている。

「私たちのセレニティー星系の歴史も変わってしまいます」  
うつむいてグリューエルは呟く。

「それだけじゃないわ。以前話したように、ステラ・スレイヤーが生きた技術として存在するのなら帝国も無関心ではいられない。宗主星系は段違いの軍事力で力押しすれば勝てるこの戦争に、わざわざあんな殲滅兵器を用意してきたのよ。植民星相手に実験する気満々だったのよ。じゃあ戦争の次の対象は？ 自分の勢力範囲のすぐ隣に、そんな大量殲滅兵器を弄ぶ勢力が存在するのを、帝国が看過するとは思えない。最悪この星系ごと処分することを選ぶでしょうね。接触がまだない分、宗主星側も帝国の実力を過小評価している」

ジェニーの言葉を追うにつれ、ブリッジ全体に沈黙が支配する。

不審船を見つけ出す目的も、ステラ・スレイヤーの破壊が史実通りに行われ、帝国による併合が滞りなく進むためだったのだから。

「帝国は、まだこの事実を知らないんですよね。」

「知ってるのは、私たちと、あの調査船のみ」

沈黙の中で、茉莉香がひとつひとつ事実を確認するように言った。

「戦争は植民星側の負けが濃厚。帝国も介入してこない。当然歴史

も変わっちゃう」

「でも、私たちの知っている歴史ではそうならなかった」

「しかし、あまりにも世界が違う。ここがあたしたちの時間軸とは別の可能性の方が大きくないか」

じつとジェニーの話を聞いていたリンが、もう一つの可能性について発言する。

その言葉に、グリユーエルは通信記録の端末を操作しながら応えた。

「パラレル・ワールドのことですか。先程オデットII世から白鳥号名義で送った通信記録は弁天丸に記録されていました。茉莉香さんの曾祖父様が乗り込んでおられるこの世界の弁天丸と、私たちの世界の弁天丸とは同じ時間軸上の過去と未来に乗っています。この世界は、私たちの過去に当たる時間軸です」

「それじゃあ事実を現実にしなくちゃいけない訳ね」

チアキが茉莉香の言葉に目を？く。

「歴史に介入しようってつもり？ どんな影響があるかも判らないで？ 未来改変の危険性が判らないあなたじゃないでしょ」

「未来を改変するんじゃない。補正するだけ。このまま事態が推移すれば、それこそ未来が改変されちゃう。それを知ってるのは、この世界で私たちしか居ない。私たちにしか出来ない」

茉莉香はまっすぐな目をジェニーに向けた。ジェニーがニッコリと微笑む。

「戦争の終らせ方への積極的介入って事ね。」

「宇宙大学のゼミで歴史を選択した私に、歴史への介入をそそのかす。海賊らしい意見だわ。でも実際にはどうするつもり。この世界の帝国に御注進しても、ぶっ飛んだ時間旅行話す女子高生の言葉では説得力に乏しいわ。グリユーエルの神通力にしても通用するか判らないし何より時間がない」

「あれを使いましょう。いま現在この戦争で帝国側にラインのあるのは、唯一あの調査船のみです。」

「ラインって言ったって只の大学の調査船よ。帝国艦隊をすぐ動か

せるほどの力はないわ。」

チアキが茉莉香に返した。

「だから魔法を使うんです。歴史学者にとって、歴史の推移は何より興味があるはず」

「大学って石頭の実証主義。それに接触禁止、未介入が研究の大原則なのよ」

頭の固い大学の教授たちの顔を思いだして、ジェニーはげんなりする。とても現実的とは思えない。そんなジェニーの表情をよそに、茉莉香はにっこりと笑みを浮かべている。

「何言ってるんですか先輩。担当教授との植民星独立戦争史レポート作成の実践ですよ。」

「先輩が、石頭の歴史学者を焚き付けるんです」

「えええええ……！」

アテナ・サキュラーの顔を見た時と同様の悲鳴が、再度ブリツジに響き渡った。



## 第2話

「で、ウチの船長は」

舵輪を握るケインが百目に尋ねる。

「いま調査船キュリオシティに、先代部長ジェニー・ドリトル嬢と一緒に乗り込んでる」

「ジェニーといえば、あの宇宙大学に進学したんだよな」

ケインは目の前の巡洋艦と距離を取りつつ、操舵を握りながら言った。

百目は相手の動きをレーダーから目を離さず空域モニターしている。

「相手が宇宙大学の調査船だったとはいえ、船種は巡洋戦艦。しかも一〇年後の弁天丸の探査能力を再三逃れ得て来た強者だ。それに船長が乗り込んでいる。これまで敵意を感じなかったとはいえ、どんな不測の事態が発生するか判らない」

「ええ、いま会ってるアテナ・サキュラーは、未来では彼女の担当教授だそうよ。未来でも過去でも同じ教官に出会うなんて、何の因果かしらね」

船長の椅子に座った弁天丸船長代理のミーサが、思いがけない事態のため息をついた。三代目が縮体炉のコンソール席から声をかける。

「でも、なに話すんだ」

「私たちの素性を伝えるんだって」

「おいおい、それって、タイムパラドックスやらなんやら、色々ヤバイんじゃないか」

『歴史学者に歴史改変をけしかける』なんて。茉莉香も思い切った策に出たものだけわ」

「見えない」

三代目の心配をよそに、いつも通りのルカ。

「話すだけだ。さしたる障りはない」

「いつものことだ。今更騒ぐ程のことでもあるまい」

相手の射撃管制の動きに注意を払いつつ、事もなげに切って捨てる

シユニツツアー。

そんなクルーたちに微笑みながらミーサは言った。

「海賊稼業は結果オーライってね」

「たう星系海明星所属、白鳳女学院練習帆船オデットⅡ世。船長の加藤茉莉香です。急な申し出に応えて下さり有難うございます」

すらりとした長命種を前に、茉莉香は挨拶を交わす。

「宇宙大学調査船キュリオシティ、調査員のアテナ・サキュラーです。本当は現地人との接触は禁止されているのだけれど、捕捉され会話してしまった以上、お互いの立場と事態を整理するため会談を持つことにしました」

濃紺の髪をショートカットにした彼女は、服装も実用性重視のTシャツにパンツといういで立ちで、長命種が持つ落ち着きや優雅さよりも若々しい快活さを感じさせた。

「女子高生の船長だなんて、あなた本当に船長さん？ それに会見相手がキャプテンじゃなくて調査員の私を指名して来た理由は何かしら」

再びキュリオシティと回線を開いた茉莉香は、お互いが抱える問題を整理するためにと、会見を申し入れた。はじめこの会談に難色を示した調査船側だったが、現地人との接触、介入には当たらないという茉莉香の言葉と、実際直面している未接触の文明人との接触という現実とを擦り合わせるため、会談に応じたのだった。

キュリオシティに乗り込んだのは、茉莉香とジェニー、そしてグリューエル。帝国側にすれば、茉莉香たちは初接触の文明圏人であり、それとの会談はたとえ相手が女子高生であっても外交事例となる。外交に明るいグリューエルはそのオブザーバーとして同行した。当然相手の思考を読み解く彼女の聡明さも期待できる。

「紹介します。セレニティー星王家第七皇女グリューエル・セレニティー。銀河帝国との初会談ということで、外交のオブザーバーをお願いしました。」

「そして私の先輩に当たるジェニー・ドリトル。彼女は宇宙大学の

一年生です」

「え、ちよつと待つて。セレニティー星王家に第七皇女は居ないはずです。それに私は全ての学生を見知っている訳ではないけれど、宇宙大学に、まだ接触のないこの文明圏からの学生はいないわ」

茉莉香の紹介に、アテナは訝しげな表情で二人を見遣った。

「それも併せて、まず、あなた方にとつて私たちとの出会いが現地人との接触には当たらないことを説明します。」

茉莉香からの紹介を受けて、ジェニーが前に進み説明を始めた。

自分たちがこの世界から一二〇年後の未来からやってきたこと。キュリオシティを捕捉したのも未来の技術によって出来たこと。

また、未来でのオリオンの腕文明圏は銀河帝国に所属しており、その併合は今から一週間後のことで、銀河帝国はとつくにこの文明を監視していた筈であることを付け加えた。

「俄かには信じられない話ね。なによりあなたの話が事実だと実証できるものを私は確認することが出来ない。たしかに貴方たちがこの文明の現地人でないことは理解できます。そうでなければこのキュリオシティを捕捉したことも銀河帝国の通信規格で連絡を取れたことも説明がつかないもの。とりあえず、私たちは現地人との接触や介入には当たらないという訳ね」

アテナ・サキュラーはそう言つて、ほつとした表情を見せた。

「私たちが未来人である証拠に、私たちの船に今起こっている独立戦争の戦闘記録があります。時系列に沿つて、どの船がどんな行動をしたか。その結果も併せ、航跡と一緒に通信記録も残されています。これから起きることと付き合わせてみてはどうでしょうか」

これから起きることの記録と聞いて、アテナは興味を引かれた。

「じゃあ、あなたたちは戦闘の結果を知っている訳ね」

「知っています」

「知つていて、どうするつもり？ まさか歴史に介入しようとか考えているんじゃないでしょうね。戦闘がどういう結果に終わるか、大体予想はつくけど」

ジェニーは、自分たちが何をすべきなのか。何が出来るのか。いま

考えていることを告げた。

「私たちの知っている歴史では、あと1週間で植民星連合も宗主星もまとめて銀河帝国に併合されて戦争が終わります。銀河帝国がこの戦争を知らない今のままでは、未来が変わってしまいます。未来が本来とは違った形にねじ曲がってしまいます。それこそ自己修復できないほどに。ですから帝国に知ってもらって介入して来て欲しいんです」

「でもそれがこの世界の歴史に何の影響があるのかしら。あなたの話が本当だったとして、辺境の歴史が植民星側の敗北となるだけ。あなたたちにとっては大変なことでしょうけど、宇宙全体から見れば些細な変化の範中にすぎないわ。それよりあなたたちの帝国を巻き込んだ介入によって引き起こされる誤差の方が、私たちへのタイムパラドックスが心配よ。」

「このままの推移で引き起こされる変革は、帝国をはじめとする周辺全体に及ぼす影響が深刻です」

茉莉香は観察者として話すアテナに対し、真顔で返した。

「セレニティー星系も、未来では海賊によってあり方が大きく変わりました」

グリユーエルは小さな拳を握りしめながら、震える声で言った。

セレニティーだけではない。未来においてオデットII世とステラ・スレイヤーに関わった辺境の海賊ギルドだって影響を受ける。しかしアテナ・サキュラーは静かに言った。

「歴史の流れに、あるべき姿などというものはありません。歴史は厳然とした事実の積み重ねだけによるものよ」

淡々と話す未来の担当教授に、ジェニー・ドリトルは尋ねた。

「宗主星系軍が、あの空域で何をしようとしているか、御存知ですか」

「超新星爆弾のこと？」

アテナ・サキュラーは表情一つ変えず答える。

「それが判っていて、なぜ傍観ができるのですか！」

使用されればどんな非人道的な結果が展開されるのかが理解でき

ていて、なを観察者であろうとする。

「その星の歴史はその星が選択する。その結果は、その選択が責任を持つ。第三者が選択に介入しているものじゃない。現に植民星側は必死にそれを阻止しようとしているじゃない。もつとも主力は海賊船のようだけど」

「植民星側の敗北によってステラ・スレイヤーが、ステラ・スレイヤーというのは超新星爆弾のことなのですが、この星系に保持され続けた場合、帝国に影響がないと思えますか」

ジェニーは、若い自分の担当教授に向かって問いかけた。

「当然、銀河帝国はその存在を許さないでしょうね。なお意志をもって保持し続けようとする文明は、銀河全体の秩序にとって害悪ではない。」

時の経過によるものなのか、自分の知っているアテナ・サキユラーは、もつと歴史に真摯だった気がした。この彼女は、モデルの経過観察にしか興味がない印象を受ける。

「それも、選択による責任の結果よ」

それは、若い歴史学者による一つの文明圏の死刑判決に他ならなかった。

### 第3話

アテナ・サキュラーとの会談を終えて、茉莉香たちはオデットII世に戻った。

「あれほど冷血だとは思わなかったわ。何十億人死のうが、星が滅びようが関係ないって顔よ」

我が担当教官ながら、あまりに淡々とした話し振りにジェニーが叫んだ。

「長命種というものは、案外そうなのかも知れません。いくつもの文明が滅んでいった様をその目で見て来たのでしょうか。自分の母星が消滅してしまっている方もいるのでしょうか?」

「ええ、確かうちのバルバルーサのノーラも、もう母星がないって言ってたわ」

チアキがいつも物静かな副長を思い出して言った。彼女もこの時代のバルバルーサに乗り込んでいる筈である。

「決して感情に乏しいわけではなく、自分の前を過ぎていく時間の流れにどこか達観したところがあって、私たちよりも長く広い空間で物事を捉えているんだと思います」

「そうよねえ。あのミューラが感情に乏しいとは到底思えないしね」

グリユーエルの話に、茉莉香はあの辺境海賊ギルドの長命種を思い出した。

キュリオシティからオデットII世に戻った茉莉香たちは、再び弁天丸、サイレントウイスパ、キュリオシティと共にガーネットAの星域に戻ってきた。プレドラライブによる時空震がこの時代の海賊船や宗主星軍に探知されないよう、彼らとは恒星を挟んでの空域に超光速跳躍する。

戦況は終盤に差し掛かっていた。白鳥号は仲間の撤退を援護するため電子戦を実行。そのため相手の格好の目標となり、九本あるマストのうち直撃弾を受けて三本が大破。ほかの海賊船もしたたかにや

られている。この時代の弁天丸も無傷ではいらなかった。戦域の観測にはアクティブステルスをかけ、あくまで受動に徹する。

「あ、またやられた」

オデットⅡ世と弁天丸のブリッジに、クルーの誰かの呟きが流れた。

パツと宇宙空間に閃光が走り、レーダーのディスプレイに被害を受けた海賊船が点滅する。

茉莉香はグユツと拳を握って、ただ成り行きを見守り続けていた。

あの光が点滅することに誰かが傷ついていく。もしかしたら命を落としたかもしれない。でも今は、ただ観ているしかない。この時代の弁天丸にビーム砲が掠めた時は、思わず声を上げた。戦闘記録に弁天丸は人的被害がなかったと分かっている。だから白鳥号が被害を受けた時は、いたたまれない気持ちになった。でも、黙って耐えるしかなかった。

「茉莉香さん・・・」

グリューエルにはそんな茉莉香が痛々しかった。

戦場の推移を観測しつつ、オデットⅡ世から送られてきた戦闘記録と突き合わせて、アテナ・サキュラーは回線の向こうから呻いた。各船のとった航跡、行動、結果が、記録の時系列通りに展開している。

「本当に記録通りなのね。あなたたちが未来から来たというのも、あながち嘘ではないようだわ」

アテナ・サキュラーは正直驚いたという顔をした。

3時間ほどで、あらかたの戦闘は終了した。海賊側の大敗という結果でもって。

海賊側はどの船も何がしかの損傷を受け、撤退を開始している。ステラ・スレイヤー護衛艦隊は、逃げる海賊に深追いはせず、その場に止まりプラント防衛のため陣形を整えるべく編隊を整えようと動いていた。

「茉莉香、ちょっと！」

レーダー管制をしていたウルスラが呼んだ。

「どうしたの」

「戦闘空域なんだけど、なんか、ちよつとおかしい・・・」

ブリッジのみんなが中央に拡大された全天レーダーに注目する。

「これ、」

ウルスラが、散開していく船影の一つを指差した。

四方に散開し空域から消えていく船もある中で、一隻だけ動こうとせず、止まり続けている。

「これって、白鳥号？」

「エンジン無くても動ける太陽帆船じゃないの」

このオデットⅡ世と同じ帆船。マストを二本やられたが、動けない訳じゃない。

「攻撃を受けた衝撃で、航法系その他に損傷を受けたのかもしれない」

航法担当のリレイが言う。

「なんで、他の海賊船が助けに行かないのよ」

「弁天丸、迦陵頻伽、気付いた。——この時代の弁天丸ね。反転してる。でも宗主星側も追撃に入った。宗主星艦隊の方が早い。辿り着く前に追いつかれちゃう」

「茉莉香！」

リンが叫ぶ。

茉莉香はモニターに映るアテナ・サキュラーに質問した。

「サキュラーさん、お渡しした戦闘記録に白鳥号が拿捕されたという記録はありますか」

「無いわ。白鳥号は電子妨害に徹しながら戦線離脱している」

「宗主星艦隊が掃討戦をしたという記録は」

「それも無い。」

未来の担当教授と後輩のやり取りを見ながら、ジェニーは改めて気付かされた。自分たちの歴史が変わってしまう。だから何とかしなければいけない。それにはこの時代の当事者たちに動いてもらう必要があるが、自分たちも、この時代から繋がっている当事者として動かなければならないということに。



「あなたたち、何をしよっていうの」

アテナ・サキュラーに、茉莉香とジェニーはにっこりと微笑む。

二人は黙って頷き合うと、それぞれが言葉を飛ばす。ジェニーはキュリオシティに。茉莉香はヨット部員たちに。

「なら、歴史が改変されることがないようにしなければなりません。オデットⅡ世は白鳥号の救出に向かいます!」

「私たちの弁天丸とサイレントウイスパーに連絡、電子妨害を目いっぱいかけてもらって」

「進路設定。目標、白鳥号」

「メインエンジン、出力上昇」

「電子戦、アクティブステルス。おっけー」

「空域、問題あるも行けます!」

事態の急変に驚くアテナ・サキュラーを尻目に、ヨット部員たちは一斉に持ち場に就くと、てきぱきと役目をこなしていく。

「弁天丸から通信!」

「出ます」

船長席に回された回線に、ミーサの怒った顔が出た。

「茉莉香、どういうつもり。戦闘に介入するつもりなの? だいいち武装のないオデットⅡ世で戦場に突っ込むなんて無謀だわ」

「戦闘に参加はしません。でも戦闘記録と違った結果を生じさせるわけにはいかないの。白鳥号が捕まることも、追撃戦が起ること  
も」

「だからって、なんでオデットⅡ世で突っ込むのよ。弁天丸でいいじゃない」

「弁天丸をこの時代に二隻存在させる訳にはいかないわ。この時代の白鳥号は電子戦巡洋艦よ。白鳥号なら二隻現れても、敵も海賊も欺瞞攻撃だと思ってくれるわ。だから行けるのはこのオデットⅡ世だけ。サポートお願い!」

「わかったわ。ステルス掛けながらオデットⅡ世を援護する。無理しちゃ駄目よ」

「ええ、みんな帰らなくちゃいけませんからね」

困った子ねという顔で、ミーサが交信を終える。

「さあ、オデット二世。行きましょう！」

「で、茉莉香お嬢様は思わず出てしまいました。つてか」  
操舵を操りながらケインが喋る。

「おいおい俺達や黒子に徹するんじゃないやなかったのかよ」

心配性の三代目。

「いついかなる事態にも対処できなければ海賊とは言えない」  
ぶつきらぼうに答えるシュニツァー。

「でもまあ、実際船長の言う通り弁天丸が出ていくわけにもいかな  
いからなあ。この時代の弁天丸の目の前に。今ごろ敵さん、白鳥号が  
いきなり二隻になったもんで、驚いてるんじゃないか。白鳥号もだろ  
うけど」

「電子妨害、アクティブステルス、順調に実行中！」

百眼クーリエふたりのウィザードは、モニターにニヤつきながら効  
果を確認する。

弁天丸はオデット二世のただでさえ細い船体の影に寄り添いなが  
ら、ステルスをかけつつ随走する。ほっそりした船体にずんぐりした  
弁天丸が隠れるというのは本来無理な話なのだが、そこは歴戦の技で  
カバーしている。

相手にはオデット二世しか見えない。強く走査を掛ければ、スマー  
トな船体の下に僅かな空間の歪が確認できただろう。しかし、突然現  
れた新たな白鳥号に気を取られ、そこまで気付く者は海賊側にも宗主  
星側にもいなかった。

事実確認に疑心暗鬼している宗主艦隊に、現れた白鳥号（オデット  
二世）が発砲する。実は隠れていた弁天丸からなのだが。

空間を切り裂き、二線のエネルギー・ビームが護衛艦隊に向かって  
走る。

「まあ、きれい」

オデット二世の船体を震わせて走り抜ける光跡に、グリユーエルは  
歓声を上げた。

「な、なにやってるのよー、シュニツツアー」

茉莉香が慌てて弁天丸を呼ぶ。

「問題ない、只の威嚇だ。それにこの時代の白鳥号も武装ぐらいしているのだろう」

シュニツツアーの言う通り、追撃に走り出していた相手艦隊の動きが止まる。当てこそしなかったが、正確に艦隊同士の間を切り裂くように放たれた艦砲射撃は、それ以上の追撃を躊躇わせるには十分だった。その間に二隻は白鳥号に接舷し、弁天丸とオデットⅡ世に係留する。そして通信ポッドを放出。ポッドにはオデットⅡ世（白鳥号）の船体データ。いきなり空間には、白鳥号が放たれたポッドの数だけ現れる。ライトニングⅠの再現という訳だ。

再び弁天丸の威嚇射撃。今度は相手の装甲を掠めて。宗主艦隊も電子妨害を仕掛けているのだろうが、そんなものを歯牙にもかけない正確な砲撃。

どれも本物かわからない中で、いつあの砲撃が飛んで来るか知れない恐怖に右往左往する宗主艦隊を尻目に、現れた時と同様、数隻の白鳥号は相手の目の前からこつ然と消えた。

「見えない」

水晶玉ディスプレイを片手に、航法席のルカがニンマリと笑う。

サイレントウイスパークから放たれた強力なステルスによって、茉莉香たちは悠々とこの空域を離れていったのだった。

## 第4話

白鳥号のブリッジは、まさに戦場だった。

球状の大型空間ディスプレイを囲うように配置された各コンソール席は、あるところは崩れ落ち、天井から落ちて来たパイプ類に押し潰され、船体異常を警告するアラームが鳴り響いている。レイアウトはオデット二世と同様なのだが、見慣れた長閑さはどこにもない。

そして、そこかしこで倒れている傷ついたクルーたち。怪我の手当てに当たる者、ダウンした計器の修復を試みる者。ブリッジはごった返している。

「大丈夫、船長」

思わず立ち竦んでしまった茉莉香に、そつとミーサが寄り添った。

海賊船ビッグチャッチの護衛任務の時など、それなりの修羅場は経験したことのある茉莉香だったが、場所がオデット二世と同じでは流石にきついものがあった。悪夢のような既視感に囚われてしまう。

もしオデット二世が戦闘に巻き込まれたら・・・この怪我をしたクルーたちはヨット部員・・・

白鳥号にはオデット二世のヨット部員たちではなく、弁天丸のクルーで乗り込んだ。戦場の修羅場に女子高生を立ち会わせる訳にはいかない。本当は弁天丸のクルーたちも茉莉香を乗り込ませたくはなかったのだが、海賊船の船長という立場上そういう訳にもいかない。それは茉莉香も承知していた。白鳳女学院の制服でなく、仕事の正装である海賊船の船長服姿でやって来ている。

「茉莉香」

蒼白な茉莉香の考えを読んで、ミーサは声をかける。

「ここは白鳥号よ」

「分かってる。——ありがと、」

すうっと深呼吸し、茉莉香は心を落ち着かせた。

「私たちは、海賊船オデット二世の者です。白鳥号を助けに来ました。船長はどなたですか」

まだ言葉を出せないでいる茉莉香に代わって、ミーサが年配のクルーに尋ねた。

「おい、誰かアラームを止めろ。お客さんがおいでだ」

作業服のツナギを着た初老の男が動ける仲間の一人に命令する。

けたたましいアラーム音が消え静かになった船内に、怪我をした者たちの呻き声が聞こえてくる。

「海賊船オデットⅡ世？ 聞いたこともねえ名だが。俺は通信担当のロック、救助痛み入る。ご覧の通り取り込み中だね。船長は大怪我を負って動けないでいる。ご無礼をお許し願いたい。俺たちと同じ船が突然現れた時には、正直ビビったが。で、貴方がオデットⅡ世号の船長さまですかい？ 随分とお若い船長さん……」

と、自分に声をかけて来た白衣の女性と、隣りに立つ女の子の姿を見て、ロックと名乗る老船乗りは眼を？ いた。

「お嬢、いったい何の冗談です。船は確かに大変だが、いまはお嬢さんがお父上についてなくっちゃ駄目でしょうが！」

「え、え、え？」

自分がお嬢と呼ばれて何のことか判らず、茉莉香は眼を白黒させる。

「彼女は海賊船オデットⅡ世の船長、加藤茉莉香。あなたたちの知り合いに似ているのかも知れないけど、まったくの別人よ」

「え、そ、そりゃ。失礼した。あまりに似ているもんだから、てっきり……。船長も不在でどうも気が動転してるようだ」

老船乗りは白髪まじりの頭を掻き掻き、ばつが悪そうに言う。

「私は海賊船弁天……えと、オデットⅡ世の船長、加藤茉莉香です。この人は私の船の船医でミーサさん。怪我をしたクルーの皆さんは必ず助けて見せます」

「有難い。なにしろ人手が足りなくてねえ。一番の重傷者が船長だね。マストの故障をなおそうと船外活動中に攻撃を受けて大怪我を負った。いま娘であるスズカさんが付きっきりで看病している」

ロック爺は二人を船長室に案内した。

ベッドには包帯でぐるぐる巻きになった中年の男性が横たわり、ツ

ナギの作業委を着た赤毛の少女が男のベッドに突っ伏している。

「スズカさん。私たちを助けてくれた海賊船の船長、加藤茉莉香さんです」

ロック爺が声をかけるが、少女からは何の反応もない。ロック爺は二人にペこりとお辞儀をして、ブリッジへと戻っていった。

ミーサがベッドに近寄り、男の容態を観る。

「容態は決して良くないわね。でも必ず助けてみせる」

ミーサの言葉に、少女はゆっくりと顔を上げた。

「助かる、の」

「ええ、大丈夫。ブラッディ・ミーサの名に懸けて、この船の誰も死なせはしないわ」

言うが早いのか、早速仕事の邪魔だと、ミーサは全員を部屋から追い出し、持参のカバンを持ち出して治療を始めた。

扉の外に締め出された茉莉香と少女。

「落ち着ける場所で待ちましょ」

追い出された二人の足は、自然とラウンジに向かった。

「ごめんなさい。まずお礼を言わなくてはいけないのに、自分のことだけしか見えてなくて」

「ううん、お父さんが大変じゃ当り前よ」

人気のないラウンジのテーブルにいた二人は、ドリンクサーバーからコーヒーを注いで向かい合う。

「改めてお礼を言います船長。私は海賊船白鳥号船長の娘、シラトリ・スズカ。この船の副長をやっています。・・・副長なんて言ってるけど、まだお父さんの見習い。」

「私は加藤茉莉香。海賊船の船長やってるけど、まだ新米のペーペーよ」

自分のことをまだ新米だと言う船長にスズカは驚いた。確かに年恰好は自分とそう違わないようだが。目の前の少女は、自分に背伸びすることもなく、まっすぐ前を見る瞳の輝きを持っている。それは自分を信じる意志に裏打ちされたものだと思った。

「戦艦同士が撃ちあう戦闘だって、今回が初めてなの。海賊はしたことはあるけど、砲撃戦なんて滅多にないことないし」

「そうよねえ、戦闘には不向きな船だもんね」

「電子戦が主なんだけど足が遅いからその分仕込みが大変で。今回だって後方支援の筈だったんだけど」

「うんうん、太陽帆船だもんね。マストがアンテナ兼ねてるから壊れると身動き取れなくなっちゃう」

「怪我人も大勢でて・・・」

「うん大丈夫、うちのミーサの腕は折り紙付きよ。この船の医療施設もそれなりに充実してるし」

「・・・ねえ、貴方・・・オデット二世の船長さんなんですよね。なに何でそんなに、この船に詳しいんですか。このラウンジも案内した訳でもないのに自然と足が向いてた」

「え？　ええ、まあ」

茉莉香は曖昧に言葉を濁した。

「お父さんのこと、大好きなんだね」

「え、なによいきなり。一緒に仕事で乗り込んでるだけで、好きとかそんなんじや・・・」

「なんだか、どこかで見たことのある返しに茉莉香は苦笑した。今頃オデット二世のブリッジではバルバルーサの娘が盛大なくしやみをしている事だろう。」

「わたし、お父さんの顔を知らないの。物心ついた頃からずっと梨理香さん——お母さんとの二人暮らしだったし、お父さんがいたことを知ったのも、お父さんが亡くなったことを聞いた時に初めて知った位だから」

えっ、という顔でスズカは茉莉香を見る。

「だから、お父さんというものがどういうものかは解らない。私のクラスメートで、同じ海賊をしている子がいるんだけど、お父さんの船に乗って一緒にお仕事してて。普段はいつも、あのクソオヤジーとか言ってるけど、お父さんから直接いろんなことを学べて羨ましいなーって」

「ごめんなさい、お父様を亡くされてたなんて」

「ううん、そんなんじゃないから。でも大切な人が自分から居なくなったら、私だって梨理香さんが居なくなるなんてこと思いたくもない。だから、お父さん、大丈夫だよ」

うん、とスズカは頷く。

「ありがとう」

ミーサの治療でキャプテン・シラトリは小康を取り戻した。まだ意識はないが危篤状態の峠を超えて、ほっと安堵するスズカだった。



## 第5話

モニターの向こうでは若い歴史学者が苦々しい顔でこちらを見ている。茉莉香は白鳥号の救助に行っているので、彼女の相手をしているのは、ジェニー・ドリトルとグリユーエル。

ガーネットA星域での第一次海戦の一部始終を見て、アテナ・サキュラーは頭を抱えた。

「あなたたち、いったい自分が何をしたのかわかっているの？ 未来の人間が歴史に介入してしまったのよ。これによる異差がどういう歪をもたらすか、まったく判らないわ。」

「未来を改変しようというのではありません。本来の姿に補正しようとしただけです。歴史では海賊勢力への掃討戦も白鳥号の拿捕も起こっていません。あのままの推移だと、むしろそれによる歪の方が、事態がより深刻でした」

涼しい顔で答えるジェニー。

「それは、そうだけど。歴史に本来の姿というものはないわ。それは独善的でとても危険な考え方よ。歴史を実験の場とする訳にはいかないわ」

「決まってしまった歴史を改変しようとするならば、です」

「いま、海賊たちは、殲滅兵器を阻止しようと必死で頑張っています」

慣れない艦隊戦で右往左往していた、この時代の海賊船たちを思いながらグリユーエルは言った。

「私たちはその結果を知っています。初めての艦隊戦で、慣れない海賊たちは手痛い敗北を喫しました。植民星連合の勝敗に関係なくあの殲滅兵器は破壊されなければなりません」

ジェニーが続ける。アテナ・サキュラーを見詰めたまま。

「艦隊戦は二度行われます。一度目が海賊の敗北、二度目が、何故か記録が少ないのですが、海賊の勝利で終わっています。ステラ・スレイヤーは破壊。植民星連合は、間を置かず宗主星ごと銀河帝国に併

合。これが私たちの知っている選択による歴史の結果です。責任は事実の受け入れ方による銀河帝国側にあります」

「私の大学での担当教授が、それは歴史学の教授なのですが、戦争のはじまりと終わりについては、時代ごとの変遷も当事者同士の都合も密接にかかわって、終わらせ方は当事者の能力、意思により結果が千変万化するとおっしゃっていました。」

つい数日前に、目の前の歴史学者から言われた言葉だった。

「そうよ。だから歴史の在り方はさまざまに変化する。過去の記録を探り調査分析することで過去を学び、いまの在り方と付き合わせる事によって今を知ることが出来る」

「過去を学び今を知ることが、未来を類推することに繋がりますよね。でも未来はとどまってははいない。この一瞬一瞬のいまが過去になり未来を形作っている。未来も千変万化するものです。いま、このままの未来では、帝国はこの星系と殲滅兵器については事後責任です。夥しい悲劇とそれに付随していく千変万化な未来の在り方と共に。私たちの知っている未来では、いまこの現在、帝国も当事者です。接触と介入への権利も義務もある。夥しい悲劇を防止し千変万化する事態を調整するために。そしてあなた方は知ってしまった。軍でも政府でもありませんが、貴方は帝国の知性を体現するお方です。その貴方が、これから引き起こされるであろう悲劇と混乱に対して、どう責任の結果を選択されるのですか」

ジェニーの言葉に長命種の歴史学者は、ただ黙ったままだった。

「今すぐ答えを出していただかなくても結構です。まず、私たちの考えを、貴方の目で確認してください」

「でも歴史は、今の段階ではとても流動的で、この先どう変化しているかわからない。それこそ当事者の能力と意思にかかっている。ならば、この時代人である貴方が当事者の一人になる事に何の支障もありません」

「当事者って・・・、あなたたち、私に何をさせようっていうの」

「この戦闘の事実を、帝国側に知らせて欲しいんです」

「大学の一研究員の言葉なんかで、帝国は動かないわ」

「出来る、出来ないは別にして、初めの一步を踏み出さなくっちゃ何も始まりません。そしてそれは、この時代の当事者であるべきです」

「それは、そうだけど。歴史を実験の場とする訳にはいかないわ」

「勿論です。でも、こう考えることもできるのであるのではありませんか。歴史と異なつた推移が起ころうとするとき、それにどう補正をかけていくか。その過程を観察することで歴史パターンについての比較考察ができる。それこそ実体験によつて」

ジェニーが未来の担当教授に向かつて提案する。

ジェニーの提案に、アテナは惹かれた。

「その前提が未来から来た記録というのは、どう考えてもズルだわ。あなたに歴史に介入しようなんて発想させる、あなたの担当教授の顔が見たいわ。本当に歴史学者なの？ もっとも一二〇年前じゃ、まだ生まれてもいないでしょうけど」

こめかみを抑えるアテナの言葉に、ジェニーとグリユールは声を合わせる。

「海賊稼業は、結果オーライなんです！」

## 第6話

「ジェニー先輩、うまく説得できるといいですね」

「ジェニーのことだ、きつと上手くやるよ」

翔子に言われて、リンが応える。

オデットⅡ世にジェニーの姿はなかった。

ジェニーは宇宙大学へ報告に戻るキュリオシティに残った。アテナのサポートを務める役目もあるが、ゼミで選択した独立戦争を、この時代で調べたいという個人的理由もあった。なにしろ歴史の流れをリアルタイムで観察できるのだ。それに未来のアテナ・サキュラーに、戦争の終らせ方について研究しなさいと言われた言葉が気になった。だから、アテナから「あなたも一緒に来る気ない？」と、突然言われた時はびっくりした。

「アテナ・サキュラーに言ったよね。私たちの文明は間を置かず宗主星植民星丸ごと銀河帝国に併合。これが私たちの知っている歴史の選択による結果。責任は受け入れた銀河帝国側にあるって。この世界の歴史はその流れから大きく逸脱している。だからこの時代の当事者たちに動いてもらわなくてはならない。でも思ったの。この歴史に連なる私たちも当事者なんだって。当事者としてどうすればいいのか。戦争の終らせ方について、その後の当事者として考え、行動したいの」

それを言った本人に付いて行き、一緒に考察することを選んだのだった。

「ジェニーが行くなら、あたしも一緒に行く。ジェニーを一人にはさせない」

リンがジェニーの身を案じたが、

「リン、ありがと。でもこれは自分の個人的な課題だから。リンはグリニューエルや茉莉香たちをサポートしてあげて」

ジェニーは心配するリンの申し出を断り、キュリオシティに乗船し銀河帝国へと向かったのだった。

「で、茉莉香。調査船をやる気にさせたのはいいとして、実際問題ど

うするつもりよ」

チアキ・クリハラが茉莉香を睨む。

まずアテナ・サキュラー名義で、キュリオシティが観測した戦闘レポートを、宇宙大学と帝国政府に送ってもらった。もちろんステラ・スレイヤーの疑念を添えて。そして宇宙大学への事態説明のため、いったん帰路についた。この時空に居るはずのない一人の異邦人を乗せて。

「大学の調査船からの報告だけで、辺境星域に帝国が動くとは思えないわ。」

結局問題は振出しに戻ってしまう。かぶりを振るチアキに、

「帝国にすぐ動いてもらわなくても、何とかなるんじゃないかと」

「それって、どういう意味？ 時間も無い、信用もない。戦力もない。ないない尽くしの中で帝国軍に動いてもらう必要がないとは」

「私たちが帝国軍をやればいいのよ」

「な、なんだったってえ——」

チアキは口をパクパクさせる。

「海賊は度胸とハツタリよ♡」

そう言っただけ茉莉香は軽くウインクした。

茉莉香とジエニーが考えたプランはこうだった。

「私たちが直接ドンパチする訳ではありません。それこそ未来からの過去への干渉になっちゃう。あくまで帝国の影を演じます。グリューエルにはセレニティーの魔法を使って、ステラ・スレイヤーをリークしてもらおう。帝国の表の顔は、宇宙大学のアテナ・サキュラーさんにやってもらいます。」

「簡単に言うけど、帝国の影って、実際問題どうするつもりだ？」

電子戦席からリンが声をかける。

「初めての練習航海でのこと、覚えてます？」

「ああ、存在しない戦艦をあるように見せかけた、あの戦法か」

リンは、ライトリングーのダミーを思い出した。それを応用した文身の術も。

「それを大がかりに仕掛けようと思っています。サイレントウイス

パーと弁天丸を使って」

茉莉香は、ラキオン企業体が行った演習空域での艦隊でつち上げを考えていた。偽の帝国艦隊が現れ何かちよつかいを出していると知れば、帝国も乗り出してくるんじゃないか。あわよくばそのまま帝国を独立戦争に巻き込めれば。そんなことを考えていた。

「そして、いまこの時代にセレニティー星王家は帝国とパイプを持っていきます。グリューエル、この時代のセレニティーの防衛軍ネットにアクセスできる？」

「ええ、私の生体認識コードは時空の違いに関係なく通ると思います。セレニティーに超新星爆弾の存在をリークするのですね。殲滅兵器のウラを帝国側に取らせるために」

「さすがお姫様。説明しなくても判っちゃうのね」

セレニティーの諜報能力は、帝国情報部を凌ぐとも言われている。外交は、小国が生き残っていくうえで必要な戦略だった。

「出来れば、宗主星政府、植民星連合両方に圧力を掛けられればいいのだけれど」

茉莉香が手を合わせてお願いするように言う。グリューエルは少し考えてから答えた。

「交渉にはヨートフを通しましょう。この時代のヨートフに私を信用させられるかは解りませんが、この戦争の趨勢がセレニティーにどんな脅威になるか。ヨートフなら理解するはずです」

ヨートフ・シフ・シドー。未来ではセレニティー星王家枢密院侍従長の長命種。一人で戦争を始めたり終わらせることができるという。れる彼は、この時代にも存在する。

「随分、物騒な話してるわね。とても女子高の練習帆船での会話とは思えないわ」

「海賊営業だけでなく、実際の戦闘経験まで持つクルーなんて、星系軍の防衛艦隊にもそうはいませんよ」

ブリッジに現れた二人の姿を見て、黄色い歓声が巻き起こった。

「ミーサ先生、お久しぶりです！」

「ケイン先生、また顧問してくれるんですか！」

ミーサは、ハイイと軽く手を振ってヨット部員たちに応えるが、隣りのケインは微妙な顔をしていた。

キュリオシテイと別れ、白鳥号の救助もひと段落したところで、弁天丸とオデットⅡ世は合同の作戦会議を開いた。傷ついた白鳥号のこともあり、今後についてどうこの時代と関わっていくかについて話し合うためだ。場所はオデットⅡ世で行われ、弁天丸からはヨット部員たちと面識のあるミーサとケインが参加した。

「白鳥号は、この時代の海賊船に座標を送って救助してもらえば」  
サーシャが白鳥号について言った。救援に向かおうとしたこの時代の弁天丸と迦陵頻伽なら、まだ連絡が取れる可能性が高い。

「同じように宗主星側も聞き耳を立てている。SOSを発信した途端に、奴さんたちまたこちらに向かってくるぜ。海賊たちと鉢合わせになったら、歴史改変の出来上がりだ。それにこれ以上私たちがこの時代の人間と接触するのはまずい」  
腕を組んだリンが反対する。

「じゃあ、白鳥号はこちらで修理するしかないわね。でも時間があるかしら」

チアキがあと四日しかないタイムスケジュールを思った。時間がないのに、やらなくてはならない問題は山のようにある。

「白鳥号は二回目の艦隊戦の時の旗艦、何とかするわ。でもバウ・スプリットはどうしようもないわね。まあ船首衝角がなくても戦闘は出来るけど」

きつと百目は悲鳴を上げるな、と思いながらミーサが答えた。

そんな中、

「彼女、落ち込んでたな。」

茉莉香がぼつんと言った。

「不安で、心配でいっぱいになって、お父さんが助かったって解ったときは、本当にほっとしてた。でもお父さんの意識が戻ったわけじゃない」

「当面の命の危険が去っただけで、状態としては小康を保っている

だけ。重体であることには変わらないわ

医師としてのミーサが茉莉香に返す。

「とつても心細いんじゃないかと思う」

ケインは茉莉香が何を言いたいのかに気付いて、ヨット部員たちに尋ねた。

「みなさん歴史の時間です。第二次ガーネットA海戦で海賊艦隊の指揮を執ったのは誰だったでしょう」

リンをはじめヨット部員たちは、歴史の教科書に出てくる名前を思い出しはつとした。

「キャプテン・スズカ!」

「そう、彼女がキャプテン・スズカです」

荒くれ共を率い勝利に導いた、伝説の女海賊。独立戦争の歴史には必ず出てくる名前だ。

「しかし本当にそうなのか。見たところそんな勇ましい女傑には見えないけど」

リンがコンソールを操作しながら、モニターに映るシラトリ・スズカのデータを見て言った。

アスタ・アルハンコやハラマキラヨット部員たちも感想を口にする。

「あたしたちと変わらない年恰好だね」

「茉莉香にちよつと似てるかも——」

「でも、茉莉香よかしつかりしてそうだね、なんか楚々として」

ヨット部員たちのそれぞれの感想に、茉莉香が白鳥号でクルーにスズカと間違えられたことを思い出したミーサは苦笑した。

「彼女はいま、とても船を指揮できるような状態ではない。そんな彼女が問題だという訳ですね」

「彼女がキャプテン・スズカとして海賊艦隊を率いてもらわないと、次の海戦には勝てません。あの海賊たちの戦い方を見れば、確かに海賊たちもさっきの戦いで色々学んで次の海戦に臨むでしょうが、海賊に艦隊戦は組めません。どんなに能力が高くてそれぞれが勝手気儘なのが海賊です。彼らを束ねる要がある。確かにいま彼女に艦隊



指揮を任せることは無理です。で、船長はどうやって現状を変えるおつもりですか」

「ううん、そんなんじゃないけど、ただ彼女を励ましたいの。お父さんと一緒に船に乗って副長までやって。船長が不在の時、船やクルーのことを考えなければいけない立場だけれど、お父さんは意識不明の重体。しかも戦争の真っ只中。わたしだったら、もうどうしていかきつと判らないと思う」

「いっそ、茉莉香がチアキちゃんに代わりに指揮を執っちゃったら。ばーんて」

ハラマキの言葉にチアキがむくれる。

「ちゃんじゃない！」

「ばーんて何よ、ばーんって」

「そうそう、実際海賊船長やってるんだし」

ヨット部員たちの勝手気ままな発言に、ミーサが手を叩いて納める。

「はいはい、冗談はそれぐらいにして。でも海賊艦隊の指揮を彼女が執らなければならぬ理由は何。黒鳥号でも加藤ちるそにあん文左衛門でもいいじゃない」

加藤ちるそにあん文左衛門は、先の通信でスズカに扮した茉莉香を「ちゃん」呼ばわりした曾祖父だ。

「私たちの知っている歴史では白鳥号のキャプテン・スズカが指揮を執った。どうして彼女だったのかは知らないけど、出来る限り歴史の流れを変えたくないの。どう影響が出るか判らないし」

「それに、この戦いは彼らの戦い。彼らが解決しなくちゃいけない。サポートはするけど手出しは御法度だと思う」

「どうして駄目なんだい。結果オーライなんだろう」

「海賊の海賊としての矜持、かな」

ふーんという面持ちで、ブリッジ一同、茉莉香を見詰める。

「で、茉莉香はどうしたいんだい」

リンが茉莉香に尋ねる。

「わたし、彼女をオデット二世に招こうと思います」

「白鳥号はオデットⅡ世のことを、この時代の海賊仲間だと思ってるんでしょ。そんな彼らに女子高の練習船を見せちゃうわけ？」

ミーサが驚く。

「面白そうじゃない。女子高の女の子なんて、海賊業界にはそうそう居ないんだろ。同じような年頃みんなに囲まれば、気も紛れるって」

「あなたさっきこれ以上接触するのはまずいって話したばかりじゃない」

ミーサの突っ込みにリンは、え、そうだっけという顔でとぼける。

「いいね、スズカちゃんの激励会だあ」

おーという掛け声とともに、一斉に拳を上げるヨット部員たち。たちまちパーティーについて相談を始める。

「海賊ご招待するんだから、白鳳海賊団の格好がいいと思います」

「アイちゃんの妖精、可愛かったもんね」

「パーティーには絶対カレーよね」

「リリーのカレーは絶品です」

「ランプ館のスイーツ無いのが残念だよお」

「でもお菓子なら沢山持ってきたよ」

そんな彼女らを見て、ミーサとケインは思い出した。基本、この年頃の女の子は「楽しければ万事オツケー」なのだ。

## 第7話

白鳳女学院ヨット部は、スズカを招待した。  
表向きはお互いの表敬。

どこの誰なのか判らない相手から、いきなり「パーティーしょ♡」では警戒しない訳がない。ましてや白鳥号は緊急事態の中だ。怪我人もいる。ヨット部員たちはまどろっこしいと言っていたが、軍務に準ずる海賊船白鳥号に対しグリユーエルが定型な外交文書で送信した。父のことが心配で、スズカは気乗りしなかったが、船を助けてくれた相手からのお誘いとなれば無下にも出来ない。船長の名代としてロック爺を伴いオデット二世を訪問した。

弁天丸と白鳥号のクルーたちによる懸命の復旧作業で、何とか近距離センサーと補助動力が使用できるようになった。まだ作業は続けられている。

近距離センサーが使えるようになって、モニターを見たロックは訝しんだ。助けてくれた相手の艦が自分とそっくりだったからだ。オデット二世と名乗る艦は白鳥号と同じ太陽帆船どころか細部のディテールまで一致。姉妹艦と言ってもいい。でも白鳥号に同型艦は無く、太陽帆船で海賊しているというのも自分達以外心当たりがなかった。正体不明の海賊ほど危険なものはない。

ロック爺は助けてくれた相手とはいえ、警戒を怠らなかつた。

しかし、

ブリッジに入った途端、周りから「ようこそ」「スズカちゃ——ん」の歓声が巻き起こる。

「ようこそ。船長の加藤茉莉香です」

突然のことに言葉を失い、ただ目を丸くする二人。

目の前に繰り広げられたのは、思い思いのコスプレをした少女たち。見覚えのある海賊船長の格好をした少女と、プリンセスのドレスを纏った小柄な子、王子様の姿をしたボーイッシュな少女が二人を出迎える。それにしても、プリンセスの少女の輝きが凄い。

「驚かせてご免なさい。ご紹介します。私たち白鳳女学院ヨット部部長のリン・ランブレッタ。」

「ようこそ、ならず者揃いのヨット部へ」  
芝居のような抑揚をつけて王子様が歌う。

「そして、部員のプリンセス・グリユーエル・セレニティー」

「招待をお受け下さり、歓迎いたしますわ」

プリンセスがドレスの裾を持ち上げ軽く会釈し、完璧な仕草で挨拶する。

「そしてオデット二世のクルー、白鳳女学院のヨット部員たちです」

「いらっしやーい」

めいめい思い思いの格好をした少女たちが、手を振りつつ二人に声をかけてくる。

「お招き下さり有難うございます。本来なら船長が挨拶に伺わなくてはならないところですが御無礼をお許し下さい。船長の名代として、副長のスズカお嬢さんをお連れしました」

ロック爺が周囲に気圧されて後手に挨拶する。スズカは毒気を抜かれてぱくぱくするばかりだ。

戸惑う二人に、茉莉香は頭を下る。

「まず謝らなくてはいいけません。オデット二世は海賊船ではありません。私たちの学校の練習帆船なんです。で、私たちはそのヨット部員」

いきなり予想外のことを告げられる。

「茉莉香とチアキちゃんは本物の海賊だよ」

「私たちも海賊したことあるけどね」

「余計なこと言わんでいい!」

仲間の言葉に眼を?く巫女の格好をした黒髪のメガネ娘。

「どういうことか、説明してもらえませんか」

面食らうスズカをよそに、ロック爺は静かに言った。

「実は、オデット二世というのは、白鳥号なんです」

茉莉香の言葉に、二人の眼に緊張が走る。

「ああ、乗っ取りとか謀略とかそういう訳じゃなくて。オデットII

世はずっと未来の白鳥号なの」

茉莉香は、自分たちが一二〇年後の未来からやってきたこと。その世界では白鳥号は白鳳女学院の練習帆船で、自分たちはそのヨット部員だということ。そして自分は未来の弁天丸で海賊船の船長をしていることを説明した。

「なに、その話。私をかつぐの？何のために？」

スズカは当然の反応を返してきた。ううんとかぶりを振って否定する茉莉香。

——しかし見回したところ船の中に大人の姿はなく、本当に自分と同じ年頃の女の子たちばかりだった。

「本当に女の子ばかりなのね。でも戦闘空域に、なんで女子高生がいるのよ。助けてくれとの感謝するけど、いくら仲間が護衛してるからといって戦争中の巡洋艦の前に出ていくなんてどうかしてる！」

「いや、まあ・・・」

茉莉香は以前にも、白鳳ヨット部が巡洋艦や戦艦がうじゃうじゃいる中に、単身突っ込んでいったことがあることを思い出した。

そこで順を追って、前に一度時空振に巻き込まれてこの時代に来たことがあり、自分の時代の弁天丸がその時空震の調査中に行方不明となって、ここに飛ばされたこと。それを追って再びこの時代にタイムワープしてきたこと。そして銀河帝国の宇宙大学の調査船と遭遇した今までの顛末を順を追って話した。

いきなりのぶっ飛んだ話にスズカはついていけない。ただロック爺は何事か考えながら話を聞いていた。

「この時代に来なすつたのは二回目だとおっしゃったが、前の時どこかと通信しましたかい」

ロック爺が尋ねる。

「ええ、宗主星の偵察艇が海の明星に近付いてるって、艦隊司令部に」

「——お嬢、半年ほど前、白鳥号の通信ライブラリーに、打った覚えのない通信が記録されたことがあったでしょう」

「私たちが外惑星系で通商破壊をやってた時ね」

「いきなりライブラリーに現れたもんで変だと思っただけです。敵のブラフかと思っただけだが、クラッキングにしては痕跡がないし、過去の記録が混乱したには、内容が時間的におかしいし」

「後で艦隊司令部から『その節はご苦労様でした。』って感謝されたしね」

半年前、茉莉香たちにとってはそんなに経っていないが、宗主星の偵察艇を追い返したことが、白鳥号の戦歴として残ったわけだ。通信したことはオデットⅡ世に残っていたので艦隊司令部に知らせたわけだが、この時代の白鳥号には、した覚えがない記録がいきなり現れたようだった。

「あなたたち、だったのね」

半信半疑のスズカが、疑問の原因だった茉莉香を見る。

「いえ、あ、あははは」

「あのあと、どんな魔法を使ったんだって大変だったのよ。『ウィザードの白鳥』なんて変な二つ名を海賊仲間からは付けられるし」

茉莉香は、頭を掻きながら愛想笑いをするしかなかった。あの時は海の明星を救おうと精いっぱい、出来るだけパラドックスを生じさせないよう気を付けたつもりだったが、やっぱり影響は出ていたらしい。それが自分に返って来るなんて思わなかった。

「てことは、本当に未来から来たのね」

スズカはあらためてブリッジの様子と、その中に集まっている女子高生たちを見回した。

屈託ない笑顔で、自分と同じ年頃の女の子たちが自分を見ている。そこにはなんの緊張感もない。

自分とは違う違和感（疎外感）に何かしらを感じたが、自分が救助してくれた相手を表敬している立場を思い出したスズカは、あらためて茉莉香に尋ねた。

「改めてお伺いしますキャプテン茉莉香。私たちをこの船に呼んだ理由は、何ですか」

そんなスズカに、リングが周囲と親指を立てて示し合せると、ヨット部員に檣を飛ばす。

「とりあえず、スズカちゃんを励ます会、おっぱじめようぜ」

「へ、励ます会？」

おーという掛け声とともに、何のことか判らない二人の背中を押しつつ食堂へとなだれ込む。

「船長これは——」

「ゴメンね——、みんながスズカちゃんを励ましたいって、パーティーを考えてくれたもんだから——」

「ちゃんじゃない」

というスズカの言葉にならない声に、茉莉香は手を合わせながら二人を見送った。

「でね茉莉香つたらね、いきなり電子戦やっちゃったのよ。初めての航海なのにね」

「そうそう、チアキちゃんとのツーマンセル。海賊って後先考えないタイプ？」

「何言ってるのよ。錨泊空域でビーム砲ぶつ放したあなたに言われたくないわよ。それと、ちゃんじゃない」

リースクイーンやシスターが、初めての練習航海での出来事をスズカに話している。それにツンとした表情で返す眼鏡の巫女。

「でも営業の時、ブラスターぶつ放して一番ノリノリだった巫女さんは誰だったかな——」

「うっさいー！」

真っ赤になりながら、むくれ顔でストローでジュースを飲むチアキ。

「みなさん、ヨット部と言いましたよね。女子高のヨット部はいつもそんな恰好をしているの」

「え、いやだあ。そんなわけないよ。これは営業用。海賊を迎えるんだもん。海賊の時の正装をしなくちゃね」

「海賊？」

きよとんとするスズカに、茉莉香は私掠船免状を守るためヨット部員たちに助けてもらった時のことを話した。

へーという顔で聞くスズカ。海賊も時代を経て大分様変わりをしているようだが、やっている手順は自分たちとそれ程差はない。

スズカを囲みヨット部談議に花を咲かせる一同。しかし武勇伝がジャッキー・ケルビンにまで進んだ時だった。

「さつき敵の前に出ていくって言ってたけど、戦艦や巡洋艦が取り囲む艦隊の中に、単身突っ込んでいったこともあったよな」

ぶうっと、リンの言葉に、飲みかけのジュースを吹く。

「あなたたち女子高生でしょ。いったい何やってるの。私たちでもそんな無茶はしないわ」

「まあ、梨理香さんだったから出来たんだろうな。死中に活を見出すてやつ？ 状況判断と指揮がとにかく的確」

「茉莉香のお母さんんだけど、伝説の女海賊キャプテン・リリカ。ぜったい相手が攻撃できないって状況を上手く突く！」

「あん時は、この船をなんとか守ろうと、俺たち必死だったもんな」腕を組み、遠くを思い返すように語るリン。それに頷くヨット部一同。

海賊ギルドと辺境星域艦隊との攻防戦のことだが、そんなに決死戦の悲壮感あふれる雰囲気だったか、茉莉香は愛想笑いをするしかなかった。しかし、梨理香の判断は正確だったし、呑気気儘なヨット部員たちをあそこまで引張ったリーダーシップは本物だ。カリスマと言っていい。ヨット部員たちは口々に梨理香の凄さを騙っていた。茉莉香はこそばゆさを感じつつも、実際その評価は茉莉香自身も変わらない。改めて梨理香さんの凄さを思うのだった。

スズカは梨理香のことを単純に凄い人だと思った。自分が目指す海賊として理想に近い。自分の力量と比べて雲の上の人という印象を受けた。一方で、この子たちは何なんだろうと思った。自分が物心ついた頃から独立戦争の匂いはしていて、それほど深刻ではなかったけれど平和という言葉は遠いものだった。少なくとも学校で海賊を語るものではなかった。海賊行為は戦争そのものだったから。でも、ここにいとそんな海賊行為も戦争も、なんだか遠くに感じられた。



同じ年恰好の子たちに囲まれたスズカ。表情に、白鳥号での思い詰めたような険が取れるを見やり、ロツク爺はほっとした。同時に、あの若さで全てを背負わなくてはならない彼女の不憫さを思った。同じ年頃で、戦時に出会ったばかりにこうも違うのか。自分があの年頃だった時はどうだったろう。

「オデットⅡ世って、本当いろんな奴からちよっかい出されてるよね」

「でも、とてもいい船です」

「私たちの百年のちまで残してやらなくちゃ、いけませんものね」

「茉莉香は、ほんとジェニーと同じことを言うんだな」

自分の乗っている船が百二十年後まで伝えられてて、また次の百年まで伝えようとしている。そんなバトンの受け渡しにスズカは感動した。

「で、お願いがあります」

妖精の姿をしたアイ・ホシミヤの言葉に、みんな一斉にスズカを見詰める。

「このオデットⅡ世を、白鳥号を私たちの時代まで伝えてください」  
ヨット部一同の視線にさらされ、たじろくスズカ。

## 第8話

能天気ともいえるヨット部員たちの陽気に当てられて、スズカは少し疲れを覚えた。

ふうと息を吐き、喧騒から少し離れてテーブルに着く。自分とそう年の変わらない女の子たちが、ワイワイと本当に心の底から騒いでいる。自分があんなように騒げたのはいつだったかな。と、ふと思つた。

自分が乗り込んでいる船の仲間たちも、みんないいヤツだし、陽気だし、海賊した後の打ち上げも、今のようになら飲んで騒いで楽しいものだ。騒がしさなら彼女たち以上だろう。あれはもう乱きち騒ぎだ。でも、何か違う。

——ああ、そうか——

彼女たちの顔を見ていて、ふと気づいた。

——いまの時間を、思いつきり楽しめるからだ——  
そう、私たちの乱きち騒ぎには出口が見えない。お仕事が終わっても状況が変わるわけでもない。戦争にどっぷり嵌まっていて戦闘から戦闘への繰り返しだけ。海賊は自由って言ってるけど、ぜんぜん自由じゃない。星とか総力戦とかに縛られて身動き取れなくなっている。

彼女たちには、そんなしがらみが無いから、あんなにのびのび楽しめるんだ。

「あなたたちの方が、よっぽど海賊らしいわ……」

ふと漏れた独り言に、茉莉香が「？」の顔を浮かべて、スズカの隣りに座った。

そんな茉莉香にスズカは尋ねた。

「いろんな奴からちよっかい出されてるって話してたけれど、聞けば結構危ない場面じゃない。宗主星の偵察艇を相手したのだから、向こうは本職の軍人よ。当然偵察艇だって武装してる。この船は昔——私の時代と違って丸腰なんでしょ。攻撃されるって心配しなかつ

たわけ？」

「うーん、まあ心配しなかったって言えば嘘になるけど、あの場合私たちが撃退しなくっちゃ、余計ヤバイ事態だったことは確かな訳で。出来るのがオデットⅡ世しかいなかったからしただけよ」

「それと七つ星共和連邦と辺境海賊ギルドと一戦交えるって何。しかも先頭切って突っ込むなんて正気の沙汰じゃないわ！」

茉莉香とスズカの会話に、チアキ・クリハラがスズカの横に座って答えた。

「あれは梨理香さんが、敵が欲しがっているのは白鳥号だったオデットⅡ世だから攻撃は出来ないって踏んでいたから。最もリスクを冒さず敵の機先を制するには、それがベストだったわ」

……………

「あなた、どうしてそんなに即決できるの。周囲の状況だって千差万別するでしょう」

二人の言葉を聞いて、まじまじと茉莉香とスズカを見詰めるスズカ。

「ううん、即決なんて出来てない。いつも悩んでばかり。でも悩んだって状況が変わるわけでもないし。決断は、自分の考えたベスト。って思うようにしてる。梨理香さんからの受け売りなんだけどね」

「私はともかく、茉莉香は判断が早いわね。経験もないのに大人達に舐められないようになって、いきなり電子戦始める位だから」

チアキの言葉に、面目ないと頭を搔く。

「梨理香さんて、あなたのお母さんなんですよ」

「私を生む前海賊やってて、今は海の明け星ステーションの管制官してる。私は管制している梨理香さんしか知らないけど、海千山千の船乗り相手にバッサバッサと切り回してる」

「海千山千の女子高生を、艦隊行動取れる位に育て上げてるしね」  
ツンとした顔で付け加えるチアキ。

「聞けば聞くほど、梨理香って人が凄い人だっと思う。あこがれちゃうわ。茉莉香がお母さんのこと、梨理香さんって呼ぶのが判る気

がする。きつとすべての目標とする人なんでしょうね。私にとつてお父さんは教師、先輩。ロクデナシの親であつて目標では無いかな」  
うんうんと腕組みして頷くチアキ。ロクデナシの親というところが大いに賛同できるらしい。

茉莉香は、いま頃梨理香さん、盛大にくしゃみをしているだろうなと思つた。

「わたしは学校生活つて経験がないの。戦争がいよいよ激しくなつて、中学を卒業すると同時にお父さんの船に乗り込んだから」

「周りは自分より経験豊かな大人たちばかり。副長なんて言つてるけど、実際はお父さんの見習い。だからそれに安住しきつていて、いざお父さんが倒れたら何にも出来なかつた」

「本当のこと言うと、あなたがたが羨ましい。頼れる大人ばかりか、気の置けない仲間たちに囲まれてるんだもの」

「だから、あなたたちを見て思つた。自分の孫や曾孫の世代たちに、笑顔で暮らしてもらいたい。そうすることが私たちの使命だつて」

「ありきたりの言葉だけど、いま自分たちが出来ることをしなかつたら、白鳥号も、海賊も、今のあなたたちも。みんな存在出来なくなつちゃうんでしょ。あんなの見せられちゃったら、出来る出来ないじゃない。するしかないじゃない」

「スズカちゃん！」

茉莉香はスズカの手を握つた。

「それに、時間は私たちの味方よ。それと、ちゃんじゃない！」

## 第9話

ガーネットAで繰り広げられた一回目の戦闘のレポートを宇宙大  
学に送信した後、キュリオシティは大学のあるユニバ星系への長距離  
超光速ドライブに入っていた。レポートには一人の異邦人も乗船し  
ていることを書き添えて。

超高速跳躍の亜空間の中で、飛び荒ぶ光の流れを見ながら、アテナ  
は言った。

「あなた、ステラ・スレイヤーのことを帝国に知らせて欲しいって  
言ったわね」

「はい」

「もう知らせてあるわ。独立戦争の推移についてレポートするの  
に、まず両者の戦力を比較しなくてはならないもの。でも何の反応も  
ないみたいね」

「それって、どういう意味ですか」

「帝国は、とつくに知ってるって事よ。私が植民星独立戦争の  
ファイルドワークの定時レポートで、宗主星側の動き、植民星連合の  
動きと合わせて、大学に報告してたから」

大学に報告してもらえば、いくら独立自治が建前の宇宙大学といえ  
ど、あれだけ周辺宙域に影響する殲滅兵器の情報が帝国政府に行かな  
い訳がない。ジェニーが知っている大学も、帝国政府をはじめ他勢力  
からの干渉は排除するが、不利益と判断されない限りは技術革新を始  
め様々な情報は共有し合っている。ジェニーはそれを期待していた。  
アテナは、そこまで言っただけで自分の言葉に違和感を覚えた。

自分のレポートは大学宛てのものだが、銀河帝国の脅威となるもの  
の情報を帝国情報部が見逃すわけがない。

しかし、今に至るまで何の動きも見られていない。これまで辺境比  
較民俗学の研究のことばかりで、レポートの中の政治的内容について  
は無頓着だったが、振り返ってみると余りにも不自然だ。まるで見て  
見ぬふりを決めているようだ。

「帝国か、あるいは宇宙大学が、知りながらあえて無視しているとい

うこと？」

長命種の歴史学者として、戦争のはじまりについては、相手に無関心を装い、あるいは過度に追い詰め、隙を見せて開戦に追い込む。そんな手口で滅んでいった文明はいくつも心当たりがあった。

「誰かが意図的に状況の変革を意図している？ ああつ人間が政治的生物であることを失念していたわ。歴史や比較民俗学をフィールドする時、必ず考察しなくちゃいけないことなのに！」

アテナは頭を掻きむしりながら独り言ちた。

「そう！ これは帝国も当事者の問題なのよ！」  
そう言うと、アテナはジェニーの方に向き直って尋ねた。

「あなたの後輩さん、セレニティーのプリンセスなのよね」

「グリューエルのことですか」

頷きアテナは続ける。

「セレニティーのことだから血の魔法は通じる筈よ。あのお嬢さん、見かけの割に私よりも政治に長けていそうだったから、きつとそれを使うでしょうね。なら、セレニティーを動かす方が効果的」

「いったい、なにをするんです」

何か裏がありそうだという事は判るが、何をするかが判らないジェニー。

「メトセラにはメトセラのコネクションがあるのよ」

「.....」

ヨートフ・シフ・シドーは、すぐ王室専用のネット回線に異常が起きたことに気付いた。

王室専用の受信箱に届けられた一通のメール封書。宛先はシムシエル・セレニティー。差出人は「王家ゆかりの者より。」とだけ。

明らかに怪しいこのメールは、正規の手続きを経て届けられたものではない。そのような場合、直ちにアクセスは遮断され、情報部が回線履歴をハックし発信元が特定される。

だのにこのメールは王室回線に直接送られてきており、アクセスの遮断も回線履歴の逆探知もすり抜けている。こちらのハッキングは

一切受け付けないということだ。そのような通信は、正統王家の直系の者だけに限られる。さらにメールには、追伸としてヨートフ・シフ・シドー宛のものも同封されていた。

このメールが強制送信されてくるのとはほぼ同時に、帝国貴族でもある宇宙大学の長命種からもメールが届いていた。そのメールはヨートフ宛で正規の手続きによるものだった。

「象牙の塔のメトセラ、宛てヨートフ・シフ・シドー様。」

ヨートフは、まず自分あてに送られてきたメールを開いた。

『帝国は、知っている』

文面は、それだけだった。

そのメールを閉じると、ヨートフは正体不明のメールが入ったメモリーチップを王室御用達のクラッチバックに納め、若い自分の主のところに赴いた。

「殿下宛てのメールで御座います」

恭しく差し出す。

自分が幼少の頃より仕えてくれている彼の表情がいつもと様子が違うのを見て、青年のシムシエル・セレニティーは、壮年の侍従が差し出すものを緊張の面持ちで受け取った。

御用達のクラッチバックに入っているという事は、その中身が尋常なものでないことを物語っている。それこそ王室もセレニティー連合王国も揺るがしかねないほどの物という訳だ。

クラッチバックを正規の手続きを経て開く。

中には一本のメモリーチップ。

「ご覧の通り、差出人の名前は記されておりません。本来ならこのようなものは殿下の前にお出しするべきではないのですが、貴き血で封印されておりましたので、まずはこれに納め献上した次第でございます」

「ヨートフ宛のもの入っているようだが、中は確認したのか」

「いえ、メールの宛先は殿下で御座いますので、貴き血の封印を破ることは出来ません。一応物理的安全性についてはスキヤンいたしましたが、差出人も中身も不明の物であることをご承知置き下さい」

シムシエルは、正体不明のメモリーチップを手に取り、しばらくそれを見詰めていた。が、やがて意を決して自分のコンソール端末に入れた。

しかし何も起きない。メールは本人確認の生体認証要求している。シムシエルはメールが要求するまま、自分の生体認証を入力する。軽い音と共に、メモリーチップ、コンソール端末それぞれが互いの生体認証の符牒を確認しあい、メールが開いた。

コンソールのモニターに、王家の紋章と名前が映される。

しかし名前もセレニティーの姓のみが記され、名は表記されていない。名の方は「\*\*\*」で表記され認識できないようだった。『このような無礼をお許しください。私は王家の血に連なりを持つ者ですが、とある事情で名乗るわけにいきません。たとえ名乗ったところで、血統の認証では表記がされなかったと思います。

このメールを殿下にお送りしたのは、セレニティー星系に危機が迫っていることをお知らせしたかったからです。

いま銀河帝国を含め、この銀河系宇宙は岐路に立っています。その中心にあるのは、銀河の辺境であるオリオン腕。ここでは植民星たちが独立を求めて宗主星と紛争を起こしています。宗主星側がガーネットA星系において、きわめて危険な兵器を実戦に使用しようとしています。

使用されれば紛争は一瞬で宗主星の勝利で終わりますが、問題はそこではありません。それが使用されれば自らの星系だけでなく、周辺の星系にも影響が及ぶものです。紛争が終結した後、その兵器の矛先を次にどこへ向けるのか。その存在を銀河帝国は知りません。が、相手は銀河帝国を知っています。次々と周辺の星系を併呑している銀河帝国。その影に怯える彼らが、危険な兵器を何処に向けるかはおのずと明らかです。銀河帝国自体に向けなくとも、同盟関係ないしは従属関係にある星々に使用し、銀河帝国への牽制の手段とするでしょう。我らセレニティー星系は銀河帝国の傘下に入っただけの日も浅く、彼らと同じ辺境に位置するセレニティー星系は格好の対象となります。



繰り返します。その危険な存在を、セレニティーを始め銀河帝国側はまだ把握していません。

セレニティーは、すぐ行動を起こすべきです。帝国の平穏と、銀河宇宙の安寧と、何よりもセレニティーの民の安全のために。

「セレニティーの栄光が、民と共にあらんことを。」

文面と共に、ステラ・スレイヤーの内容とそれを破壊せんと奮闘する海賊船団の情報が添付されていた。

読み終えて沈黙のまま文書を置くと、レポートと共に添付されたヨートフ宛の封書を自分の侍従に手渡す。

「ヨートフは恭しく受け取ると、自分宛ての私信を開いた。」

『ヨートフ、貴方にこの書面を託したのは、貴方がこの危機を正確に理解し、的確な行動を取り得る唯一の者と信じるからです。』

「どうか、行動を起こして下さい。私の素性は二の次でよい。まずはセレニティーのために何をすべきかを考えなさい。セレニティーとは王宮も含めたこの星系全てのこと。王室より民をお願いします。おじいさまの思いも同じであるはずです。』

最後の一語に片眉を上げたヨートフだったが、その表情もすぐ元の平静に戻った。

「なんとあつた、ヨートフ」

ヨートフの顔に浮かんだ、一瞬の変化を見逃さなかった若い主は、静かに声をかける。

「別段、なにも」

メールを閉じ、目を伏せてヨートフは答える。

「——どう思う」

「王国には何事も御座いません。つとめて平穏で御座います。御心安んじられます」

「.....」

若君と侍従が見詰め合う中、ヨートフは厳しい眼差しのまま、はつきりと言った。

「王国に、何事も御座いません——」

第七艦隊第58突撃機動艦隊は、辺境宙域にあつて帝国に敵対する勢力の掃討作戦を行つている。

辺境海賊ギルドを名乗る新興の不逞の輩が、何やら用途不明の品物を何処かに売り渡したという情報を得て、その行方を追つていた。

帝国はかつて、跳梁跋扈する宇宙海賊相手に大戦争を行い、その版図から海賊たちを駆逐した。それ以来公式には海賊は存在しないことになっている。しかし完全に根絶やしに出来た訳ではなく。その残党たちは帝国の埒外にある辺境に逃れ、辺境海賊ギルドなるものを立ち上げた。帝国外でゴソゴソやつている分にはいいが、失地回復を目指して何かを企んでいるとなれば話は別だ。

突撃機動艦隊の使命は、帝国の危害となるものを排除すること。ナンバーズ・フリートは基本内政干渉から、外交手段無しで帝国外に軍事行動を行うことは無い。辺境を担当する第七艦隊でも攻撃を受けない限りはそうだ。しかし突撃遊撃艦隊には広い裁量権が与えられており、帝国に危害が及ぶと判断した場合、自由に行動を起こすことが認められている。その名の通り、過去に帝国が版図を広げる先駆けとなったのもこの艦隊だった。

何の目的なのかは判らないが、相手は帝国版図外の文明圏。ただ、これまた素性の怪しいヤークブ商会会社という商社が、その取引に介在した痕跡があつた。

ヤークブ商会会社といえば、何でもありの法律ストレスの商売をしていることで知られている。恐らく非合法にも手を出しているだろう。碌でもない目的のために使用されるに決まっている。これまでダークなラインすれすれの所をウナギのように擦り抜けて来たが、今回はアウトだ。

その品物は、単結晶物質。

単結晶物質は、それ自体禁忌という訳ではないが、製造には高い技術が必要であり銀河帝国でも限られた企業でしか作ることが出来ず、その製造売買には軍備に準じた高い規制が掛かっている。一介の仲介業者が取引できる代物ではない。辺境海賊ギルドにも作る能力は無く出所は帝国内部という事になる。そこら辺は統合参謀司令部の

情報部の仕事だろう。

いま重要なのは、ずっと追って来た辺境海賊ギルドが、帝国のやぐざな業者と一つのラインで結びついて来たということ。

第七艦隊第58突撃機動艦隊司令、銀九龍は、かつての海賊どもの残党である辺境海賊ギルドの動きを注視して来た。規模まだ小さく帝国に直接手を出して来ていないが、潜在的敵対勢力だと認識している。海賊は居ないことになっていて、表沙汰にはなっていないが、辺境周辺で抜け荷（密貿易）なども相当やっているらしい。そんな相手の一つとして捜査上に浮かんできたのがヤークブ商会公司。これを、もろとも一網打尽に出来る機会と捉えた。

しかし、なかなか相手は尻尾を掴ませなかった。不意打ちでヤークブ商会にガサ入れを掛けたが、当然単結晶物質などという品目は出て来ない。取引があつたと思われる日付のデータを見ても、別段怪しい所は見られない——ように見える。物的証拠がない以上、それ以上の突っ込みは出来ない。

やはり、物的証拠を上げるか現行犯逮捕しか手が無い。が、相手はそんなドジは踏まない。

何よりその単結晶物質が何の目的で使われるかが判っていない。帝国外の文明圏の何処かというだけで、その行先もだ。

手詰まり状態で打つ手が見付からず、銀九龍は焦っていた。

そんなところ、銀九龍の元に一本のメールが届いた。差出人は「王国の役立たず」。

文面は、ただ『帝国は知っている。動け』とだけ。

それとステラ・スレイヤーについての情報だった。

## 第10話

「会合空域にタッチダウン反応。白鳥号です」

弁天丸の通信士がディスプレイに現れた船名を読み上げる。

「よお、白鳥号。お帰り。動けないでいた様子だったが、大丈夫だったかい。それにしてもシラトリ船長よ。白鳥号が二隻に増えた魔法はいったいどうやったんだい。流石ウィザードの名を持つだけのことがあるなあ」

加藤ちるそにあん文左衛門が、通常回線で呼びかけた。しかしモニターに現れたのは見慣れた船長の姿ではなく、一七歳くらいの女の子だった。

「こちら白鳥号。ご心配をおかけしました。船長のキャプテン・シラトリは大怪我を負っていて、回線に出ることが出来ません。私は副長のシラトリ・スズカ。娘です」

「おお、あん時のスズカちゃんか。お父さん、キャプテンは大丈夫なのか」

「命に別状はありませんが、とても会議に出られる状態ではありません。海賊会議には私が名代で出ます」

「そうか、じゃあまた後で。スズカちゃん」

「ええ、また後で。それと、・・ちゃんじゃない!」

海賊の巢。ガス星雲や暗黒物質に隠された海賊たちの隠れ家。

初めての共同戦線で海賊たちの集合場所となった。それほど大規模なものではないが、船の修理や補給が出来、たまに親睦会という名目での情報交換も行われる。当然中での争いごとは御法度。しかし血気盛んな一匹狼のことだ。些細なことから血腥い争い事が起きることもある。

しかし、今回の海賊会議は、そんな荒くれ共の雰囲気はなく、誰も声を上げる者がいない。

鍛えた体の海の漢たちが一様に押し黙り、俯き、まるでお通夜のようだった。

実際、海賊艦隊にとってはお通夜だった。

ステラ・スレイヤーの破壊は見事失敗、戦闘はボロ負け、初めての艦隊戦とはいえ一指も報いることが出来なかった。そして敵の殲滅兵器による植民星丸ごとの葬儀が迫っている。

敵は圧倒的な戦力。しかも艦隊戦に慣れた軍隊。船の修理は出来る。しかしこのまま、再び戦いに向かっても勝てる見込みが全くない。

「二度の失敗くらいで諦めちゃうのか」

若い村上丸のスリバチ船長が吠える。

「諦めちゃあいねえ。だが、この戦力の差はどうしようもない。一対一なら負けない自信はある。けれど統率された戦術の前には、俺たちは歯が立たねえ。経験は、一朝一夕にはいかないんだよ」

苦いものを飲み下すように言うエル・サントのダウジングロッド

「認めたくないものだな。若さゆえの過ちというものをつてか」

迦陵頻伽のカーン男爵。それにデスシャドウのクルップ子爵が続く。

「若さゆえの過ちって言うなら、そもそもこの戦争を始めた植民星連合だよ。落としどころも決めず、勢いだけで始めたようなもんだからな」

「資源も戦力も戦略も無しでな」 「行き当たりばったりで始めた

私掠船」 「海賊始めた俺達もそんなもんだ」

二日酔いが残るコジャ、スリーJ、ザ・ピース。

だんだん会議は愚痴談議になっている。愚痴るばかりで次の策が立たない。いや方針は立っている。次も艦隊戦に臨むのだ。全滅しても戦う。——しかしその後には灼かれた故郷の星が残るだけ。

「あれだけは、なんとかしてえな・・・」

「ああ、あいつを潰せれば、少なくとも灼かれねえで済む」

しかし、全船玉砕覚悟で体当たりを仕掛けても、当然相手は予想しているだろう。海賊に残された指手は少ない。碌に艦隊戦が組めないなら特攻しかないことぐらい子供でも分かる。

「でも、近付くことも出来ないんじゃないか」

「編隊組まれて、各個撃破。で詰むな」

「よしんば、数隻が肉薄できたとして、そこにはプラント要塞の集中砲火が待っている」

「・・・終わったな、俺達」

「ああ、終わりだ」

話がそこまで行って、再び沈黙が会議を支配する。

「まだ終わりじゃない」

沈んだ男たちの中で、最年少のスズカが立ち上がった。

「まだ終わってない！ 私たちはまだ白目をむいたわけじゃない。したたかにやられはしたけれど、まだ船を失った訳じゃない」

一斉に海賊たちの目が十七歳の少女に向けられる。

「勝てない戦はしないのが海賊。でもここで引くわけにはいかない。引けば海賊も私たちの星も、何もかもが未来ごと無くなっちゃうのよ」

「お嬢ちゃんも、あの戦いを見ただろう。俄か集めの海賊艦隊では、軍隊に勝てねえ」

今更判り切ったことをという顔で、男たちは若いスズカの言葉を受け流す。

しかしスズカは、にやりと不敵な笑みを浮かべた。

「そりゃ、自分自分が見通しもなしに勝手に戦ってたんじゃ、勝てるものも勝てないわ」

「何か、勝つ方策でもあるんかい」

そんな闘志を捨てていない少女の瞳に注目する海賊たち。

「——あの戦いを分析して、次の戦闘では相手がどんな動きをするかを予想したの」

ディスプレイに第二次ガーネットA海戦の予想展開図が映し出される。オデットII世の戦闘記録をもとに手を加えて展開予想図に書き換えたものだ。

それを見た海賊たちは一様に驚いた。

「おい、こりゃあ・・・、敵の展開される戦力はおろか、分刻みで敵の動きも表わされてる。とても未来予想図なんてレベルじゃないぞ。

「いったいどんな手を使ったんだ」

茉莉香が渡した戦闘記録。それは分散させた敵をおびき寄せて集中砲火による各個撃破したのだが、いろいろ突っ込みたいところがあった。何も無い空域に敵が引き寄せられているのだ。そして予め展開していた味方が攻撃し撃破している。まるで撃つて下さいとも言いう様に。そこで敵を誘導する手を考えた。抜群のステルス性と戦艦並みの電子武装を持つ白鳥号に出来ることを。それを思いついた時、パズルがぴたりと嵌ったのだ。ご都合主義満載の戦闘記録が俄然現実味を持った。

それを作戦要綱として展開予想図にした。

スズカが提示した展開予想図から、海賊会議の流れはがらりと変わった。

それがどういう由来なのか、そもそも信用できるのか。そんな確証はなかったが他に策があるわけでもない。でもいまは一抹でも頼れるものが欲しい。海賊たちはその予想図に乗った。電子戦を得意とした白鳥号の、これまでの戦歴も後押ししていた。

敵の動きに合わせて、各艦がどういう行動を執るか。その時の予想に応じて作戦行動が立てられる。その流れは、展開予想図の基となった戦闘記録にあるものと同じだった。謂わば後出しじゃんけんだ。

「よし！乗った。だが、この作戦では足の遅い白鳥号が突っ込む訳だ。白鳥号の電子戦が優秀なのは判ってるが、電子妨害が作戦通りいかなかった場合、集中砲火を浴びるぞ」

「うちのクルーは優秀なんです。あのととき弁天丸も迦陵頻伽も見たでしょう。白鳥号には、とびつきりの守護神がついてます！」

絶句する男どもを尻目に、スズカは言った。

「それに時間は、私たちの味方よ」

## 第11話

スズカと別れた茉莉香たちは、進路をポルト・セルーナに向けた。この時代のポルト・セルーナは辺境との境界。そして帝国の動向にアクセスできる最も近い帝国基地なのだ。帝国銀行にあるセレニティーの口座からお金を引き出したのもこの港からだった。

一二〇年後では軍港としてよりハブ空港として機能しているこのステーションも、いまは銀河帝国の最前線。未来と変わらぬ沢山の宇宙船が入り出しているが、民間船より軍艦の姿が目につく。そして停泊する軍艦も帝国領内を受け持つ第五艦隊でなく敵対する辺境星域と直接渡り合う第七艦隊だ。帝国の実働部隊である第七艦隊が、ゆうに1千隻を超える規模で宙域に展開している。

「ああつ、今すぐこの艦隊がたう星系に進出してくれないかな」  
近距離レーダーを埋め尽くす艦隊を見て茉莉香は呟いた。

「船長、船はポルト・セルーナへの最終防空ラインに近付いている。トランスポンダーを出さないと色々ヤバイ。不審船扱いで撃沈されても文句は言えない」

射撃管制のシュニツァーから連絡が入る。

ここは帝国の最前線基地。そこに国籍不明の不審船が侵入しようとしているのだ。超高速跳躍の亜空間から通常空間に復帰して、辺境の星間航路であるスカラールートに乗った途端、船を捕捉するレーダー波がばんばん当たってきている。

「そうね、船籍と船名は『白鳳海賊団、オデット。サラスバティー。搭載艇サイレントウイスパ』でお願い」

「おいおい、帝国に海賊って名乗るのかよ」  
通信担当百目が眼を？く。この時代、銀河帝国が領内の海賊退治に乗り出し、公式上殲滅を表明してからまだ年月が経っていない。海賊とは反政府勢力、犯罪組織と同義語なのだ。

「それは、帝国の海賊でしょ。私たちはそれには属さない星系の私掠船免状をいただく海賊。帝国は基本他星系の政策や文明には不干涉が原則だから、それに期待しましょ」



民間船を装わなかったのは、海賊はあくまで戦力を有した独自の存在。軍隊に準じるからだ。これから帝国に乗り出してきてもらうには、自分たちが植民星連合でも宗主星でもない立場が重要だ。それからオデットⅡ世を名乗らなかつたのは、白鳥号がオデットⅡ世になつたのは独立戦争後。私掠船免状を与えられたのは白鳥号の船体だから元々白鳥号だつたオデットⅡ世の船体でもこの時代なら免状は通る。弁天丸も同様。しかし二隻ともこの時代に存在しており、この時この宙域にいた記録はない。そこでオデットを旗艦とした白鳳海賊団所属サラスバティーとした。つまり三隻だけとはいえ海賊艦隊という訳だ。もし符牒を詳しく精査すれば同じ免状を持つ船が二隻という矛盾が出て来るが、免状を乱発していた当時の植民星連合政府では判らないだろう。ましてやオリオン腕に何の注意も向けていない銀河帝国は気付かない。むしろ気付いてくれる程こちらの文明に詳しくかつたらこんな苦勞はせずに済む訳で。

「艦隊である以上、提督が必要よね。私はオデットの船長をしなくちやいけないし、ミーサはサラスバティーの船長、てことで・・・」茉莉香が部長であるリンに視線を向ける。

「むりむり。せーったい無理。船長だつて私には出来ないよ」視線を感じたリンが慌ててかぶりを振る。

「ということであ、グリューエルお願い！」

茉莉香がグリューエルに向かって手を合わせる。

「ええ、私が提督ですか？」

いきなり振られてびっくりするグリューエル。

「グリューエル、海賊やりたがつてたじやない」

「茉莉香さんを差し置いて、提督だなんて」

「船を直接指揮する訳じゃないし、なによりこれから外交が必要になる。王女としての手腕が欲しいのよ」

「私も決して外交に明るいわけではありません」

「でも私や弁天丸より見識があるわ」

「いよっ海賊王女！」

セレニティー艦隊と対峙した時と同じように、三代目が声を上げ

る。それに合わせてヨット部員たちからも掛け声が上がった。

茉莉香が指示した通りのトランスポンダーを発信しながら、白鳳海賊団はスカラールートをポルト・セルーナに接近する。

最終防空ラインに入ったところでポルト・セルーナの管制局から通信が入った。

「こちらはポルト・セルーナ管制局。そちらのトランスポンダーは銀河帝国台帳では認識されません。所属と目的をお知らせください」「そら、いきなり海賊って名乗りやそうなるわな」

リンが首をすくめる。

「こちらは、くじら座たう星系海の明星の私掠船、白鳳海賊団所属のオデットです。白鳳海賊団はポルト・セルーナへの入港を希望します。目的は、銀河帝国との軍事同盟」

茉莉香は管制局に伝える。賽は投げられた。

船はポルト・セルーナの錨泊空域に停船した。指定された空域の近くに船影はない。大きささまざまな船がひしめき合う中で、ぽつんと三隻だけが浮かんでいる。しかし四方からアクティブな探査波や射撃管制用のレーダー波まで飛んできている。

やがて一隻の連絡艇が近づいて来た。

第七艦隊所属の船だった。連絡艇はオデットⅡ世に横付けし、ドッキングを要求する。

「相手は、こちらが未確認の海賊船のつもりでやって来る。乗り込んでるのは第七艦隊の精鋭部隊よ。用心して船長」

インカムからミーサが話しかけた。帝国はこの通信も傍受を試みているに違いない。しかし、一二〇年も差がある技術力では足跡すら見つけることが出来ないだろう。

「銀河帝国第七艦隊所属フェニックス号。艇長のコクレイン大尉です。接触を求めて来た貴艦とのドッキング、および臨検を要求します」

「うわ、いい男」

モニターに映った優男の顔を見てエイプリル・ランバートが声を上げた。

「こちらに敵対の意思はありません。臨検の要求を受け入れます」  
ドッキングポートが伸ばされオデットⅡ世のハッチと繋がる。

「化学組成確認のため、そちらのハッチを開けて船内空気を流してください。それと、あなた方の生体情報をお知らせください。こちらの生体情報も送ります」

彼らとの接触に何の問題もないことは知っているが、あちらにすれば未知の生命体とのファーストコンタクトなのだ。もし炭素体生物が何の備えもなく砒素体生物と接触した場合、悲劇的な事態となる。同じ炭素体生物同士でも、進化の過程が違っていれば壊滅的なウイルス感染の危険性も高い。お互いにその危険を避けるため、帝国艦隊はファーストコンタクト時の手順を踏んでいた。

「分析情報では、大気組成も生体組成もお互いに危険がないことが確認されました。これより、臨検を開始します」

フェニックス号側のハッチが開き、三人が乗り込んでくる。

緊張の面持ちで乗り込んできた帝国士官三人が見たものは、当然のことながら想像を超えた事態だった。

「いらっしやいませ。お役目ご苦労様です」

三人を出迎えたのは、いかめしい海賊たちでなく、白鳳女学院の制服姿の女子高生たち。それがどこぞのメイド喫茶宜しく一斉に声をかける。

「り、臨検に先立ち、確認させてください・・・」

目をぱちくりさせながら、士官の一人が言った。モニターに映っていたコクレーンと名乗る男だった。少し後ろに、がっしりとした体型の男と、眼鏡をかけた優男が控えている。

「未知の星系から来た海賊船と聞いたのですが、あなたたちはいったい」

茉莉香は、大柄な男の顔に、何となく見たことがあるような親近感を覚えた。しかし隣りの眼鏡は、体型こそコクレーンと似たり寄ったりだが、印象がまるで違う。底の知れない雰囲気があった。

「コクレーン大尉さんですね、間違いありません。私たちは、オリオンの腕たう星系の海の明星から来た白鳳海賊団です。普段は学生

やっておりますけど、私掠船免状を持つれっきとした海賊。私はオデットの船長をしている加藤茉莉香です」

そう茉莉香は自己紹介しつつ白鳥号だった頃の私掠船免状をモニターに表示した。そして、茉莉香の傍らに立つグリューエルに手を伸ばし、士官三人に紹介した。

「私たち白鳳海賊団の提督、プリンセス・グリューエルです」

茉莉香と同じ海賊姿のグリューエルが、ちよこんとミニスカートの両裾を摘まんだ貴婦人の仕草で挨拶する。小柄なグリューエルの海賊帽には、茉莉香とは異なり大きな純白の羽根飾りがついている。それがふわりと揺れる。

ますますあっけに囚われるコクレーン。立ん坊のコクレーンの前に、がっしりとした体格の男が進み出た。

「自己紹介が遅れました。私は第七艦隊所属、第58突撃機動艦隊司令の銀九龍」

げっ、と茉莉香はなった。知り合いも知り合い。海の明星中継ステーションの裏の元締め。自分が親父さんと呼ぶ、小さい頃から見知った相手だ。軍人さんだったことは聞いていたが、まさかここで邂逅しようとは思わなかった。勿論この時代の親父さんが自分を知る訳ないのだが。

「そして、帝国情報部のジェームズ・ナツシュフォールです」

紹介を受けた男が無言で挨拶する。ナツシュフォールと云えば、クーリエの幼馴染だった銀河帝国艦隊統合参謀司令部付き情報部員と同じ名前。彼の関係者なんだろうか。そんなことを茉莉香は思った。ジェームズ・ナツシュフォールは先程からじっとグリューエルを見ている。

「あなた方は、くじら座宮たう星系からいらしたと仰っておられたが」

「はい。まだ帝国とは接触関係のない文明圏ですが、その海賊として、銀河帝国と軍事同盟を結びたく参りました」

「宇宙大学からの報告によると、たう星系は星間戦争の真っ最中とのことです。たう星系が属する植民星連合を代表しての交渉ですか」

「銀河帝国が、原則内政干渉なことは存じております。私たちはどちらか一方に属する者ではなく、あくまで海賊としてです」

「海賊、ですか」

銀九龍の目がきらりと光る。がそんな視線に物怖じせずグリューエルは外交的笑顔を崩さない。

「詳しい話は、臨検ののちポルト・セルーナで行いましょう。交渉の場所は艦隊司令部でよろしいか」

「いえ外交となりますので、司令部ではなく別の場所です」

「では、パレスホテルをご用意しましょう。迎賓館としての機能もあります」

「お心遣い、感謝します」

## 第12話

臨検は形だけのものだった。

「おかしいわね、初めて接触した生命体の臨検にしちゃ単純すぎるわ」

医師でもあるミーサが言った。乗船による臨検は積荷の確認のみ。あとは外部からの武装に関するサーチだけで、オデットⅡ世と弁天丸はポルト・セルーナへの入港を許された。しかも乗員の上陸もだ。本来ならより詳しく隔離検査される。もっとも時間のない白鳳海賊団にとつては願ったり叶ったりな訳だが。

「これでは、普通の輸送船と変わりが無い。まるで俺たちを知っているようだ」

と、シュニツア。

銀河帝国との交渉は、パレスホテルの貴賓室で行われた。立ち会ったのはグリユーエルと茉莉香、そしてミーサ。帝国側からは銀九龍にナツシユフオール、コクレーンに代わって、これまたどこかで会ったことがあるような中年の男性が参加していた。

「ポルト・セルーナの治安を預かる、軍警察のピエトロ・ホーガスです」

ああやっぱり、軍警察巡視艇K P 93号の艇長ピーター・ホーガスさんのご先祖様だ。と茉莉香は思った。しかしご先祖様は子孫と違い制服をきちんと着こなしている。

「あの、もしかして銀河帝国は聖王家だけでなく、役職も世襲なんですか」

一応茉莉香は聞いてみる。

「必ずしも世襲制ではありませんが、専門を必要とされる部門では、世代を超えた繋がりが必要とされます。結果、重要なポストには世襲が多くなりますね。あなたならお解りではありませんか」

ナツシユフオールがグリユーエルを見詰めて言った。

「先日、帝国銀行の口座から小口の取引がありました。しかし引き

落とした人物に該当者が存在しないのですよ。——あなたは何者な  
んですか」

「セレニティーにゆかりのある者、としておいて下さい」

「海賊を名乗る者が、いにしえの王家と血の繋がりが在られるので  
すか」

「ゆかりのある者としか言えませんが」

グリユールは、すました笑顔で応える。

ナツシュフオールはそれ以上の追及はせず、銀九龍と代わった。

「ステラ・スレイヤーを、ご存知ですか」

その言葉に茉莉香たち三人は目を丸くした。

「帝国は、ステラ・スレイヤーを知っているのですか!」

「セレニティー連合王国のさる筋から、照会があったのですよ。私  
の個人的な情報で、銀河帝国の正式なものではありません。ただ……  
「ただ?」

「ステラ・スレイヤーに関する重要な部品を取り扱った業者が、海賊  
ギルドを名乗るならず者と繋がりがあったようなのです。そして部  
品を納入した文明圏から、海賊を名乗るあなたたちがやって来た。当  
然、興味を引かれます」

海賊ギルドと聞いて、茉莉香は嫌な予感がした。あの何でも見透か  
す眼を持った長命種の顔が浮かんだからだ。

「辺境海賊ギルドのミューラ・グラント。——ご存じありませんか」  
三度やっぱりと茉莉香は思った。彼女とは一二〇年越しの関わり  
合いなのだ。

顔に出るのを必死でこらえる茉莉香を他所に、グリユールは涼し  
い顔で知りませんと返している。

「ステラ・スレイヤーを御存知なら、話は早いですが。私が軍事同盟  
を持ちかけたのも、それが理由だからです。私たち植民星の海賊たち  
が戦う理由はただ一つ。ステラ・スレイヤーという殲滅兵器を無くす  
ため。戦争の趨勢に興味はありません。宗主星側の勝利に終わって  
も、実際そうなりそうですが、海賊という戦力は何かと利用価値があ  
りますから、宗主星は海賊を見逃すでしょう。植民星の力を抑える勢

力として使えますから」

何言ってるのよお、グリユーエルう。と茉莉香は心の中で呟いた。「しかしステラ・スレイヤーは許せません。あれは私たちのご郷を根絶やしにするもの。白鳳海賊団はこれからガーネットA星に戻ってステラ・スレイヤーを破壊するつもりですが、問題はそれでは終わりません。施設を破壊できても技術は残ります。宗主星はその気になれば再びステラ・スレイヤーを建設できます。その手段を奪う、それが海賊の目的です。——先程、セレニティーから問い合わせがあったと仰っていましたが、帝国としても看過できない事態ではありませんか？」

「それで、帝国の戦力を背景にした軍事同盟という訳ですか。では、海賊である必要はないではありませんか。植民星連合としてでも不都合はない」

「すでに私たちの生命体を知っているご様子。帝国は内政干渉が原則。看過できない殲滅兵器のことも知っている。しかし何の動きもなく見過ごそうとしている節さえある。これには帝国の内情が関係していると思いますが」

グリユーエルはあえて帝国が文明もろとも滅ぼしてしまう可能性は伏せて、もう一つの可能性を示唆した。それは銀九龍が始めに言った海賊ギルドと業者の話。企業連合体ラキオンと同じ臭いがしたからだった。

「帝国の内情とは——。何をご存じなのですか？」

「いえ、なにも。ただ同じような事例と遭遇したことがありましたから。——戦争を、プロデュースするような」

諜報部員のナッシュフォールは戦慄した。この少女は一体どこまで知っているのだ。海賊ギルドと闇商人を追い掛けていて、ステラ・スレイヤーを持ちかけて超新星爆弾の技術をリークした影の存在。謂わば星間戦争を演出している者がいることに諜報部が気付いたのは、やっと半年前のことだ。内偵を進めているが未だその正体は不明である。

「で、具体的にどうするつもりなのです」



歴戦の猛者である筈の自分が、冷汗をかき始めていることに驚きながら、銀九龍は続けた。

「ここに降伏文書があります。これに相手無記名のまま植民星連合政府の署名付きで銀河帝国にお渡ししましょう。そうすれば植民星連合は銀河帝国の一員。宗主星への抑止力になります。宗主星は自分が威嚇するつもりより前に銀河帝国に乗り出されれば、超新星爆弾の事実を有耶無耶のうちに揉み消すでしょうね。圧倒的戦力の前に降伏です。出来れば、双方ともにしこりを残さないよう、降伏は両者同時に行われることが望ましいのですが」

「あなたは、自分が属する星系の政府を脅迫するのですか」

「戦争終結にはそれしか方法がありません。それが出来るのは、自由な戦力である海賊です。第一、勝てる見込みのない戦争を始めた時点で、政府としては失格です」

「ですよね、と独立戦争史を学んだ時から感じていた茉莉香は思った。

時の勢いで戦争をおつ始め、終結の着地点も見出せないまま泥縄式に私掠船免状を発行し、ステラ・スレイヤーという最悪の兵器まで引つ張り出した責任の一端は、植民星連合にもある。もし資金が潤沢で、超兵器の話が植民星側にあれば、植民星政府もためらわず乗っただろう。辿り着く結末はどちらも一緒だ。

「帝国は領域を拡張られ、無血裏にそれを成し遂げた名誉が得られます。それに、この戦争をプロデュースしている影を出し抜くことにもなります。影をあぶり出すよい機会になるのでは」

グリユーエルからの提案に、三人の男たちは唸るしかなかった。

「帝国と軍事同盟が結べた場合、帝国はいつ動けますか」

「事実関係の確認。なによりあなたたちの戦力も含め不明な点が多すぎます。先遣隊の調査などを経て、帝国政府の承認が要りますから、早く見積もっても一ヶ月」

ナツシュフオールが淡々と述べる。

「二ヶ月、ですか……。三日後には乗り出して来てもらいたいのですが」

「それこそ、無理というものです」

二人のやり取りを聞いていた茉莉香が、なかに割って宣言した。

「じゃあ銀河帝国に宣戦布告しちゃいましょうか」

茉莉香の突然の言葉に、グリューエルは目を丸くする。

「私たちは、一刻も早く帝国に乗り出して来てもらいたい。そこで銀河帝国との軍事同盟は交渉決裂という事で、白鳳海賊団は海賊らしく帝国艦隊の士官さん三人を拉致誘拐。当然帝国は動かざる負えない。あなたたちも私たちと一緒に来ることで、内偵を進めている影の動きを直接追うことが出来る。いかがですか」

「まあ、あの時のやり方ですね」

グリューエルは、ぱあつと明るい顔になって、以前弁天丸が、銀河帝国のお尋ね者になった時のことを思い出した。あの時は、セレニティーも少なからず弁天丸に係わったのだった。

「ご先祖様を前にして心苦しいんだけど…」

茉莉香はピエトロ・ホーガスの顔をチロリと見ながら頭を掻いた。

パレスホテルで秘密交渉を行っていた異星人の姿が、交渉に立ち会っていた三人の帝国士官と共に忽然と消えた。

そして白鳳海賊団と名乗る異星人の船が、抜錨の許可も得ず、いきなりポルト・セルーナを出航していった。

——そこで奇妙なことが起きた。ポルト・セルーナと展開している第七艦隊は、脱走を阻止しようと試みたが、生命維持に関するものを除いてすべての電子機器が機能停止し、追うことが出来なかったのだ。

「いったい何をしたのです」

事態をオデットのブリッジで見っていた帝国士官が尋ねた。

「ちよろーつと、対抗措置を取らせていただきました。十字砲火の中じゃ太陽帆船はひとたまりもないですからね」

茉莉香がコンソールを操作しながら答える。

白鳳海賊団は、数多の軍艦がただ黙って見守る中を、悠々と進んでいく。

「あつそうそう、挨拶しとかなくちや。クーリエ、回線繋がった？」  
「いつでもいいわよー」

クーリエの緊張感のない声が返って来る。

「じゃ部長、お願いします」

「おう。『銀河帝国艦隊殿。本文、ばかめ』」

「ぶちよー、違うでしょー」

「わりいわりい、一度やってみたかったんだがなー」

リンがペろつと舌を出して文章を打ち直す。

宛て、銀河帝国艦隊殿。『白鳳海賊団は貴殿との同盟交渉が決裂したと判断し、宣戦を布告します。なお同席された帝国士官にはこのまま同行をお願いしますので、悪しからず』くじら座宮たう星系海の明け星、白鳳海賊団オデット船長キャプテン・茉莉香。

「いっくよー」

打ち終わつたと同時に、クーリエが電子戦のトリガーを引く。

白鳳海賊団から発信されたメールが、いきなりポルト・セルーナの第七艦隊司令部のメインディスプレイに映し出された。と、一呼吸遅れて空域に展開している艦船すべてのブリッジのメインモニターに同じ文面が現れた。

この事態は、じつは第七艦隊だけではなかった。銀河帝国に展開している、一から七まであるナンバーズ・フリートの艦隊司令部と全艦船のメインディスプレイに強制表示されたのである。その数、ゆうに数千万隻。帝国統合総司令部は今頃大騒ぎだろう。

帝国統合総司令部が後で足跡を辿つたところ、まずポルト・セルーナの第七艦隊司令部がハッキングされ、そこから帝国統合総司令部のメインコンピューターに接触。最優先軍用回線にクラッキングを掛けられ全艦隊に拡散された、という事が判つた。問題はこれが全く気付かぬうちに、瞬時に行われたという事実。しかも足跡は故意に残された節があつた。つまり完璧に決められてしまったという事だ。

「あなたたちは、いったい何者なんです」

銀九龍ら三人は、口の中が乾くのを感じつつ心から思った。

帝国艦隊が度肝を抜かされている間に、三隻の海賊船は超光速跳躍

に入り、ポルト・セルーナの宙域から姿を消した。

## 第13話

一二月二八日、ガーネットA星系宙域。

虚空に年老いた赤色巨星がぼつんと輝いている。何の変哲も無くわざわざ訪れる者のない孤独な宙域に、いきなり数十のタッチダウン反応が現れる。

故郷の命運とリベンジを賭けた、植民星連合の海賊たちだ。迎えるは、宗主星特命プロジェクト防衛艦隊とステラスレイヤー要塞。

船数でいえばほぼ互角。しかし戦闘力は、宗主星側が経験豊富な重武装の戦闘艦であるのに対し、海賊側は旧式の戦艦から改作作業船まで種々雑多な寄せ集め部隊。しかも艦隊戦は今回がまだ二回目という、まるで比較にならない戦力比。

「やつらは遮二無二ステラスレイヤーに突っ込んでくるしか手が無い。第一線は敵を攪乱分断させ、周囲に展開している第二線で各個包囲し撃破。そのあと残存船には構わずステラスレイヤーに戦力を集中し、あえて特攻を仕掛けて来る部隊を要塞と共に叩く！」

ステラスレイヤー防衛艦隊司令は、次々とタッチダウンしてくる海賊どもを見ながら、余裕で各艦に下命する。

僅か四日前にあれだけこてんぱんに叩かれたにも関わらず、応急処置で再び向かって来ようとしている。まあ彼ら側にしてみれば、後が無いのだ。こんなオーバーキルな兵器を使わなくとも戦争は間違いない勝利する。だが、主人に逆らった代償として彼らの故郷は我々が次に飛躍するための生贄となってもらおう。

死兵。という言葉が司令官の頭をよぎったが、すぐに否定した。所詮寄せ集めの素人艦隊。何ほどの事が出来よう。ましてや奴らは海賊。勝てない戦をしない奴は最期の切所で腰が引けるものだ。玄人の格というものを思い知らせてやるだけだ。

加えてこの宙域。寿命が近い主星は重元素の核融合が燃え尽きようとしており、重力が弱まってブヨブヨに膨らんでいる。重力と熱エネルギーのせめぎ合いが星を不安定にし、宙域は放出される太陽風と

波打つ重力場で荒れている。船を通常航行させるだけなら問題ないが、精密な射撃管制と連携が取れた操舵が必要とされる艦隊戦には難所だ。

しかし。

「うわ、見事に荒れてるわね」

タッチダウンと同時に鳴り出した各種警報にスズカは言った。この荒れた海と相手の連携に、前は散々翻弄されたのだ。

「弁天丸から連絡」

通信担当のロック爺が、いつもと同じ落ち着いた声で報告する。

「各艦タッチダウンと共に予定宙域に展開完了。敵船団は三段階で主星黄道面に配置されている」

「デコイは？」

「タッチダウン位置に停止。各艦はステルスモード実施中」

レーダー担当が答える。

「予定通りね」

意識不明の重傷を負った父親に代わって三日前に白鳥号の跡目を継いだばかりのキャプテン・スズカは、船長席のメインディスプレイに目を落とした。

もう何度見直したか判らない高輝度ディスプレイには、ガーネットA周辺に展開する敵味方すべての艦艇の現在位置と航跡、そしてこれからの進路が映し出されている。

「全船に暗号通信開いて。」

ロック爺が回線を開く。

「こちらシラトリ・スズカです。海賊会議時の打ち合わせ通りでお願いします。」

コーバック級護衛艦に対しては、軽巡洋艦クラスで対処。二隻一組のツーマンセルで。

ビラコーチャとシャングリラ、サザンアイランドとダークスター。ロウ・オブ・ウオーとラブマシーン」

おう、と返事が返る。

「アグリーガート級打撃巡洋艦には重巡クラスのグラマラス・リ  
デイス、デスシャドウ、ビッグチャッチ、シルバーフォックス、エル・  
サント、シンドバット。これもツーマンセルで。」  
任せときな、の声。

「グレンスミス級高速戦艦とタルボット級戦艦には、足回りの早い  
弁天丸、バルバルーサ。村上丸、白銀号、バックスラッシュ、迦陵頻  
伽。これはスリーマンセルで当たる。」

マラコット級戦艦にはこちらの戦艦クラスに火力の高い重巡クラ  
スを加えたコンボイで当たりましょう。」

よるんで、の言葉。

「単艦では臨まず二隻ないし三隻一組となってこれに当たる。まず  
前衛の護衛艦を中心

に叩き、敵艦隊の陣形を崩す。こちらの陣形は変則的な輪形陣。敵  
の機先を挫いたところでステラ・スレイヤーのコントロール要塞を一  
気に目指す。輪形陣の中心には黒鳥号と白鳥号が。——それと、本当  
に申し訳ないのですが・・・」

スズカが言葉を濁すのを、黒鳥号から通信が入る。

「おう、指を咥えて見てるしかないと思っていた黒鳥号に、一番の見  
せ場を用意してくれたんだ。見事、体当たりをかましてやるよ」

黒鳥号は中破で装甲と機関は何か間に合ったのだが、主砲と射撃  
管制系にダメージがひどく撃ち合いが出来なかった。海賊船の火力  
では要塞の厚い防壁を破れない。破壊にはただ一度の確実な攻撃し  
かない。そこで、海賊船の中で一番装甲の厚い黒鳥号を砲弾代わりに  
要塞に体当たりさせ、転換炉を暴走させてステラ・スレイヤーを道連  
れにする事にしたのだ。その間、要塞の集中砲火を浴びるため白鳥号  
は黒鳥号の後衛に付き電子妨害を行う。

「黒鳥号のクルーは最終突撃前にバルバルーサに移乗して下さい。  
バルバルーサ、タイミングをお願いします。」

作戦の最終確認を行うスズカ。

「あ、それともう一つ最終確認」

「一番若くて船長なりたての私が、艦隊指揮取っちゃって本当にい

いんですか？」

海賊会議の時、旗艦に白鳥号が選ばれ、その船長であるシラトリ・スズカが艦隊指揮を執ることになったのだ。

「この作戦は電子戦がキモになる。白鳥号以外に旗艦はありえねえ」

と、ビラコーチャから。

「スズカちゃん、宜しくサポートお願いするぜ」

弁天丸のちるそにあん文左衛門が、髭面でウインクする。

「だから、ちゃん、じゃないって！」

ビッグキャッチ、バルバルーサからも返事が来る。

「デコイにフネの情報を全て渡したんだ。俺達の生殺与奪はアンタに預けたんだよ」

「歳なんざ関係ねえ。経験の有る無しも問題ない。艦隊戦はみんなまだ二度目なんだからよ。それよりも、負けることしか考えられなかった俺らと違い、アンタは勝つことだけを思っていた。まったく大した海賊だ」

スズカはみんなからの言葉に、ゆっくり目を閉じ覚悟した。

——今動き出せば、確実に先手を取れる——

——時間は、私たちの味方——

——決断は、自分が選んだベスト！——

「では、そろそろ始めましょう」

静かに言葉を継ぎ、号令する。

「野郎ども、海賊の時間だ!!」

『おおう!!!』と、鬨の声が宙域に響き渡る。

「統合参謀司令部に打電。——『天気晴朗なれど、波高し!』——」

宗主星特命プロジェクト防衛艦隊と海賊船白鳥号から、ほぼ同時に、同じ文面がそれぞれの統合参謀司令部へ送られた。これを、宗主星側は「我が方圧倒的優位」、植民星側は「極めて不利」、として受け取ったという。



## 第14話

『戦争がプロデューズされている可能性がある。』

ユニバー星系の宇宙大学に到着したところで、ジェニーはポルト・セルーナで第七艦隊との接触を終えたオデットⅡ世からの通信を受けた。

いまアテナ・サキユラーの居間にいる。書架に入りきらず、そこかしこにうず高く積まれた書籍やレポートの山。木調を主としたアテナの机。この時代でも恐らく年代物の調度品。シツクにまとめられた室内は、雑然としながらも気品を感じさせる。

先日訪れた、地獄の一丁目と呼ばれる勤務期間の長い教授陣らが住む区画とは異なるが、この時代の担当教官も、ユニバー星系第四惑星タニアの情報都市アカシアに居を構えている。違う家なのに、同じ雰囲気懐かしさを覚えるジェニー・ドリトル。

「あら、前にも一度いらして?」

そんな様子に気付いたアテナが声を掛けた。

「いえ、初めてです。——先程、オデットⅡ世から連絡が入りました」

ジェニーから通信文を受け取ると、それに目を通した。

「戦争をプロデュース。成程ね。それなら辻褄が合うわ。超新星化プラントを見て疑問だったのよ。赤色巨星の超新星化はそれ程難しい技術じゃない。重力子弾か縮退炉でも放り込めば事足りる。でもあのプラントは、ただ超新星を起こすのでなく恒星のエネルギーを制御する物のようなの」

「元々は、恒星から抽出したエネルギーを離れた場所に亜空間転送する計画だったようです。でも上手くいかず、それを恒星を暴走させる兵器に転用したもののようです」

ジェニーが捕捉する。

「上手くいかなかった、そうね基礎技術をすっ飛ばしてるのだもの。成功する訳ないわ。失礼だけど、あなた方の文明は恒星制御できるまでの技術水準には達していない。制御には恒星のエネルギーに耐え

うる単結晶のジェネレーターが必要なだけでなく、まだ理論段階のレベル。単結晶物質なんてものは作り出せない。でも現実に単結晶はあり、プラントが組み立てられている。誰かが手配したんでしょね。恒星制御に使える大ききの単結晶物質を作り出せるのは、銀河帝国でも限られるわ」

文面に目を落とすつつ、遠くを見る眼差しで長命種は続けた。

「武器商人は、最初ゲリラに安価で銃火器を渡し火種を作る。当然政府は取り締まるために武器を買う。双方に商売して火種を育てれば紛争地域の出来上がり。どちらが勝利したって武器商人は構わない。興味は紛争地域がより大きくなる事に移っており、急激に軍事力を増した国に周辺は脅威を覚え、あとは不信と野心を吹き込むだけ。武器商人が企業の場合もあるし軍産複合体の国家であることもある。どの文明圏でも経験して来たことだわ。実際火の粉が武器商人自身に降りかかるほど紛争が大きくなって、それでも負の連鎖は止められずに減んでいった文明も沢山ある。」

「だから、武器の取引は帝国内では厳しく制限されている。もちろん政治家が関係することは御法度。帝国自身の保身もあるけど、帝国版図とその周辺すべての文明圏に対する責任が銀河帝国にはあるのよ」

武器商人。という言葉にジェニーは忸怩たる思いを感じた。自分の実家であるヒュー・アンド・ドリトル星間運輸会社は、宗主星に本社を置くドリトル運輸と帝国内で商社を営んでいたヒュー物産が独立戦争後に合併し、武器取引で急成長して来た会社なのだ。現に社長であるジェニーの叔父も闇取引の前科がある。

「でも武器商人が悪という訳じゃないわ。法律を順守してるなら立派な経済活動よ。それに武器の発達が技術の発展と不可分なのは事実なのだし、結局は武器を持った当事者の責任。そりゃ大きな力は魅力だろうけど、使うかどうかは選択だわ。それよりも、どうして紛争が起こったのか。その原因を当事者が見つめないと解決には至らない」

「あなた方の独立戦争も、はじめこうやって焚き付けられたんで

しようね。それにあなた方は乗ってしまった。始めたのがあなた方の文明圏の武器商人か帝国の闇商人かは判らないけど、——おそらくその両方だとは思うけど、それを利用してもっと大きな紛争を仕掛けようとした者がいる。一介の闇商人では開発は無理。大きな軍産企業体か帝国以外の勢力が必要だけど、作ろうとすれば忽ち帝国政府に知られてしまう。知られても揉み消せるだけの権力を持った者がいる」

「それが戦争をプロデュースしている黒幕」

「そういう事。国家反逆罪ものね。——でも反逆と言えば、同盟が上手くいかなかったからって、いきなり銀河帝国に宣戦布告って何？あなたたち何考えてるの」

銀九龍ら帝国士官の三人を交えたやり取りの最後に、「行きがかり上、銀河帝国に宣戦布告することになりました。」と短く付け加えられた一文を見て、アテナは呆れた。

「ははは、何やってるんでしようね。手っ取り早く帝国軍を引っ張り出すためなんでしょうけど」

内心、大丈夫なお、と思いつつ愛想笑いをするジェニーだった。

「とりあえず、黒幕を炙り出すんでしょ。核恒星系に行きましょう」  
「核恒星系ですか？」

「帝国艦隊や情報部に気とられず、武器取引が自由に出来、辺境勢力や密輸業者を動かせるなんて、中央によほど太いパイプを持っている人物よ。しかし自分は絶対に表には出ない。そんな人間が潜む穴倉には格好の場所で、帝国じゅうのあらゆる情報が集まり、しかも秘密裏に交渉が進められるのは、此処しかないわ」

そう言つて、ディスプレイに表示された星図の一点を指差す。

「主星系連合の第一星系。銀河元老院、惑星セナート」

見覚えのある、スポーツタイプのコンピューターに乗り込むと、二人を乗せた低い車体は、前の時と同じく滑らかに走り出し急上昇する。あつという間に惑星タニアは点となり、惑星軌道上を離れ恒星間空間に出る。

「凄いですね、やっぱり超光速跳躍出来るんですか」

「凄いでしょ、最新式なのよ。まだ帝国内でも数十台しかないわ。やっぱりって事は、前にも乗ったことがあるの?」

以前、アテナに乗せてもらったことがあるとは言えず、適当に誤魔化しながら、ジェニーはアテナに質問した。

「なぜ、あなたは、私たちのためにここまでしてくれるのですか」

「貴方たちのためじゃないわ。私たちのためよ。あなた言ったじゃない、事態の当事者としてどうするのかって。今回の事は自分達とは関係のない、未接触の文明圏でのことと思っていた。でも帝国は接触していて、戦争を引き起こした中心にいる。しかも事態は帝国の趨勢に係わるほど変化している。帝国貴族として、これはもう立派な当事者の懸案なのよ」

「帝国の趨勢って」

「もう外交レベルの問題になってるって事。銀河帝国と姉妹関係にあるセレニティー連合王国から、非公式に照会があったのよ」

コンソールを操作して、気品のあるセレニティーの紋章が入った文書を映し出す。

「当然、機密だから中身を確認することは出来ないけれども、おおよその見当はつくわ」

あの聡明そうなプリンセスがセレニティー王宮にいる長命種に連絡したとすれば、当然こうなるだろう。恐らく、ステラ・スレイヤーの持ち主側にも揺さぶりをかけているに違いない。

「ステラ・スレイヤーが使用された後も同じ展開だと思うけれど、あんな殲滅兵器の存在は周辺の星系にとっては脅威で大問題。使われたあと適当なところで銀河帝国の人間が関与していたことを匂わせれば、銀河帝国じゆうに不信と反目が広がり大混乱。より大きな戦争をプロデュース出来る。重要なのはそれが発動される前だったって事。あなたたちの歴史通りなら殲滅兵器は破壊されて使用不能。状況証拠となる下っ端の闇商人はあなた方に任せるとして、使われる前に露見したことは、戦争をプロデュースした側にとって計算外のはず。きつと足を出す」

アテナはドライビング・ステイックをぐつと握ると、一気に強加速を掛ける。

「さあ跳ぶわよー！」

フロントの前方に蒼い光の条が走り、コンピューターは亜空間の中へと超光速跳躍した。

## 第15話

ポルト・セルーナからオリオンの腕くじら座宮たう星系へ超光速跳躍の途中、茉莉香たちはガーネットA星系でのステラ・スレイヤー破壊の報告を受けた。

嬉しそうなグリューエルの報告を聞き、オデットII世に歓声が上がる。

事前の作戦通り、短艦では向かわず予定の空域に敵を誘い出しての夾叉攻撃。敵が都合よく挟み撃ちできる場所にやつてくれる訳もなく、海賊たちは一寸したズルをやった。

敵が待ち受けているガーネットA星空域にタッチダウンをすると同時に、自分の船舶情報を仕込んだデコイを放出。自分は相手がレーザー波を出すと同時に電子攻撃でステルスを掛け、デコイが空域に現れた本物と思わせたのだ。光学観測していればそんな技も通用しないが、宇宙空間で相手の船が肉眼で見える距離というのは、衝突しているのと同義語なほどのニアミス状態なのだ。艦隊戦ともなれば当然単艦同士の戦闘よりも距離を置き合い、超光速レーザーによる観測とレーザー波が帰って来るまでの時間差から予想位置を計る頭脳戦がものをいう。相手がリアルタイムで視認できない面では、潜水艦の戦いに似ている。そこで行われるのが、相手に自分の位置を見誤らせる電子戦。

デコイの操作は白鳥号が行った。電子戦なら戦艦並みの出力を持つ。相手のレーザー波に応じてデコイが適当なノイズや干渉波を載せて返してやる。そのためにはデコイごとに各海賊船の船体データが必要となる（船毎に反射波の個性が異なるため）が、生殺与奪権を渡すようなものなのに一匹狼の海賊たちは快くデータを供出した。それだけ今回の作戦に掛けたのだ。予め決めた空位域に海賊たちを先回りさせ、敵をデコイで誘導。戦闘記録が（都合よく）撃たれに移動していた理由がこれだった。

宗主星側が海賊を舐めてかかり、空域を詳しく精査しなかったことも幸いして、あとは七面鳥撃ち。戦線はズタズタにされ、おかしいと

気づいた時にはステラ・スレイヤーへの一点突破を許してしまっていた。要塞の火力が突っ込んでくる黒鳥号に集中する。黒鳥号の装甲はボロボロになったが厚いバイタルコアまでは届かない。それに致命的な直撃は電子妨害を全開にした白鳥号によって逸らされた。黒鳥号は自動航行のまま全速突進で衝突し、キングス弁を抜いて自沈。転換炉の暴走までに要塞からの守備隊撤退の時間を与えた。

「茉莉香からスズカへ。ご苦労様、大勝利おめでとう。」

「スズカから茉莉香。ありがとう。おかげで敵味方双方とも、驚くほど怪我人は出なかったわ。戦死者は居なかったんじゃないかしら。——もう、血は見たくないから」

これが、キャプテン・スズカ不殺伝説のデビューだった。圧倒的不利な中で完全勝利、しかも双方に死者無しという。

血は見たくない。そう言うと、スズカは言葉を区切った。

「でも本当の戦いはこれから。あなたたちの未来を守りたいのだけど……この戦力差だけはどうすることも出来ない。——期待に添えなくて、ごめんね。」

これからの戦いは、白鳥号の力だけではどうすることも出来ない。向かう相手は今の戦闘とは比べ物にならない程の戦力。たとえ植民星側が白鳥号のように電子戦で優位に立てても、圧倒的な物量で、しかもミサイルなどの物理攻撃で飽和攻撃されたら防ぎようがない。

スズカの声は死を覚悟したものと同時に殺し合わなければならぬ悲しみに満ちていた。

自分の故郷が滅びようとしているのを前にしたスズカに、茉莉香は言った。

「でも——、そんなに悲壮にならなくてもいいんじゃないかな。だって、私たちは今ここにいる」

「時間は、私たちの味方。でしょ。」

茉莉香の言葉に、はっとして肩の力を抜くスズカ。予定調和ご都合主義と言われようとも、茉莉香たち未来の存在は今後を信じるに足る証だった。

「こちらからも、お詫びがあるのだけれど……」

茉莉香は続けて、申し訳なきそうにポルト・セルーナでの銀河帝国とのいきさつを話した。自分たちが植民星連合の海賊を騙って帝国と交渉したことを。

ポリポリと頭を掻きながら内容を説明する。

「でも銀河帝国とは大きく出たものね。本当に帝国艦隊が乗り出してくるの?」

「ええ、植民星連合政府が降伏文書に署名すれば」

「二介の海賊が銀河帝国の名前を出したところで、政府がおいそれと信用しないわよ」

「それはそうなんだけれど、いちおう他ルートを通じて植民星連合と宗主星に知らせてあるから。・・・ちよつと事実とは違うけれど」

「他ルートって・・・」

なにをどうしたかは判らないが、どうやら茉莉香たちはこの戦争を終結させるため銀河帝国を引っ張り出すべく奔走してくれているらしい。でももう一つ爆弾発言がスズカを待っていた。

「で、あと植民星の海賊は、いま銀河帝国のお尋ね者になっちゃつてるから」

銀河帝国を味方につけると言いながら、当の相手に宣戦布告とは。

「あなた、いったい何やってきたの。辺り構わず喧嘩売るタイプ?」  
呆れるスズカ。

そこに男性の声が入カムに割り込んできた。

「お取込み中すみません。私は第七艦隊第58突撃機動艦隊司令の銀九龍といます。辺境海賊ギルドを追っている中で彼女らと出会いました」

「帝国情報部のジエームズ・ナツシュフォール。帝国内のある勢力について内偵を進めていて、あなた方の星間戦争に行き当たりました」

「辺境基地ポルト・セルーナの治安を任されている軍警察のピエトロ・ホーガスです。帝国を訪れた初めての異文明である海賊の監視のため同行しています。一応、立場上では三人とも誘拐されたことになっていますが」



自己紹介を受けて茉莉香はスズカに説明した。

「とりあえず、利害の一致というやつで、三人に御同行していただき  
ました」

何やら訳の解らない事態になっている。という事だけは判った。

「どお、銀河帝国はちゃんと私たちの後を追ってる?」

スズカとの交信を終えた茉莉香は、リーダー担当のウルスラに尋ね  
た。

「順調に追跡中。でも数が少ない。第七艦隊じゃなく別働隊。んー  
データからだど第58突撃機動艦隊。銀九龍さんよこの艦隊だ」

「そりゃ自分よこの司令が拉致られたんだもの。真つ先に追いか  
けて来るわ」

チアキ・クリハラがやれやれという表情で言う。

「うーん、第七艦隊ゼンプで追っかけて来てくれると思っただけ  
どなー。意外とケチ」

「アンタ、帝国きつての実力艦隊とやり合うつもり? 突撃起動艦

隊だって第七艦隊選りすぐりの精鋭部隊なのよ!」

「そのままたう星系まで引っ張って、独立戦争に巻き込んだじゃおー  
かなーって。ダミーより実物の方が説得力あるし」

船長席にもたれて、ケチとか出し惜しみとかブツブツ文句を垂れて  
いる茉莉香。

「貴方ねえ、実力を持った大戦力がいきなり戦場に引きずり出され  
て、どう状況が変化するか予想がつかないわよ。実体を伴った戦力。  
そこんところお解り!?!」

「帝国艦隊が、いきなり攻撃するとは思えないんだけどなー」

そこに銀九龍が説明する。

「あなた方の実力が判らないから出て来ないのですよ。いきなり帝  
国艦隊の通信網を中枢まで乗っ取れるような相手ですからね。行先  
はその母星。恐らく情報収集に追われている筈です。第58突撃機  
動艦隊はその先遣隊と言ったところでしよう」

「私たちの文明に注目してくれたのはいいんだけど、まどろっこ

しい事してる時間は無いのよねー」

「情報収集もですが、まだ表だつて帝国は動けないのですよ。ステラ・スレイヤーの件がありますからね。ナンバーズ・フリートが動くとなれば正式な外交事例です。状況証拠ばかりで物的証拠も犯人も押さえてない中では、今後の帝国の外交に著しい不信と支障が生まれます。事実、セレニティー連合政府は疑念を伝えてきています」

ジェームズ・ナツシュフォールが捕捉する。

「ステラ・スレイヤーの単結晶は抑えました」

転換炉の暴走でも破壊できなかった単結晶物質は、いま戦利品として白鳥号の衝角にある。再びステラ・スレイヤーを建造するのに不可欠な部品を、そのまま放置するわけにはいかなかったのだ。

「それはまず安心材料です」

「それじゃあ、犯人の炙り出しが必要ですね。黒幕を慌てさせるアクシデントが」

「ステラ・スレイヤーの帰趨は、それを手配した者にとって気になる筈だ。それ程ヤバイ代物つてわけだが、ステラ・スレイヤーが破壊されたと知れば、単結晶物質の行方が心配。売った相手が回収したのならしいが、それ以外だと自分の足が付く。きつと海賊の後を追つてたう星系に姿を現す」

長年追跡の相手を思つて、銀九龍の目が光る。

「じゃあ、ネズミ狩りで行きましょう！」

そう宣言すると、茉莉香は故郷星へのタッチダウンに備えた。

## 第16話

温大夫は焦っていた。

最近勢力を伸ばしてきた辺境海賊ギルドというシンジケートに単結晶を注文したが、届いたのは役に立たない対物質の単結晶。

「支払われたのが前金半分だから後金が無いとブツは渡せないよ」と来たもんだ。ふつう支払いは現物が届いた後だろうと粘ったが、それはおたくと注文主との交渉だと見透かすような顔で取り合わない。こちらの弱みを突いているのだ。

注文主は銀河帝国外の文明。まだ帝国と外交が無いから銀河クレジットは使えない。支払いも対価為替となる。まあ見合うエネルギーや鉱物資源という物々交換だ。しかも闇ルートやダミー口座を介してとなるので面倒も多い。当然手間と時間がかかる。相手も海賊。こちらが後ろめたい商売だと知っているから簡単に横紙破りを仕掛けて来る。

「契約が全うできない会社なんて、この業界、この先誰も相手してくれなくなるねえ」の言葉に、渋々後金肩代わりで品物を受け取り、相手側に納入した。無理をしてもこの取引を受けたのは、契約金もだが、裏のシンジケートに繋がりが持てるようになることが魅力だった。零細のヤークブ商会が大きく飛躍できるチャンスになると思ったからだ。——それが半年前。

ところが、三ヶ月経つても一向に支払いがされない。ダミーや闇会社を通してだから遅くなるのは織り込み済みだが、いくらなんでも遅すぎる。三ヶ月というのはショートタイマー（短命種）にとって年と同じ時間経過だ。料金未払いなら品物を返してもらおうだけ。泣き寝入りはダークな業界では生き残れない。未開な僻地文明に舐められてたまるかってんだ。

単結晶の行方を色々探ってみて（それだけで結構経費が嵩んだ）、どうやらオリオン腕のあんたれす座ガーネットA星系にあるらしいという所まで突き止めたのがつい最近。

で、強制取り立てにやつてきたわけだが、どうも余計な動きのため  
に帝国軍に感付かれたらしい。自分の後々を第58突撃起動艦隊が  
嗅ぎまわっている。恨みを買うような覚えはないのだが、銀九龍の野  
郎は海賊ギルドを追うのに自分に目を付けたようだ。長命種どうし  
の争いに短命種を巻き込むってんだ。

メトセラは感覚時間が長い分とんでもなく時間をかけて事に当  
たつて来る。ショートタイマーにとって実にやりにくい相手だが、  
フットワークの軽さはこちらに分がある。これまでもそれで擦り抜  
けて来た。今度もさつさと済ませて、相手が乗り込んでくる前に遁走  
するに限る。だが、今回は何だか真綿で首を絞められているような感  
じがある。じわじわと包囲の手が伸びて取り込もうとしているよう  
な。

「くわばら、くわばら」

温大夫は、思わず首を竦めてガーネットA星宙域に超光速跳躍し  
た。

年老いた赤色巨星が、ぽつんと虚空に輝いている。他に目ぼしい  
星々もない孤独な恒星。

その軌道上に、破壊の後も生々しいプラントの残塊が浮かんでい  
る。大穴があいた要塞。そこに突っ込み大破している戦闘艦。宙域  
に散らばる船の破片。

「なんだあ、こりゃ——」

問題の品はこの恒星のプラント部品として使われたことを突き止  
めたが、やって来てみれば無人の廃墟があるだけ。ステルスの必要も  
ないようだ。

激しい戦闘が行われたようだが、大破して動けなくなったのはその  
攻撃艦だけのようだった。そして炭素体生物反応もない所を見ると  
戦死者は回収された様子。まあ死者が出なかったことは無いだろう。  
残骸の熱反応やエネルギー放射による空間の歪から見ると、戦闘はつ  
い最近行われたようだった。

温大夫は空域を丹念にサーチしてみたが、目的の単結晶は見当たら

ない。それらしい影がリーダーに掛かり回収してみたが、形が似ているだけの船の衝角だった。単結晶は同時に出来た反物質と対消滅させない限り破壊できない物質だ。ここにそれが無いという事は、誰かが持ち去ったという事。

温は取引の時に調べた相手文明の星間情報をライブラリーから呼び出す。

「宗主星と植民地とが星間戦争中、植民星側は戦力に不利があるため私掠船を動員し、独立戦争を継続している——。ってオイここでも海賊かよ！」

「宗主星はあんたれす座ガーネットAにおいて戦略プラントを建造。植民星側は海賊を使ってそのプラントを攻略中。なおプラントは何に使われるものかは不明——。まあこうして、破壊されたところを見ると、海賊の勝利だったわけだ」

そこまで読んで、待てよと思いついた。

「プラントの使用目的は不明って、単結晶はこのプラントで使われたんだろ。単結晶を恒星軌道上で使うとしたら、膨大なエネルギーを集約するジェネレーターの照準器ぐらいなものだ。エネルギー束をどっかに送るためとかの。だがこの文明はそんな水準には達していない。だとしたら使う方法は、エネルギーの暴発——」

超新星爆弾。

「冗談じゃないぜ！ そんな後先考えない殲滅兵器。そんな取り引きしたとあっちゃあ」

温の脳裏に、辺境海賊ギルドの若い代表ミューラ・グラントの顔が浮かんだ。

「あんの小娘、俺を帝国を引っ掻き回すためのだしにしゃがった！」  
まだ二十歳にも達していない（ように見える）少女の目を思い出した。取引の時のすべてを見透かすようなあの眼。

辺境海賊ギルドに単結晶を造り出す技術は無い。とすれば出所は帝国内。

「まったく冗談じゃないぜ。帝国の闇の部分がそっくり襲い掛かって来るようなもんだ」

下手をすれば、反逆罪。帝国内乱陰謀罪ものだ。何としても単結晶は取り戻さなければならぬ。そうすれば、手元にある反物質と対消滅させて無かったことに出来る。いやそれしか身を守る方策が見当たらなかった。

単結晶は、恐らくこの施設を破壊した海賊たちの手元にある。殲滅兵器の事を知って攻撃したのだ。兵器の基となる単結晶を相手に渡すようなことはしない。

星間情報の更新では、殲滅兵器の事は相変わらず載っていないが、プラントの破壊と、最終決戦のために宗主星側が圧倒的戦力で敵の本拠地に集約しつつありと出ていた。

場所は、くじら座宮たう星系。植民星連合艦隊司令部のある海明星。

温大夫は焦った。

## 第17話

白鳥号からの、第二次ガーネットA会戦が海賊側の勝利に終わった報告を受けて、植民星連合艦隊総司令部は、久しぶりに聞く朗報に沸き返った。敵戦力の漸減を計りありったけの兵力で当たっているが各戦線はポロポロ。それでも相手はまだ本気を出していないのだ。

しかも最終兵器の核となる部品は海賊が奪取したという。少なくとも植民星連合にとつて、故郷を丸ごと焼かれる最悪の事態は避けられたわけだ。

「総司令部から白鳥号へ、ご苦労様でした。海賊の愛国心に満ちた英雄的勝利を讃えます」

植民星連合海賊課のクリステイ・シャーウッド中佐から、白鳥号に連絡が入る。

「しかし、戦いはこれからです。宗主星はステラ・スレイヤーを失ったことで、一気に片を付ける決心をしたようです。現在敵兵力の六割と見積もられる一五〇〇隻が総司令部のある海明星に向かって進撃中。こちらは迎撃すべく全兵力をたう星系に集結しつつあります。海賊たちは速やかにたう星系に戻り、この最終決戦に参加されることを期待します。」

一五〇〇隻と聞いて、スズカは彼我の戦力比に圧倒された。輸送艦を含めての隻数だが戦闘艦は八〇〇を下るまい。かわつてこちらは総数で六〇〇隻。会戦までに全部間に合ったとしても七〇〇あるかどうか——。戦力比となると、考えたくもない差だ。

「それと確認します。ステラ・スレイヤーの核心的部分である照準器は、確かにそちらにあるのですか」

「はい。プラント要塞の反応炉暴走でもびくともせず破壊が不可能のため、現在白鳥号の衝角にあります」

海賊の戦利品は、その旗艦が務めたものの栄誉。船首衝角を失った代わりに、高々と掲げている。

「あれをバウスプリットって・・・、まあいいわ。白鳥号だけでも速

やかに帰還してください。たとえ決戦が敗北に終わっても、他の植民星に本拠を移してゲリラ戦を挑む時、照準器はこちらの大きな手駒になる」

「・・・あの部品が何なのか、判って言っているのですか・・・」  
スズカは静かに尋ねた。

「ええ、単結晶物質。私たちの文明ではまだ未知の技術よ」

「それで——」

と言いかけ、スズカは口を閉じた。自分の故郷が同じ思考だと言葉にすることが憚られたのだ。スズカは質問を変えた。

「聞きたいことがあります。今回のステラ・スレイヤーについて、他の勢力から照会はありませんでしたか」

「他の勢力って」

「私たちの文明とは異なる、まだ外交関係にもない星系などです」  
スズカの問いかけに少しばかりの沈黙があつてから、クリステイー・シャーウッドは応えた。

「ええ、あつたわ。貴方たちが第一次会戦を行った後、セレニティー連合王国とかいう所から。宗主星にも届いたようだけど、私たちの文明圏とは銀河帝国領を挟んでのお隣さんってところかしら。独立政府だけど帝国の保護国のようだから、まあ銀河帝国ね。——脅威と懸念を伝えてきたわ」

「私たちに使う気はないわ。でも抑止力にはなれる。だから無事に照準器を送り届ける事。それに私たちの未来が掛かっている」

「交信終わり。とクリステイー・シャーウッドの言葉と共に通信は切れた。」

通信を終えて、しばらくスズカは言葉が無かった。

かわりに涙が浮かんできた。

悔しさと、怒りと、悲しみが、ないまぜになつてスズカの心を責め立てた。自分たちは何のためにガーネットAで戦つたんだ？ 父はそのために瀕死の重傷を負った。何のために？ 故郷を守るため。そう確かに灼かれることからは守られた。でも他者が灼かれる恐怖を求めて戦つたんじやない。こんなの絶対正しくない！



キャプテン・スズカは臨時の海賊会議を要求、白鳥号で開催した。開催に当たる前、スズカは病床の父に思いのたけを打ち明けた。

「お前が白鳥号の船長だ。お前が望む通りに進みなさい。それだけの力が、お前にはもうある」

そう父親はスズカに助言した。

一大決戦を前にしての急な呼び出しに、海賊たちは何事だろうと集まった。第二次ガーネットA会戦で見せたスズカの鮮やかな采配ぶりに、また形勢逆転の奇策でも思い付いたのかと期待した者も多かった。実際それほどスズカの采配は水際立っていたのだ。しかし、ここで告げられた言葉は、大方の予想を裏切るものだった。

「白鳥号は、今後戦線から離脱します。」

「おいおい、何を言い出すんだ。植民星連合の命運をかけた決戦の前に敵前逃亡か。勝てない戦はしないのが海賊だが、時と場合によるだろう。」

当然、海賊たちから非難が上がる。盛り上がった士気を冷やして何になるというのだ。

「その、時と場合によるから白鳥号は尻尾を巻いて逃げ出します」

困惑する海賊たちの中で、ちるそにあん加藤芳郎は、顎髭を扱きながらニヤニヤしていた。

「なんでだ。白鳥号の衝角にはアレがあるだろう。アレを使えば、植民星連合にも勝ち目がある。少なくとも脅しには使えるぜ」

ちるそにあん加藤の言葉に、一同が気付く。そうだ。宗主星にステラ・スレイヤーを仕掛ければ一気に挽回――。

「だからよ。戦況報告の時も海賊課の課長さんから同じことを言われたわ。最優先で総司令部まで送り届けろって。それに植民星連合の未来が掛かってるんだって」

「でも、そんなものに賭ける私たちの未来って何？ あれは私たちの星を灼こうとした殲滅兵器よ。抑止力になると言った海賊課の言葉で、植民星政府も宗主星側とさして変わらない考えだと解ったわ」

「使う使わないは、当事者の意志だろう？」

「だけど、加藤船長の言葉通り「脅し」にはなる。実際使用しなくても脅しに使えば、周囲にとっては使われたと同じことよ。私たちは海賊よ。そりゃあ商売のために危ない橋も渡れば汚い手を使う事もある。でも同じ土俵に立っての話。女子供の命を握って脅迫するような真似はしない」

「で、キャプテン・スズカの考えはどうなんだ」

「宗主星にも植民星連合にも、この船首衝角は渡さない。殲滅兵器を持つ能力も意味もない海賊が持つてるのが一番。力づくで海賊の戦利品を奪おうとするなら戦うまでよ。たとえ宗主星でも植民星でも」

「それで、俺達を巻き込まないように戦線離脱するって訳かい」

燃えるような目でちるそにあん加藤芳郎が睨む。他の船長たちもスズカを睨んでいる。

「随分水臭いじゃねえか。船首衝角は確かに白鳥号の戦利品だ。どう使おうとキャプテンの自由。その海賊の上前を撥ねようとするようなコソ泥野郎を、俺達が放つて置くとも思ってるのか」

「宗主星一五〇〇植民星七〇〇、合わせて二二〇〇余と喧嘩かい。豪気だねえ」

海賊たちが笑って言う。しかし目は本気だ。

「絶対勝てない。助かる見込みがない。このまま最終決戦に臨んでも結果は同じ。だが海賊を忘れて死にたくはないぜ。せつかく捨てた命だ」

「で、このまま遁走しても面白くない。数に押されていずれば潰される。ここはひとつ俺達が居たことを世間に知らしめておいた方が良くないか」

おうおうと頷く声。

海賊らしからぬ玉砕の方向に話が向いているのにスズカは戸惑った。銀河帝国の事を伝えると一同意外な勢力の登場に驚いた。

しかし古参の船長が腕を組みながら、スズカの話に疑義を挟む。

「銀河帝国がウチらの星間戦争を知ってる？ で介入させようって訳か。だが本当に介入する意思があるのかねえ。あんな兵器の事を

知ってて未だに影も見せない。なにか裏があるんじゃないかい。俺が銀河帝国なら、そんな武器を弄ぶ勢力なんて危なっかしくて見てらんねえがな」

「あの単結晶は恐らく銀河帝国内で造られたもんだ。——撒き餌じゃないか」

「撒き餌？」

スズカが聞き返す。

「ああ、俺達の文明がどう出るかを見るためのな」

それは海千山千な海賊の深読みだったが、事態の推移を見ているのは事実。——まだ数名の帝国人と当事者のみだが。帝国政府は、この星間戦争を領外の部族間どうしの争い以上に評価しておらず、フィードワークの研究対象でしかない。ステラ・スレイヤーが使われたなら慌てて乗り出すだろう。文明丸ごとの消滅でもって。

「スズカ船長の話では他所様から苦情が来たそうじゃないか」

「堅気の衆に迷惑を掛けたとあっちゃあ、黙っていらねえなあ」

「ああ、自分とこ（文明）の不始末は、自分自身でカタを着けないとな」

「スズカちゃん、済まねえが俺達に付き合ってもらうぜ。まだステラ・スレイヤーは終わっちゃいない」

スズカの単独離脱の件はとつくに何処かへ行ってしまったって、海賊たちは勝手に話を進めている。先日の海賊会議とは大違いだ。

「それともう一つ」

まだあるの！とスズカは思った。

「これが一番肝心だ。俺達が銀河帝国のお尋ね者？上等じゃねえか！こんなブツを送り付けてきやがった銀河帝国に、きっちりオトシマエを付けてやらないとな」

一同そうだそうだの声と、一斉の拍手。

「だからみんな、決して死ぬんじゃないぞ。あと一番の大仕事が残ってるんだ!!」

おお、と鬨が上がる。

そうなのだ。海賊なのだ。みんな海賊たちだったのだ。

そんな場を見つつ、ちるそにあん加藤は、あっけにとられるスズカに振り向くと、パチンとウイシクした。

「こんなんで、どうだい。スズカちゃん」

「え・・・あ・・・こほん。——ちゃん、じゃない！」

## 第18話

「宗主星第一六、一七、一八遠征艦隊。海果星防衛ラインに入ります。」

「総司令部防衛艦隊が迎撃態勢に入りましたが、数が足りません。戦力比1対2」

戦闘指揮所のオペレーター席に就く遠藤ミキが、空域状況を読み上げる。

「たう星系外縁天体軌道上α領域に第二三、二四遠征艦隊、β領域には二一、二二遠征艦隊。いずれも重巡五、巡洋艦五、駆逐艦二〇！」

「補給線破壊艦隊をそつちに回して。整備が多少間に合っていないくても向かってもらおうわ。大至急！」

「オールト雲領域に敵主力多数出現!!戦艦群です!!」

敵戦艦群の到来に、総司令官が檄を飛ばす。

「命令変更、全艦第四惑星輝青星まで後退し内惑星軌道の機雷を起動。そこに最終防衛ラインを敷く！」

連合艦隊司令部は、蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。敵の本格的な攻撃が始まったのだ。敵総進撃開始の報を受けて、オリオ腕全域に展開していた全戦力を招集したが、

数が足りない。三日前から急に始まった敵の大規模な動きに、招集に間に合っていない艦もいる。上陸作戦には敵の十倍の戦力で当たるといのがセオリーだが、彼我差はそれを優に超えている。

敵情報を伝えるオペレーターの声も悲鳴に近い。

「海賊たちは何やってるのよ。最優先でと言ったのに。交渉のタイミングを逸してしまう」

クリステイ・シャーウッドが爪を噛みながらイライラしている所に、中継ステーション沖にタッチダウン反応が現れた。

「何! 最終防衛ラインを超えて直接侵入をゆるしたの!」

「いえ、違います。トランスポンダー・白鳥号、弁天丸、デスシヤドウ・・・海賊たちです!」

時空を歪ませ、次々と海賊船が空間復帰する。

「白鳥号より、植民星連合連合艦隊司令部へ。ただ今帰還しました。なんとか間に合ったみたいですよ」

「ステラ・スレイヤーの破壊、ご苦勞様でした。お陰で私たちの星が灼かれずに済んだわ」

「ミキ、ありがとう」

スズカと遠藤ミキが互いに交信を交わす。スズカとミキは同い年で幼馴染だ。この戦争でスズカは父の海賊船に、ミキは学徒動員で艦隊司令部のオペレーターをやっている。

「お父さんの具合、どうなの」

「うん、あんまり芳しくはないけど、命に別条はないわ」

そこにクリステイ・シャーウッド中佐が割って入った。

「二人とも私語は控えてください、今は喫緊の秋です。単結晶は無事持ち帰ってくれましたか」

「はい。白鳥号の船首にあります」

スズカが答える。

「よかった。本当にギリギリだけど間に合ったようね。すぐカーゴを差し向けます。単結晶を引き渡して下さい」

「——その前に質問があります」

「なあに？」

訝しげにシャーウッドが返す。

「この戦争を、どう終結させるお積りですか」

「それには私が答えよう」

シャーウッド中佐から中年の男の声に変わった。

「連合艦隊司令だ。諸君の健闘には感謝している。しかし戦争はもはや独立云々ではなく、どうより良く負けるかの問題なのだよ。」

「宗主星は力を誇示するためにステラ・スレイヤーを使う必要はない。他に対象を向けて誇示は出来るが、肝心の単結晶はこちらにある。今後の終戦交渉を有利に進めることが出来るというわけだ。単結晶と引き換えに、大幅な自治権の獲得とか宗主星を中心とした連合とか、所期の目標とは違うが、それに近いものは手に出来る可能性はある」

この期に及んでも交渉とか駆け引きとかに望みを託す司令官。まあ彼の立場からすればそうなのだろう。自滅覚悟で特攻を命じる司令官よりよっぽどましだ。

「戦争終結の暁には、超新星爆弾を使う側に入るわけですか」  
改めてスズカは尋ねた。

「使うかどうかは宗主星の判断だ。私たちに決定権はない。——それに、交渉決裂となった場合でも、今後のゲリラ戦に大きな抑止力となる。他星系からの問い合わせも来ている事実から見て、じゅうぶん脅威となり得る」

「使う使わないの決定権は、いま私たちにあります。使う考えを持つ相手に渡すことは、加担したことと同じです」

そしてスズカは、きっぱりと相手に伝えた。

「この戦利品を、あなた方に譲渡することは出来ません。」

「足元見て、値を釣り上げようってつもり?！」

「まあ、これまでの戦闘の支払いもただだけど、お金の問題じゃあ無いんで」

目くじらを立てたシャーウッド中佐を押さえて、司令官は続けた。

「それは裏切り行為と取るが、海賊の総意なのかね」

「裏切り? 植民星連合の仕事は請け負ったけれど政府の手下じゃないわ。私は海賊、自由に宙を駆る者。いちいち行動に政府のお伺いを得る謂われはないわ。——力づくがお望みなら、受けて立ちます」  
スズカの啖呵が宇宙に流れる。

「海賊に故郷はあっても、国家はありません。——ミキ、聞いている?」

オペレーター・コンソールで聞いているであろう、幼馴染の遠藤ミキに話しかけた。

「小学校のとき、よく一緒に海に行ったよね。中学に上がる頃から戦争が激しくなって、戦争の影と不安ばかりで、何処にも行かなくなりました。」

中学時代は勤労奉仕隊で碌に学校も行ってない。形ばかりの卒業の後、私は海賊。あなたは海賊課に勤務。あたしたちの少女時代

は、そんな碌でもないものだったけど、私たちの次の世代にはそんな思いはさせたくない。私たちが出来なかった学生生活をきっちり送ってほしい。そう思うの」

遠藤ミキは、黙って友達の声を聴いていた。聞きながら、彼女と最後に会ったのはいつだったろうと思いついて返していた。モニターを通してなら、ガーネットAに再出撃していったときに会っている。でもそれは業務連絡だけ。直接会って話をしたのは、

「そっか、中学の卒業式以来か・・・」

スズカの声は周囲に展開する海賊たちにも聞こえていた。そして思い出した。そうこの戦争は俺たち大人が大人の都合で始めたものだったことを。戦争に勝つこと以前に、次の世代のことを本当に思っていたのか。独立戦争は、次の世代が自由に発展できるために起こしたものだ。それはお題目だ。何の算段もなく始めちゃったのが実情だ。その時どんな政治的判断や取引があつたかは知らない。それこそ大人の事情ってやつだろう。でも俺たちはそれに乗っかって海賊を始めたのだ。

「私は船、あなたは港。ミキが港にいてくれたから私は安心して返って来れた。でもこのまま争いが続いていけば海も奥浜市も無くなってしまう。私は、ミキと遊んだあの海を失いたくない！ なんてこんな戦争始めてしまったのよ！」

そうなのだ、始めた以上は終わらせなくてはならない。しかし宗主星も植民星連合も、次の諍いしか考えていない。自分たち大人はそうだった。きつちり後始末をつけて終わらせなくてはならない。次の世代のためにも、この文明にステラ・スレイヤーを許さない勢力が居ることを知らしめなくてはいけない。——たとえ全滅となっても。

「スズカちゃんだけでも助けないとな」

インカムの、ちるそにあん加藤芳郎の眩きに、他の海賊たちは無言で頷いた。

白鳥号は六本のマストを全開にして、高らかに宣言する。

「白鳥号以下、私掠船免状を頂く海賊一同。ここに白鳳海賊団として独立を宣言し、殲滅兵器を弄ぶ宗主星及び植民星連合に対し、宣戦



を通告します！」

## 第19話

「ひゃあー、カツコイイー！」

コックピットに流れるスズカの声に、加藤茉莉香以下ヨット部員たちが嬌声を上げる。

「まるで茉莉香さんを見ているようですわ」

グリユーエルが両手を前に組んで惚れ惚れしている。

「無理無理。荒くれの海賊共を纏め上げて全方面に喧嘩売るなんて、私には出来ないわ」

ブンブンと手を振る茉莉香。

オデットⅡ世と弁天丸は、遠征艦隊のタッチダウンに紛れてたう星系に現れ、いま一二〇年後のアクティブ・ステルスを掛けて海賊たちの後衛にいる。

「船長、植民星連合艦隊が転進。海明星に向かっている。宗主星も距離を縮めて来ており、主力艦隊群は現在、海果星軌道を通過中。双方ともに発砲なし」

百目から報告が入る。

「目標は白鳳海賊団と思われる。最前線は輝青星と海明星の中間点を越え、もうすぐ射程圏内だ。オールト雲から外惑星軌道までいい具合に空いている。そろそろ始めるか？」

「やっちゃって、やっちゃって！」

射撃管制のシュニツァーからの助言に茉莉香が応える。

無言のままコンソールのスイッチを押すと、宇宙が爆発した。

「オールト雲領域に多数のエネルギー反応！」

「外惑星外側にもタッチダウン反応有り。多い！」

「五百、六百・・せ、一〇〇〇！まだまだ増える!!」

空域監視モニターの白い輝点は、瞬く間に画面を埋め尽くす。

たう星系全域に渡って連鎖的に起こるタッチダウン反応から、大型の戦闘艦が次々と通常空間に姿を現してくる。

「いったい何？ 宗主星の新手？」

「ち、違います。こちらの文明圏のものではありません！」

「・・・エイリアン・・・」

連合艦隊司令部だけでなく、宗主星側も驚愕した。後方にいきなり現れた大勢力に前進が止まる。

『こちらは銀河帝国第七艦隊。警告します。直ちに戦闘状態を解き停戦しなさい。現在、白鳳海賊団と帝国艦隊とは同盟関係にあります。白鳳海賊団への攻撃は当方への敵対とみなします。繰り返す――抵抗は無意味だ――』

強制チャンネルを使って、茉莉香が命令する。その間にも艦船は増えていき、完全に宗主星、植民星連合を合わせた艦船数を圧倒する。

驚いたのは、オデットⅡ世を追い掛けて来て、通常空間に復帰した第五八突撃起動艦隊もだった。いきなり自分の周りに友軍が出現したからだ。しかしそんな話は聞いていない。

「大丈夫なんですか。こんなもの実体弾が使われたらすぐバレテしまいますよ」

茉莉香の仕掛けた大芝居を見つつナツシユフォールが言う。

「大丈夫ですよ。銀河帝国に弓引こうなんて度胸ありません。それよりも突撃艦隊さんの方が心配、驚いてるだろうなあ」

「彼らには別命あるまで現状待機と、私のIDで連絡しときましよう」

「あ、親父さ・・・じゃなかった。銀九龍さん、それなら空域サーチも一緒をお願いします。きつと、この様子を見ている特別ゲストさんが居るでしょうから」

発、銀九龍名義で、自分の部下に連絡を入れながら茉莉香に質問した。

「しかし、何をやったんです？ 幻影とはいえ、第七艦隊の船体情報もエネルギー放射も質量係数も実体そのものではありませんか」

「――空蟬の術、なんちって。重力子爆雷とデコイを予め空域に展開しておく、時空震を演出させたと同時に、ポルト・セルーナに展開していた第七艦隊の情報をデコイに偽装させたんですよ」

「第七艦隊の船体情報って、いったい何時やったんです」

「ポルト・セルーナで、私たちにばんばんアクティブサーチ掛けてた

でしょう。それを利用させてもらいました」

「——今更ですが、あなたはこの文明圏の人間ではないでしょう。統合総司令部への手際といい、いまの度外れたウイザードぶりといい。私達とは異なる時空の方と思います」

「ははは・・・それについては、ノーコメントという事で。あなたと会っていたのは白鳳海賊団の仲間という事にしておいて下さい。そうじゃないと色々こんがらがっちゃうんで」

乾いた笑いを返す茉莉香。今度中継ステーションの中華料理屋に行つたとき、親父さんとどんな顔で会つたらいいのか考えていた。

「では、降伏文書を、第七艦隊第58突撃機動艦隊司令に託します」  
白鳥号のブリッジで、キャプテン・スズカが、植民星連合政府から届けられた降伏文書を銀九龍に手渡す。

中継ステーションの中華屋の壁に掛かっていた、あの降伏文書だ。茉莉香が見慣れたものは黒く煤けた額縁だったが、いまは真新しい。降伏文書には宛名が記載されていなかったが、これは相手が先に宣戦布告した白鳳海賊団か銀河帝国か判断が付かなかつたからだ。ともあれ、同盟関係だという白鳥号を間に入れ銀河帝国に降伏が成された。

「やったね、スズカちゃん」

「ええ、ありがと。でも本当に銀河帝国を引っ張り出して来てくれるなんて。あなた白鳳海賊団は帝国のお尋ね者になつたつて言つてたじゃない？」

「へへへ、実はまだお尋ね者の身なの。同盟なんて嘘っぱち。あ、銀九龍さんは本物よ。でも大艦隊も嘘！ だからこれから、同盟を本当にしなくっちゃならないの」

「嘘つて、あなた大概ね」

呆れたようにスズカは言った。

「度胸とハツタリは海賊の愛嬌つてね。でもスズカちゃんも全世界を敵に回しての宣戦布告だつたじゃない」

「ちやんじやない。とスズカが突っ込んで二人は笑い合う。」

「同盟を本当にとって、どういう事」

「この戦争を裏で仕掛けた奴がいるのよ。それをこれから炙り出そうってわけ。じゃないとお尋ね者のままになっちゃう。帝国との共同作戦でしたって、するためだね」

「ふーん、じゃあそれが本当の黒幕って訳ね。私たちはステラ・スレイヤーの落とし前を着けに、これから銀河帝国へカチコミ掛けに行くところだったんだけど」

「カチコミって・・・」

「先般ぶりです。帝国情報部のジェームズ・ナツシュフオールです。あなた方の文明を銀河帝国にお迎え出来て光栄です。無差別な殺戮兵器を弄ぶだけではなく、それに反対し行動することの出来る文明だと帝国政府は評価するでしょう。ただ——」

少しばかり言葉を濁して続ける。

「この件は、我々帝国に預けて頂けませんか。帝国の恥を晒すようですが、内政問題でかたが付くならいいのですが、既に外交問題となっているのです。——ここであなた達にカチコミを入れられると、事が公けになり複雑になりかねない」

「あなた方の事情はここでは分かりかねますが、事情によっては寸借の余地があります。しかし事が海賊の領分だったら、——よろしいか」

「解りました。その時はあなた方に託しましょう」

茉莉香は凄いと思った。帝国諜報員を前にして怯まない。それどころか、彼女には海賊ギルドのことは話していないのに、その匂いを感じ取っている。

その時、オデットⅡ世のリンから声が掛かった。

「茉莉香ー、奴さん現れたぜー」

「さつきから空域に妙な反応が出てます。白鳥号のβ領域、距離〇、三天文単位」

レーダー担当のナタリアから報告。

「どーする、このまま白鳥号に居るかい。それとも弁天丸に戻るか

い」

「あ、オデット二世に戻ります。電子戦はそっちの方がしやすいし、戦闘は弁天丸クルーの方が詳しい」

「じゃ、早く戻れよー」

脱力したようなウルスラの声が混じる。

「御免ーん、待たせて。スズカちゃんとかと打ち合わせしてたら遅くなっちゃった」

「遅い！」

バタバタとオデット二世のブリッジに戻って来た茉莉香に、チアキが怒鳴る。

気合を入れるように、ふうつと息を吐いて自分の席に戻る茉莉香。

「状況は？」

「変わらず。つかず離れず、距離を取ってる。こちらの様子を伺ってるみたい」

「しかし、よくこんな小さい反応を見つけたわね」

それは、前もって注意していなければ絶対気付けない、デフリくらの反応だった。

「前にスパイ船やキュリオシティのお相手してなきゃ見落としてた。多分、ステルス掛けてる宇宙艇」

「九龍さんナツシユさん、ネズミが餌に掛かったようです」

ニヤリと茉莉香の口元に不敵な笑みが浮かんだ。

## 第20話

「送った先が星間戦争の真つ最中だとは知ってたが、あん？ もう終わり？」

身を潜ませながら、二つの勢力の最終決戦を傍観していた温大夫。単結晶の行方を追って、たう星系海明星というド田舎星までやってきたが、追っていた肝心の海賊の姿が無い。そのうち宗主星の総攻撃が始まり、植民星側の艦船が次々と迎撃に出ていく。自分の愛機の脇を掠めるようにして。

こちらは念入りにステルス掛けているから、相手に気付かれる心配はないが、接触しないか冷や冷やものだった。中央のスカラー・ルートより混雑がひどい。それが距離間や速度無視ですつ飛ばしていく。よほど慌てた事態だ。

海賊は居ないかと、飛ばしていく艦船の間を縫うようにドライブしていると、母星近くにタッチダウン反応。その中から目指す相手が出て来た。

「いたいた。トランスポンダー『仮装巡洋艦 海賊船白鳥号』。はあ？ 太陽帆船？——どーやって海賊してんだあ。あ、単結晶見つけ。やつら単結晶を船首衝角にしてるよ。戦利品のつもりかねえ」

ここで出ていくわけにはいかない。何しろ戦場の真つただ中で周りの目も多い。そのうち戦闘になるんだから、船体が破壊されたところでブツを回収すればいい。何しろ単結晶は単体では破壊できないんだから。

そこで様子を見ていたのだが、様子がどうもおかしな方向に動いていく。

スズカの声は全指向性で放たれていたから、こちらにも聞こえている。

「泣かせるねえ。青春を戦時に捧げた乙女の叫び。どーしよーもない政府を持つと、不幸なのは若者だねえ」

なんて感慨に耽っていると、いきなりの宣戦布告。口をあんぐりさ

せて、何ぶつ飛んでんだあと一人突っ込みしていたところに、それは起きた。

突然の第七艦隊の出現。

帝国が乗り出してくるなんて聞いてねえぞとぼやいたが、

あれよあれよという間に、終戦してしまった。

「あーあ。早々と一発も打てずに降伏かよ。文字通り、来た！見た！勝った！だな」

しかしくだんの第七艦隊が、いつもの調子と微妙に違う気がした。しかし今それを確認することは出来ない。こちらの存在を相手に知られることにもなるし、しかも相手はあの銀九龍が居る第七艦隊だ。不確かなままチョツカイ出すなんてリスクは負えない。

こうなると、チャンスを待つしかない。人目が無くなったところで、直接やる。

たう星系宙域に展開していた宇宙船が減っていく。

始めに撤退していったのは、海明星に殺到していた宗主星の艦隊群。先に植民星連合が降伏してしまったものだから、彼らと敵対していた自分たちが敵となる。突然現れた勢力に現場の判断で降伏しようにも権限が無い。戦闘で白旗は上げられても政府の全権委任は受けていないのだ。政府に判断を仰いだが、相当混乱しているようで、兎に角撤退せよとお達しだった。

降伏文書が手渡されたところで帝国艦隊も引き上げた。それは現れた時と同様に水際立っていた。ぱっと現れさつと引いていく。あの第五八突撃起動艦隊は居残っているが、海賊団が植民星連合に攻撃されないか監視しているのだろう。その海賊団も植民星艦隊も三々五々宙域から引き揚げていく。

すっかり平和な空域になったところで、白鳥号も動き出した。中継ステーションに入港するかと思っただが、どうやら他に持つ自分のアジトに向かうようだ。温大夫にしてみれば願ったりだ。ドックに入港したとしても盗み出せる自信はある。だが人目が無いに越したことはない。

密かに、相手に気付かれないよう後をつけていく。第四惑星から外



惑星軌道の間に広がる小惑星帯に入ったところで温大夫は動いた。

「不審船にエネルギー反応増加！」

ナタリアから報告が入る。

「周囲の目がなくなつたから、警告なしでいきなり攻撃？ 随分焦つてるわね。証拠隠滅のつもりかしら」

チアキが呆れたようにため息を吐く。

「来たあ！ 敵の射撃管制波！」

リンが待つてましたとばかりに、電子戦を開始する。

「敵の電波からの直結回線よし。動力コントローल切断！」

「え、え、え？」

いざ撃とうとした瞬間、いきなり船のシステムがダウンして温大夫は狼狽した。動力エンジンが止まり、非常用バッテリーしか電力がない。パチパチ色々と再立ち上げしようとしても一切コマンドを受け付けない。

「目があることを教えてあげましょう。一斉にやっちゃつて」

茉莉香の号令と共に、三方向から強烈な近距離射撃管制レーダーが放たれる。レーダー波は正確に不審船をクロスゲージしていた。と同時に、白鳥号と弁天丸のエネルギー反応が上がる。

後ろから攻撃と狙つていたところに、フリーズ！を掛けられ、ぎよつとする温大夫。何も無いはずの空間に宇宙船が現れる。

そして馴染みある声。

「よお、久しぶりだなジャツキー。こちらはお馴染み第58突撃機動艦隊の銀九龍だ。ルナライオンに停船を要求する。――抵抗は無意味だ」

よりによって何でアイツがあ。

いきなり現れた、あの太陽帆船と同型艦からの強制通信に温大夫は頭を抱えた。

「じゃつきーい？ ルナライオン!？」

意外な知り合いの登場に驚く茉莉香。

「あー、あの時はつまり。わたしたちはご先祖さまのカタキだつたつていう訳ねえ」

「てゆーかあ、ここで会ったが百年目？」

ヨット部員たちから、達観したような感想が漏れる。

「温大夫。本名、ジャン・ジャック・ランキン。ヤークブ商会公司を名乗る密輸業者だ。辺境海賊ギルドを追っている中で浮かび上がって来た胡散臭い奴でね。やつと尻尾を捕まえた」

「あれが戦略兵器の部品だったなんて知らなかったんだ。代金が未だだったんで来てみたんだが、意外な使われ方にこっちも驚いてるんだ。で急いで回収しようとした訳。こちとら、いたって真面目な貿易商人だぜ」

「真面目な商人が、辺境海賊ギルドと関係を持つかよ。証拠品は抑えさせてもらった。言い逃れは出来ないぜ」

「温大夫、軍警察のホーガスです。あなたは密輸、大量殺人の幫助、場合によっては帝国内乱誘致で国家反逆罪の容疑が掛けられております」

「国家反逆罪だってえ？ 冗談じゃない、一介の業者が密輸品を一つ取り持っただけだぜ」

「つまり、法律に抵触する行為だったことは認識されている訳ですね」

ぐつと言葉に詰まるジャッキー・温。

「場合によつては、という話です。あなたに今回の取引を持ち掛けたのが誰だったのか、それを教えて下されば司法取引も吝かではないということです。まあ密輸に関しては、これまでの件もあり目を瞑るわけには参りませんが・・・」

諜報部のナツシュフォールが、銀九龍に視線を送りながら口を挟む。

「海賊ギルドなんて知らねえ。たとえ知ってたとしても言えねえ。海賊ギルドを売ったとなりや、この先この宙で商売できなくなる」

「そんなこと言っているのかねえ。今回は密輸だけじゃない。帝国内乱陰謀の容疑がある。そこんところの潔白を主張しないと、間違いなく処分だぜ。海賊ギルドにそこまで義理立てする理由もないだろう」

何だかカツ丼が似合いそうな構図である。

はあーと息を吐く温。

そして、帝国士官とはちぐはぐな、周囲のヨット部員たちを見回す。「それにしても、硬派な筈の帝国軍人が、また随分と華やかな中いらつしやるんですね。電子戦にあ、ちつとは自信があつたんだが、まるつきり気付かないうちに、いきなり銃を取り上げてのホールドアツプ。アンタたちは一体何者なんだあ」

ジャツキーの言葉に三人の帝国士官は苦笑するしかなかった。銀河帝国自身も同じように決められてしまったのだから。

「白鳳海賊団。正義の味方です」

ニツコリ営業用のスマイルで茉莉香は答えた。

「ひとつ確認したいんですけど——」

続けて茉莉香はモニターの向こうに問いかけた。

「あなたの本名、温でもランキンでもないでしょう。本当はケルビンっていうんじゃないですか」

意表を突かれたという顔のジャツキー。

「いいねえその名前。ケルビン（絶対零度）か、次からは是非それを使わせてもらおうよ。」

## 第21話

銀河帝国の中心、主星系連合。八〇〇光年の範囲の中にある五つの星系から成る。

行政機関が集中する第二星系。艦隊統合総司令部がある第三星系。帝国の経済金融機関の中心である第四星系。異文化交流や学芸の発信元で曙光の源といわれる第五星系。帝国の核であり、聖王家をいただく第一星系は銀河元老院と呼ばれる。その主星が惑星セナートだ。

超光速跳躍がまだなかった時代、この星系の一つから聖王家が生まれ、亜高速の世代間航行で五つの星系を一つ一つ征服していき銀河帝国の基礎を築いた。星系ごとに違う文明があり、狭い範囲での星間戦争の結果だが、聖王家は侵略に当たり元々の文化や行政権には干渉せず、ともに聖王家を戴く形の緩やかな連合を執った。その方が画一的な文化より多様性が生じ、お互いが影響し合う事で技術革新も進むからだ。いわば主星系連合は今につながる内政不干渉の元となったのである。

主星系連合統一で国力が充実して来た頃、そのころには核恒星系の独自性は薄れ同じ帝国民というアイデンティティが生まれていたが、大きく飛躍する発明が成された。

超光速跳躍である。

新たな船を手にした銀河帝国は、文字通り銀河に雄飛し今の版図を築いた。

銀河に乗り出して間もない頃、帝国は宇宙大学と出逢った。聖王家よりもはるかに古い歴史を刻む知性保管体である宇宙大学。その宇宙大学と銀河帝国とは同盟を結ぶ。その歴史と膨大な知性の蓄積に敬意を表してという理由だが、版図に取り込むのでは無く、同盟である訳は、聖王家に関わる重大な秘密を握っているからだとも言われている。例えば、聖王家の出自は、建国神話の中でも五つの星系の何処かというだけではつきりしていない。出自を知るのは聖王家の当主と宇宙大学のみという噂だ。

ともあれ宇宙大学が帝国の三権から独立しており独立国以上の高

い自治が与えられているのには、こうした歴史的根拠があるからだった。

宇宙大学の姉妹校が第五星系にあり、帝国での出先機関となっている。宇宙大学は、たとえ帝国元老院の子弟といえども能力なき者は入学を認められない。それに代わるリップサービスとしての姉妹校だが、同時に帝国中枢部との外交窓口でもある。それでも入学基準はかなり厳しいものではあるのだが。

宇宙大学姉妹校ユニバニティーで、惑星セナートのある第一星系への立ち入り手続きを行う。本来帝国貴族であるアテナ・サキュラーにセナート上陸への制約はないのだが、宇宙大学に所属しているため外交手続きがいたのであった。

ネオクラシックな学舎が立ち並び、ハイソな雰囲気が漂うユニバニティー。キャンパスだけで優に新奥浜市が丸々収まる。流石姉妹校と言えども帝国のお膝元にある大学だ。規模が大きい。

「はい、身分証明書。一応、宇宙大学の学生って事で登録しといたから」

そう言つてジェニーにパスを手渡す。

渡されたパスには『ジェニー・ジェーン。宇宙大学経済学部一年』とあった。一応つて、自分は正規の試験で宇宙大学に入学した現役学生なんですけど、と思わないこともなかったが。

「いま小耳に挟んだのだけれど、帝国艦隊が、白鳳海賊団を名乗る無法者に電子攻撃を掛けられ行動不能になった。それどころか、第三星系にある統合総司令部まで深刻なクラッキングを受けたつて。当局は否定してるけど噂で持ち切りよ。——本当に、歴史改変はないんでしょうね。そうなら承服しかねるわ」

ジト目をジェニーに向ける。噂にまでなっているとすると、キュリオシティから大学に送られた『未接触の文明圏から来た異邦人』という肩書ではまずい。だいいちエイリアンでは主星系には立ち入れない。手を廻して情報を改竄してくれたようだった。

「お手間を掛けます」

パスを押し頂き、ぺこりとお辞儀をする。

ユニバニティーから宇宙港へ向かうため、市街に出るためのゲートをくぐる。ここから先は完全な帝国領。ゲートでは、生体走査で未接触生命体であることが露見しないかと心配したが、アテナは平然とジエニーを促す。意を決してゲートに立つと、あっけなくパスは通った。

「先生は、私の生体情報まで改竄したのですか」

「まさか、私がしたのは偽の学生証まで。バンクの改竄なんて重罪よ。そもそも現実的に無理だわ。アクセス権だつてかなり高位でないと受け付けない」

「じゃ、何で未接触が誤魔化せたんですか」

「逆よ。生体情報を通つたつて事は、バンクに貴方たちの文明圏情報ですでに登録されてるつてこと」

ジエニーの危惧を察してアテナが言う。

「確かに、帝国は知っているわね」

相手はバンクを弄ることが出来るかなりの人物だ。しかも帝国中枢部に居る。

第五星系から銀河元老院がある第一星系へ飛ぶ。

惑星セナート。聖王家がある銀河の中心。銀河すべての国々の代表機関が集まる政治の舞台。

惑星軌道上から見るセナートは、青い海に五つの大陸が浮かぶ星だった。何となくジエニーの故郷である海の明星を彷彿とさせる。

銀河系を束ねる核なのだから、高度に機械化され地表全てが人工的な構造物で覆われているように思われるが、むしろ変り映えしない何処にでもある田舎星の姿だ。ここが銀河帝国の中心星とは見えない。修学旅行で軌道ステーション（帝国領内の修学旅行でも惑星への上陸は許されていない。そのため観光用ステーション）から見た時思ったが、百年前のセナートを改めて見ても同じ印象だ。

「意外？」

コミュニーターを運転しながらアテナは尋ねた。

「みんな、初めてセナートを訪れた人はそう思うわ。らしくないつて。」

「この星の姿って、永い年月をかけて作り上げたものだそうですね」  
「あら、知ってるの」

「ええ、修学旅行で来たときにそう聞きました。上陸はしませんでしたが」

意表を突かれたのはアテナの方だった。

「前に来たことがあるのね、でも修学旅行って・・・百年後には帝国も結構さばけている様ね。いまはこの星系に立ち寄るだけでも強い制限が掛かるわ。外交使節団とか元首とか、セナートの姿を見たことがある帝国人はほんの一握りよ」

「そう、この星はテラフォーミングで人工的に作られた惑星。なんでも聖王家が故郷の星から世代間宇宙船でやってきた時、故地に似せてデザインしたそうよ。まだ超光速跳躍も無い時代、聖王家がどこから来たのかは神話の世界になっているけどね」

インカムにセナートの管制官から確認が入る。

「こちらセナート宇宙港管制です。そちらの所属と許可証を提示して下さい。」

「銀河帝国貴族院議員、宇宙大学所属アテナ・サキュラー。大学と貴族院の許可証を送ります。ほか申請した随行者一名」

コンソール・パネルに手を当てて生体認証を送信する。

「・・・確認されました。宇宙港へはDの135進入路を進んでください。ポートはHL1099031です。」

「了解しました。惑星セナートへの降下を始めます」

通信を切り、ハンドルを切るアテナ。

「さあ、降りるわよ。」

## 第22話

セナートに降り立った二人は、銀河元老院近くにあるサロンへと向かった。

相手はバンクを弄ることが出来、帝国中枢部に居る人物となれば、まず恐らく元老院議員。

しかし銀河元老院に直接乗り込む訳にはいかない。神々の集いとまで喩えられる元老院だ。貴族であるアテナでも立ち入りは許されない。それどころか、元老院議員以外で入れるのは聖王家の人間か帝国内でもよほど有力な王族の者だけだ。

そこで、元老院内での様々な噂や情報が飛び交う社交界に狙いをつけた。サロンに集う人々もそうそうたる者。帝国を代表する企業家や政治家、そして元老院議員。一介の市民が出入りできる場所ではない。そもそも惑星セナートに立ち入れない。貴族であるアテナ・サキュラーには資格があつたが、サロンに入るのは初めてだった。

もともと研究者で社交界には縁も興味もない。

さすがにTシャツにパンツ姿というラフな格好ではまずいので、ドレスをしつらえる。一介の研究者には痛い出費だが、それをジェニーが用意した。帝国銀行の口座からだが、まあ出所は言わないでおこう。

ポンと大金をしかも帝国銀行と聞いて驚くアテナ。

「——それ、百年後には凄い金額になってるんじゃないか？」

「そこが心配なんですけどね。まあ私の会社と共同事業してるんで、何とかなるのではないかと」

サロンとはいいながら、銀河帝国元老院のお膝元にあるクラブ。王宮の大広間を思わせる華やかさだった。絢爛たるシャンデリア、重厚な調度品の数々、集う人々の優雅ないで立ち。

アテナは濃紺の髪が引き立つ深いパープルのタイトドレス、背中の露出が大きい。ジェニーはブロンドに合う淡い水色のワンピースドレスだった。

丈の短い裾口を引っ張りながらアテナがぼやく。



「何、このドレス。丈が短すぎるんじゃない？ それにタイト過ぎる体のラインがそのまま出ちゃう！」

「とつてもお似合いですわ。先生って普段男っぽい恰好ばかりなさってますけど、すごく魅力的ですよ」

「年上をからかわないで頂戴。でも貴方ってどうしてこんなに慣れているの。着こなしてから振る舞いから」

「流星にセルーナのサロンは初めてですが、こうした場は幼少のころから経験がありましたので」

「ぎこちないアテナと対照的に、場慣れたジェニー・ドリトル。でもさしもの彼女も銀河帝国の大立者が揃うサロンは初めてだ。内心グリューエルならもつと上手く振る舞うだろうにと思った。それこそ学校と変わらず意識しないほどに。」

「気に吞まれないで下さい。相手は海千山千の権力の亡者なんです。格好は立派でも中身とは決してイコールしません。ジャガイモかイタチ程度に思っていて丁度です。」

権力者が放つオーラに、ジェニーは自分に言つて聞かすように言う。

「私を誰だと思ってるの。歴史学者だものそれ位解ってるわ。それに長命種にしてみれば、みんな子供よ。さあ聞き込みを始めましょう」

「はいー」

サロンに集う人々の間で話題になっていたことは、帝国議会の趨勢、最近頭打ちになりつつある経済指標、帝国の運営に関わる人たちのゴシップ話など……。話される内容はジェニーが知る社交パーティーで交わされるものとさして変わらなかった。規模や時代が違つても人間にそれ程変化はない。それが判ると肩の力が抜ける。

それにしても話されている内容がひどかった。

〇〇星系のテラフォーミングが不良で飢饉が起きているから、今年は〇〇の値が上がり買い時だ。なんてのはいい方で、都合のいい時にテラフォーミングが不調になってくれましたなあ。とか、このために不調をプログラミングしたんじゃないか。とか談笑している。

中には経済指標が伸び悩んでいる事から、ここで一発戦争でも起きないもんだらうかと真面目な顔で話している者もいる。

父と叔父との確執からジュナイ・クールフと無理矢理結婚させられそうになり、弁天丸に宇宙大学までの護送を依頼してヒュー&ドリトルの会社艦隊とやり合った際、結婚話を破談にさせる方策を探っていた時に言ったグリューエルの言葉が浮かんだ。

『特権階級の方々というのは、多かれ少なかれ何かしら弱みを持っているものです。叩けば何か出ます。道徳心や充足なんて言葉、ありませんしね。』

確かに戦争をプロデュースするなんて事を考えるんだから、道徳心や充足など欠片もないだろう。ここに居る人たちも、自分は絶対安全な場所に居て、自分の利益のために動いてそのために傷つく人がいることに思いが及ぶ人たちではない。それらはリスクという数値に置き換えられて生身の人間はかき消される。

「戦争は外交です。起きるのでなく起こすもの。帝国がリスクとメリットを天秤に計った時、メリットが上回れば当然検討されるでしょう。特に経済に閉塞感が感じられる現在に在っては」

戦争が話題になっているグループの輪で、痩せた長身の男が言った。四人ほどがその男を囲んで話をしている。グループの面々は中年を過ぎた男女だったが、男は三十代前半と言った所か。

「元老院ではそのような議論が？ 漏れ聞くところでもそんな声は聞かないですが」

「いやいや、あくまで可能性の話ですよ。議題にも上がってません」元老院内の事を知る様子から、男は元老院議員か。にしては若い。「すみません。先程からのお話ですけど、戦争ってそんなに儲かるものなのですか」

ジェニーが声を掛ける。

「貴方は？」

「ジェニー・ジェーンと申します。フェアリー・ジェーンという旅行会社を経営しております、このたび核恒星系への新規航路開発にあたって、こちらの帝国貴族院議員であられるアテナ・サキュラー様に

御同行させていただきました。」

後ろに立っていたアテナをさりげなく前面に押し出す。

「アテナ・サキュラー。ああ宇宙大学の。辺境文明圏における比較発達学を研究しておられる方ですね。——はじめまして、元老院議員のパク・リーです。」

「アテナ・サキュラーです。よくご存じですわね、まだ研究員で論文もそれほど多くないのですが。」

元老院議員に端正に挨拶を返すアテナ。

「貴方の興味深い辺境宙域の風俗、社会レポートは宇宙大学のホームページ・コラムで拝見させて頂いています。最近はオリオンの腕宙域でフィールドワークをなさっているとか」

「丁度、初期超光速跳躍文明での星間戦争がありましたして、統合文明圏成立の研究をしています。勿論、非接触非干渉ですわ。——でも、オリオンの腕の事は大学のブログにはまだ載っていない筈ですが、何故ご存じで？」

「あ、いや、宇宙大学に知り合いが居るものですから」

「そうですか・・・」

ジェニーが話を続ける。

「先程のお話ですけど、戦争って、一部の業界しか活性化しないのではないのでしょうか。兵器産業とか製造業などは好況となるでしょうけど、運送業やサービス業など市民生活に関わる産業は大幅に低下します。私の旅行会社など観光業界は大打撃をこうむりますわ」

「そうですね、戦時下となれば様々な制約を受けて成長率は下がってしまう。しかしそれは一時的なこと。戦争の結果開かれるマーケットを考えてごらん下さい、新しい販路や需要の誕生それに技術革新による成長は、戦後経済に大きなインパクトを与えます。これは戦争に勝利した側負けた側両方に言えるでしょう。それに帝国ほどの経済力ともなれば、戦争が影響するマイナス要因は小さく、むしろ国民総生産は大幅に上がります。何より、いまの経済界に漂っている閉塞感に風穴を開けるといいう市場に与える印象の方が大きいでしょうね。」

「うんうん、市場は新しい風を求めている。見た目に解りやすいサ  
プライズとか、イベントとか!」

「また海賊でも暴れ出してくれないものかねえ」

「海賊掃討戦争からこつち、よほどの辺境にでも行かないと居な  
いって話だからねえ。」

「近頃、辺境海賊ギルドとかいう組織が立ち上げられたと聞く  
が・・・」

辺境海賊ギルドという言葉が出た時、アテナは、男の眉が僅かだが  
ピクリと動いたような気がした。が男の顔は平静のまま。気のせい  
か・・・

「海賊ギルドって、海賊掃討戦争の時の反政府連合じゃありません  
んか!」

「その残党かどうかは知りませんが、しよせん『辺境』ですよ。自分  
で場末ですって名乗ってるんじゃないことありませんな」

「海賊って言えば、最近現れた海賊の噂!」

「なんでも帝国艦隊を手玉に取って、艦隊統合総司令部では一時大  
混乱になったとか」

——げっ、ウチの事だ。

「真偽のほどは解りませんが、全国指名手配になったそうですよ。  
白鳳だか白鳥だか言う海賊団!」

「その海賊、久々に帝国相手に暴れてくれませんかねえ」

「どんな勢力なんでしょうねえ」

「帝国総司令部を混乱させるんでしょうから、そりやもう大勢力で  
しょう。ナンバース・フリートの第五・第七艦隊を合わせたくらいの  
規模でなくつちや、そんな芸当出来ませんからね。案外、その海賊団  
のエージェントがこのセナートに潜り込んで来ているかもしれませ  
んよ」

「おお怖い!帝国の内情を探るスパイですか!」

「破壊工作かも・・・」

早々に、先日のハッキング騒動に盛り上がる場から離れるアテナと  
ジエニー。

アテナがジェニーの脇を小突く。

「ねえ、私達凶悪なテロリストにされてるわよ。第五・第七艦隊を凌ぐ大勢力ですって」

「そんな戦力があれば、こんな苦勞しません」

そのほか幾つかのグループを回ったが、辺境海賊ギルドの話は出てもステラ・スレイヤーに繋がるような情報は聞かれなかった。二人はサロンを後にする。

オリオンの腕での出来事など誰も興味が無い、というか知らない。むしろ先程の男からオリオンの腕という単語が出たのがサロンの中では例外だった。それだって星間戦争には触れてなく、アテナの最近の活動を知るなかでという話題に過ぎない。名前は、元老院議員。パーク・リーだったか。

「あの元老院議員、どうして私を知っていたのかしら。」

「それは、宇宙大学のコラムを読んでと言っていましたわ。面識はないのでしょうか？」

「ええ、でもあのコラムはとても目立たないの。どちらかというところ、仲間内での近況報告のようなもので、一般の人が見て興味を引かれるようなものじゃないわ。それに、研究者だけで億という人数の大学よ、学生はその数十倍。惑星規模の人口の全員がアカウントを持つてるコミュニティ・サイトのコラムで見知ったってどれだけ？ 私は書き込みも滅多にしない方なのよ」

「つまり、目的を持って閲覧しないと、大海の中で砂粒を探すようなもの・・・」

ジェニーは宇宙大学の規模を思い返していた。学部だけでも一生かかっても訪ね回れない数。その中にある夥しいゼミや研究課の講座。自分に合った部門を見つけようなんて思っていたら何も学ばずに四年間が終わってしまう。宇宙大学の入学に学部や学科の選択肢は無く自分のやりたいことに合わせて教室を選択するシステムになっている。例えば経済学を学んでいて理論物理学の課題が出てきたら、その学科を尋ねることは自由。学生は自分の目的に合わせて講座を道具のように使う。その講義内容についていけるかどうかは別

問題だが、理系であれ文系であれどの教室でもついていけるだけの総合学力が宇宙大学では要求される。宇宙一のエリートが集まりと言われるゆえんである。

そんなゼミを回ると同じで目的が無ければアテナ・サキュラーという名前を知りようがない。

「彼が興味を持っていてる所に私が関わっていた。たまたま居たと云った方がいいかしら。しかも興味の核心に触れる事をフィールドワークしていた。あの星間戦争をフィールドワークをしていたのは宇宙大学では私一人。ということは、銀河帝国で目撃者は調査船キュリオシティのクルーと私だけって事。順番が逆なのよ。目撃者の存在に気付いて宇宙大学を調べ、私の名前に行きつきコラムを見たって訳。私が何をしている人間か知るためにね。でも彼はボロを出した」

「オリオンの腕。」

うんとアテナは頷く。

「コラムにも載せてない情報を彼は口走ったわ。大学の知り合いに聞いたなんて言ってたけどね」

## 第23話

核恒星系第五星系のユニバニティー校に戻った二人はこれからの戦略について話し合った。

空間ディスプレイにはサロンで出会った男の顔が映し出されている。

「パク・リー元老院議員、二六歳。父親の後を襲って元老院議員になったのは二年前。」

「まあ親の七光りですか」

かつての婚約者、ジュナイ・クールフの微妙な顔が浮かんだ。でもこの男はクールフと違って底の知れない印象を受けた。

「文字通り襲ったってこと。父親が疑獄事件で告発されて議員の職を離れざる負えなくなったんだけど、それを陰で仕切ったのが息子であるパク・リーって噂だわ。元々政治路線や事業方針で父親とは反目してたそうだけど、邪魔な父親を追い落とししてその地盤を丸々引き継いでる。——利権もね。」

「単なるお家騒動なら、議席がそのまま息子にスライドされることも無かったんでしようけど、父親のパイプが帝国中枢部まで及んでいて断ち切ることが出来なかった。火の粉が元老院自体に降りかかって来そうになって目を瞑った。結局パク・リーの筋書き通りになったんだけど、そこまで読んでのクーデターなら大したものよ。まだ大学を卒業して間が無い頃よ」

怪しいというだけで何ら証拠は無くそれ以上の有力な情報も無い。相手は帝国の元老院議員、当たって砕ける式に直接乗り込める相手じゃないし、切れるカードが無い。恐らく叩けば何かは出る御仁だろうが何より自分たちには時間が無い。

「裏口から叩くしかないわね、金の流れとか通信記録とか……。でもそんなツールは無いし、元老院議員ともなればその辺のセキュリティはしっかりしている。恐らく帝国情報部でもおいそれと手が出せない」

諦め顔のアテナをよそに、ジェニーは自信たっぷりで言った。

「でも統合司令部ほどじゃないでしょう?」

ジェニーはオデットⅡと連絡を取った。一般回線を使って帝国のお膝元からである。帝国艦隊は白鳳海賊団の動向を必死になつて追いかけている筈で、すべての通信を傍受とまではいかないが、怪しい相手同士のやり取りは調査している。そんな中での通信。だが帝国は通信の有った事実すらつかめない。リンから手渡された妨害チップによるものだが、百二十年の差はそこまである。

「ジェニーく大丈夫かい。寂しくないかい。慣れない水でおなか壊してないかい」

モニターにちぢれっ毛のショートカットのリンが映る。通信に出でずぐ立て続けの質問に軽くこめかみの辺りを抑えるジェニー。

「植民星連合は無事に銀河帝国への降伏が成ったよ。まだ未公認だけどね」

「未公認って、どういうこと?」

リンが、ハツタリで第七艦隊を演出し、ご同行頂いた帝国士官三人に降伏文書を手渡した経緯を説明する。

「御同行って、それ誘拐じゃないの! あなたたち絶賛全国指名手配中よ」

「いやあ、照れるなあ」

あくまで呑気な白鳳海賊団である。

「核恒星系に乗り込んだって言ってたけど、ジェニーこそ危ないことに巻き込まれてないかい」

「こちらは大丈夫よ。白鳳海賊団はお尋ね者だけど誘拐の事までは知られてないみたい。密輸業者を捕まえたってことだけど、頼みたいことがあるの。」

「ジャッキー・温の取引先と金の流れだろ。帝国情報部のナツシユフォールさんと奴を追っていた銀九龍さんが調査してる。辺境海賊ギルドとの繋がりが出てきたみたいだ。」

「ジャッキーって、あの時のジャッキーさんの御先祖だったんでしょ。因果ね。」

「全くだ。部員たちは『ご先祖さまのカタキだった』とか『ここで



会ったが百年目?』とか呆れてたけどな」

「そおねえ。」

ジャツキー・ケルビンが狙っていたのもオデット二世の衝角に取り付けられていた単結晶だった。それはステラ・スレイヤーに使われていた核心部品、いま現在進行している戦争をプロデュースする勢力の鍵となる証拠物件。あの時もそんな勢力が暗躍していた。七つ星共和連邦や企業連合体ラキオン。あのときの種はこの時代に撒かれたものだったのかも知れない。

「ジャツキーの線もあるけれど、調べて欲しいのは黒幕の件。それらしい怪しい人物が浮かんだのだけれど、こちらではガードが固くて。それでオデットと弁天丸の方で探ってみて欲しいの」

「ハッキングをしろってか。そりゃあこっちは色々充実してるからな。で、誰なんだ?」

「パク・リー元老院議員。彼の口座の金銭の流れから密輸業者を結びつける接点があれば、いい裏が取れるんじゃないかと。パク・リーはなかなかのやり手で社会的地位も高い。直接海賊ギルドと交渉を持つような証拠は残してないと思う。でも一見なんの繋がりも無い両者が関係を持ってしている線が出てくれば、少なくともやり取りの全体像は炙り出せるわ」

「成程、裏口から叩くか。でもジェニー、一つ聞きたいんだが、うちらとしては今回の事は帝国艦隊を独立戦争に介入させることが出来て終了したんじゃないか。ここから先は帝国の領分だろ」

「確かに降伏文書は帝国に渡った。でも正式に受理されたわけじゃないし、まだ事態は流動的なよ。このまま無かったことにされてしまう可能性だってあるわ」

「文明圏まるまるそっくり、無傷で手に入るってのにかい?」  
リンが驚いて問う。

「戦争の終結を望まない者が居る。元々もっと大きな金儲けのために仕掛けた星間戦争。失敗を認めていったん手を引く選択肢もあるでしょうけど、揉み消すだけの実力があれば手段を変えて継続させようとするでしょうね。そしてパク・リーにはそれだけの力が有る。そ

れに——」

いったん言葉を切つてジェニーは続けた。

「私、アテナ・サキュラーに言ったのよ。『これから引き起こされるであろう悲劇と混乱に対して、どう責任の結果を選択されるのですか』って」

それは、アテナ・サキュラーとガーネットAで歴史介入について言い合つた時の言葉だ。

「ここで帝国にすべてを任せてしまつて歴史の自己収束に委ねるつて選択肢は、私たちの歴史に対して責任放棄だと思ふの。七つ星共和連邦や企業連合体ラキオンのことがあつたでしょ、あれは今回の事がきつかけよ。無事併合が成つたとしてもその後の歴史の動きは速くなつて私たちが知つてる歴史とは違つたものになつてしまふ。たくさん悲劇が生まれるでしょうね。それに、百二十年後まで白鳥号は残らない」

「オデットⅡ世が私たちに届くように、きつちり後始末は付けておかないと?」

うんと頷くジェニー。

「ジェニーって、随分海賊的な考え方をするんだな」

「あら、私達は白鳳海賊団じゃなくつて」

くすつと笑うリンにジェニーが返す。

「解つた、やってみる。じゃあ具体的にどういった線を洗つていくかだけど——」

二人はハッキングに当たつて調べる対象を打ち合わせて通信を終えた。

スイッチを切るとアテナがジト目でこちらを見ている。

「ねえ、それって歴史改変にならないでしょうね」

「ならない為の手立てです。」

ニコリと返すジェニーに、はあーとため息を吐くアテナ。そして俯いた。

「そうね、これは本来帝国の領分だわね。いえ私達の時代の問題なのに、遠い未来の貴方たちに迷惑を掛けている。なのにこの時代人の

帝国は何もしていない。そりゃ情報部や軍は、多少は動いているんでしょうけど、表だつて対処しようとしていない。動けないって所が本当かしら、もろに帝国の恥部ですものね。本当なら事態がここまでになる前に対処すべきだったのよ。波風立てずに見て見ぬふりをしてきた最高機関、元老院の老害だわ。組織が保身に汲々として国が滅びた歴史は沢山あるのに・・・」

「まだ手遅れじゃありません。」

凜としたジェニーの言葉に振り向く。

「まだ始まっていません。確かにオリオンの腕にちよつかいを出してきましたが、目的は達成されていません。この先も達成させてはならない事です。周辺のためにも帝国のためにも」

「——そうね。」

「でも、先生の話を聞いていて思ったのですが、銀河元老院ってそんなに権限強いんですか？ 最高機関だつて言っておられたし・・・」

「え？」

「へ？」

ジェニーが言った言葉に、お互いの反応に戸惑う二人。

ジェニーの知る元老院は、百二十年後にも元老院はあるが帝国の最高機関ではない。帝国の意思決定は帝国議会にあり、元老院は貴族院と同列で議会の輔弼にあたる機関だ。権威は有っても権限は無い。

「え、いえあつと・・・ご免なさい。これって歴史への干渉に当たります？」

未来の情報を思わず口走ってしまったジェニーが恐る恐る質問する。相手は長命種の歴史学者だ、その言葉の意味するところは悟られてしまう。

「そうね、明らかな未来人による先行情報の提供だわ。でもそれはガーネットA星で既にしちゃってるでしょ」

「そうでした。」

「けれど良かった。詳しくは聞かないけど、百二十年後には銀河帝国も今より良くなっているようだから。そのように、いまやらなくちやいけないって事ね」

さっぱりした表情でアテナは言った。

## 第24話

「コンサルティング会社サーティナイン。社屋は主星系連合の第四星系に構えているが、こりやダミーだ」

弁天丸の通信席から百目が言った。

「実績あるように見せかけてはいるが、帳簿も出鱈目なら取引事実も裏は取れない。社員も本当に居るかも怪しい典型的な幽霊会社だな」

「代表者は？」

茉莉香の問いに、サイレントウイスパアのクーリエがコンソールを弾く。

「代表者はゲドー・アインザッツ。取引先は中堅どころの企業で事業拡大の経営プランニングやアドバイザーをやってる。きれいな素性に見えるけど実体がないわ。取引名簿にバックドアがあつて、交流が無い筈の宗主星の貿易会社と、ジャッキー・温の名前がある。でも、もつと面白いもん見つけた。会社の創設履歴に精査掛けたんだけど、ゲドーってやつの名前と一緒に出てきたのが、これ」

「パク・リー、銀河帝国貴族、帝国元老院議員、それと辺境海賊ギルド！ ビンゴって訳ね」

「でもパク・リーって名前、オデットⅡ世と弁天丸のライブラリーに載ってないの。素性も行末も不明。帝国士官さんと宇宙大学の学生さんに教えてあげてー」

ジャンクフードをぱくつきながらの、電腦魔女が間の抜けた声が飛ぶ。

「んで、お金の流れを追ってみたんだけど、この会社のメインバンクと宗主星側の貿易会社の名前がね・・・」

歯切れの悪さを感じさせつつリンからファイルが送られて来る。

「あちゃー。これ、先輩に伝えるの？」

困惑した茉莉香の声がブリッジに響いた。

「ヒュー星間運輸にドリトル商社ですってえ！」

オデットⅡ世を通じて送られてきたファイルにジェニーが声を上げた。ジェニーにアテナが尋ねる。

「知ってる会社？」

「知ってるも何も・・・ウチの実家です。」

トホホな顔のジェニー・ドリトル。

「私の家のヒュー&ドリトル星間運輸会社は、ヒュー星間運輸とドリトル商社が合併して出来た会社なんです。というよりドリトルがヒュー社を乗っ取ったんですが・・・」

この星間戦争でのステラ・スレイヤーの直接の送り手と受け手が、ヒュー&ドリトル星間運輸会社だったわけだ。ステラ・スレイヤーだけでなく、武器取引も宗主星側と植民星連合の両方にわたって行われている。

「んもー、ウチのご先祖様。何やってくれてるのよ！」

「何というか、御愁傷さま・・・」

全体の流れはこうだった。

新興のコンサルティング会社が帝国きつての総合商社であるヒュー星間運輸会社に新規の事業展開を持ち掛ける。内容は辺境星域での経済活動。実体は国交がない宙域との密貿易。帝国クレジツトが使えないので資源やらエネルギーでの支払いとなる。それを帝国通貨に変換させる窓口になってくれないかというもの。まあ一種の両替だ。密貿易だから大っぴらに大企業が出張る訳にはいかない。しかし新規にその宙域が帝国領となれば、先行資本投資の強みでその後の商活動でイニシアチブを握れるうま味がある。そのため零細の商社や密輸業者を手駒に使う。どうせ孫請け会社や胡散臭い連中だから、いざとなればすぐに手を切れる。雇われたのがジャツキーのヤークブ商会公司という訳だ。

只の平和な星域だったら問題は無かったのだが、請け負ったのが星間戦争真っ最中のオリオンの腕星域だった。密輸品も兵器となる。利益に比例してリスクも大きい。何しろ正式で無い武器の授受は国内で禁止されている。そこでヒュー社は自己の防衛を厚くするという名目で武器を扱い、便宜をはかった政治家にキックバックとして

金品を渡す。その金は最終的にパク・リーの元に流れる。何だか既視感を覚える展開だ。

もう一つ問題は金品がパク・リーだけではなかったこと。辺境海賊ギルドにも流れていた点だ。海賊は帝国内では反逆者と同義語。もろに反体制勢力だという事で、ヒュー社としては事態が抜き差しならない関係となる。そこに辺境海賊ギルドとオリオンの腕の宗主星側との直接取引でステラ・スレイヤーの技術供与の話が持ち上がる。今更後に引けないヒュー社としては請け負わざる負えない。入手が困難な単結晶物質は意外と簡単に手に入った。それは、パク・リーが裏に手を廻して用意していた。それを辺境海賊ギルドに渡し、ジャツキー・温を使って宗主星に送り届けさせた。手駒に使っていた業者同様、ヒュー社もパク・リーの描いた筋書きに乗って手駒にされていた訳だ。

「武器の横流しやら政治家へのキックバックやら、非合法なことも平気でやってる会社だけど、叔父様の経営方針って結構ウチの家風だったのねえ」

同族会社で身内の悪口はあまり言いたくないが、スキヤンダルのすっぱ抜き以来、フェアリー・ジェーンへの此の所の妨害はとみに酷くなっている。諦観にも似た思いがジェニーによぎった。

「で、どうするの」

「やっちゃいましょう。直接政治家を叩いてもトカゲのしつぽ切りに遭うだけです。搦め手から外堀を埋める。狙い目はイメージに敏感な民間企業です。まずはヒュー社を攻める！」

「ヒュー社をつて、貴方の御先祖様でしょう」

「ご先祖様だからこそ、キツチリ落し前は着けてもらいます！」  
相当头に来ている様子のジェニー・ドリトルだった。

「じゃあ、相手の逃げ道を塞いでおくわ」

カードタイプの端末にオデットから送られてきたデータを移したアテナは、端末を操作して数カ所に転送する。

自身のメッセージはただ一言、『動け！』とだけ。

「どこに送ったんです？ 暗号化されているとは言っても、ここか

らの通信は帝国政府に聞かれちゃうんじゃないですか？」

「だからよ。聞かれれば帝国の恥部が露見している事を知らせることになるし、送ったのは第三者宛て。メトセラにはメトセラのネットワークがあるのよ。辺境海賊ギルドには恥ずかしい事だけどメトセラが居るそうじゃない。敵味方同時に気付いている者がいるぞって宣言してあげる。これでよし」と

平文でご丁寧に自分の署名付きである。送信を終えてアテナは端末を閉じた。

「随分大胆ですね。敵が狙って来る危険性があるのに」

「露見した後での口封じは意味ないわ。襲ってきたら、その時は——、その時よ」

メッセージを受け取ったのは、元老院をはじめとする各議会、帝国艦隊、星系王国に居る長命種たち。そして射貫く目を持つ若い海賊だった。

——事は露見した。



## 第25話

第四星系第五惑星メルクリウス。

帝国経済の中枢部というのに高層ビルはない。

銀河一の商都と言えば、天を衝く摩天楼や、その間を縫うように走るチューブウェイという姿を想像するが、実際は宗主星の旧市街でも見かけるような街並みである。しかし、どの建物もどっしりとして時代と風格を感じさせるものばかりだ。個々の建物の意匠は異なるが、高さは揃っており受ける印象も重厚で統一されている。ここは、実務よりもカンパニーの威厳と品位を示すショーウィンドーなのだ。

そんな一角にあるヒュー星間運輸の本社前にやって来たジェニーとアテナ。

重厚感に溢れたエントランスをくぐり広大なロビーを進んで受付に立つ。

仕立てのいいスーツを着た美人の受付嬢が応対する。

「社長さんに会いたいんですけど、名前はジェニー・ジェーンと申します」

「お約束は」

「ありません。」

「どうやっていらっしやったか存じませんが、お約束の無い方に取次ぐことは出来ません。——え、あれ?」

セキュリティーに引つかからず社屋内に入って来れたことに訝しがりながら、受付嬢は指先のコンソールをチェックしていて戸惑った。アポイント無しでの立ち入りは生体認証で弾かれる筈だからだ。が、相手の認証はSクラスのグリーンを示している。という事はヒュー家の親族という意味だ。ヒュー&ドリトルの一族であるジェニーにもヒュー家のDNAが受け継がれている。セレニティーほどではないが、百二十年前でも血の魔法が通じたという訳だ。

「し、失礼いたしました。社長とはどういったご用件でしょうか」いきなりお辞儀をしてあらたまった。

につこり微笑みながら恐縮する受付嬢に要件を告げる。

「社長さんに取り次いで貰えますか。サーティナイン、ドリトル、ステラ・スレイヤー。これだけで通じると思いますが」

「なんのことが判らないまま言われたことを取り次ぐと、一寸の間を置いて社長に通じた。」

「只今ご案内致します。少々お待ちいただけませんか？」

「それには及ばないわ。よく知っている建物ですから。」

深々と頭を下げて見送る案内嬢を残してジェニーは歩いていく。それに付いていくアテナ。

「この建物はヒュー&ドリトル財団の記念館になっているんですよ。私も幼い頃よく遊びに来ました。でも百二十年後とほんと変わってませんね」

専用エレベーターに乗り、最上階の社長室フロアに着く。

社長室前の受付に秘書がない。ここに来るまで、エレベーターにもフロアにも人の姿が無かった。嚴重に人払いがされている様子だった。

コンコンと、重い扉をノックする。

扉の向こうから「どうぞ」の声。ジェニーは扉を開けて中に入る。

空間バリアの窓を背にして、社長席に座った五十代の男が二人を迎える。窓は開放型宇宙ステーションに使われているものと同じだ。ビーム砲を撃たれてもびくともしないだろう。

五十代の男は皺が多い。年齢よりずっと老けて見える。苦渋に満ちた顔で用件を尋ねる。

「・・・一体、何の御用ですか」

「先程お伝えしました内容で会って下さったのですから、もうお解りだと思うのですが」

自分の父と同じ年くらいの男をジェニーは見据える。その視線に男の苦渋が増す。

「解りかねますな」

絞り出すような声で答える男。

「こちらは帝国貴族で宇宙大学職員のアテナ・サキュラーさんです」「帝国貴族。宇宙大学。」

その言葉を鸚鵡返しに繰り返す。つまり相手は治外法権という訳だ。

「私はジェニー・ジエーン。宇宙大学の学生ですが、先生とは利害の一致という事でお宅に伺いました。私、旅行会社を運営しているのですが、貴社が進めておられる事業、大変な営業妨害なんですよね。」

「何のことか・・・」

「戦争が起きては困るって事です。観光業は安全な航路と快適な航海が大前提ですからね。ほかの業界も大迷惑じゃないかしら」

「武器の取り扱いの事なら、合法的に認められている事業です。――そりゃあ多少ダークな部分もありますが、どの会社もやっている事ですよ。」

「敵対し合う勢力に武器を渡して紛争を煽る。帝国内では禁止されてる事です。それが帝国領外であっても倫理的にはどうなんでしょう、ダークの範中を超えていますね。しかも目的が紛争を帝国内に拡大させること。その取引相手が海賊とあつては、立派な国家内乱陰謀罪に帝国反逆罪ですよ！」

男の言葉に堪らずアテナが言った。

「一体何を言ってるんだ！ 内乱とか海賊とか一切関わりの無い事だ！ 何を証拠に」

ブルブルと震えながら男は机を両拳で叩く

「証拠、有るんですよ。金品の流れやら取引の音声ファイルやら、先程送らせてもらいました。――あなたの元にもその情報くらいは届いているんじゃないですか？」

「じ、じゃあ、あなたが・・・」

「はい。事は露見しています。」

男にとってそれは死刑宣告と同じだった。いくら帝国を代表する大企業の頭領と言っても所詮は民間人。贈収賄のスキヤンダルならともかく内政干渉を国是とする帝国のシステムに関わる犯罪に逃れる術はない。

「・・・終わりだ・・・もう終わりだ・・・終わりだ・・・」

力なく俯いて呟くばかりの男にアテナは続ける。

「あなたも、いいように利用されたんでしょね。目先の利益に囚われて、気が付けば抜き差しならない陰謀に加担させられてしまった。歴史の中ではよくある事です。でも、まだ陰謀は発動していません。証拠のオリジナルを持って当局に出頭されることをお勧めします。今なら情状酌量の余地があるかも」

「自首だけでは足りません。海賊とも黒幕ともはつきり袂を分かった証が必要です！」

ジェーンの言葉に男はゆっくりと頭をもたげる。その目は縋る気持ちで一杯だった。

「私は、何をすればいい。君たちに何が出来る」

「司法取引——というより恐喝です。私達は当局ではありませんので司法取引が認められるかどうかは解りませんが、先程の情報はさる連合王国の外交ルートにも乗っています。謂わば当事者であるあなた方と帝国の両方に脅しをかけている訳です。場合によってはお口添えが出来るかと。」

「恐喝って、いったい・・・」

「いえ、金品では御座いません。パク・リーは自分に火がついて当然逃亡を図る筈です。だが国内には居場所が無い、そうなれば向かう先は一つですわ。教えて頂きたいのはその辺境海賊ギルドの本拠地の座標。密輸業者を使ってらしたんですから当然ご存じでしょう。当局に拘束されてからより、前もって白状しといった方が、心証もよくなるんじゃないやありませんこと？」

男は椅子に崩れ落ちるしかなかった。

「証言と証拠は押さえたいけれど、これからどうするの？」

「当然当局に知らせますが、弁天丸にも座標を送ります。恐らくここから先は——」

二人がヒュー屋間運輸本社ビルを後にして、コンピューターに乗り込もうとした時だった。

二人の背後に、忍び寄る影。

気配にはつと振り向き、身構えるジェニー。不意なジェニーの動きにアテナは何事と驚く。

次の動作を取らせる隙を与えず、背後に立った男は、ジェニーのすぐ眼前に迫っていた。徒手空拳だが、相手に動きを許さない迫力があつた。

「ジェニー・ドリトルさんですね」

自分の本名を知る者は、ここではアテナしか居ないはずだ。ジェニーに緊張が走る。

「帝国情報部のジェームズ・ナツシユフオールです。白鳥号、いやオデットⅡ世から飛んできました」

「ああ、あなたがオデットⅡ世に誘拐、いやご同行された帝国士官さんですよ」

オデットⅡ世と聞いて警戒を解いた。この時代の人でオデットⅡ世号の名を知る人は、その船に乗り込んでいる者以外はない。

「いえ、まだ誘拐されたままですよ。お互いの利益の一致という事で、此処に来ることを茉莉香船長から許可されただけです。」

ナツシユフオールも笑顔で返す。

「サイレントウイスパーでたう星系から跳んでみえたのですか」

「いえ、惑星軌道から降りるのに連絡艇で。軍警察のピエトロ・ホーガスさんと一緒です。ホーガスは、これから近衛軍警察とヒュー星間運輸へ事情聴取の予定です。情報部は元老院議員パク・リーに逮捕状を取りました。銀九龍は温大夫を連行して、いったんポルト・セルナーの第七艦隊司令部に戻りました。あなた方のお蔭です。やっと追いかけている人物を特定することが出来ました」

「あなたは何でこちらに？ 向かわれるなら第三星系の統合参謀本部では」

「貴方を迎えに来たのですよ。帝国が取り返しのつかない過ちを未然に防いでくれた方に会っておきたかった。それで迎えに来ました。みなさん上で待っています」

「上？」

「ええ、白鳳海賊団がこの惑星軌道上で待機しています」

アテナが寂しげに言った。

「お別れね。民間人である私が出来るのはここまで。あとは当局に

任せるわ」

「アテナ・サキュラーさんですか。この度は多大なご協力、有難うございました。」

ジェームズ・ナツシュフォールが深々と頭を下げる。

「本来なら帝国情報部がしなければならぬ仕事でした。それを民間人の貴方に危険な真似をさせてしまった事をお詫びします。ですが情報部だけでは今回の事件を解決に導くことは、少なくとも事態が起こってからでなくては出来なかったでしょう。それには、貴方がメトセラ・ネットワークで流して下さったことが決定的でした。一気に事件を露見させてしまう、そんな選択は組織に属している我々には選べません。随分思い切ったことをされる方だ」

「さあ。元々そんな考えをする方じゃなかったんだけど、『未来における選択肢の影響』ってことに気付かせて貰った私の先生からの影響かしら」

そう言つてジェニーにウインクする。思わず赤くなるジェニー。

「まだ終わってはいませんが、併合時期に多少の差はあれ、私たちの歴史の流れと同様になります。程度の差は時間流の収斂で補正されるのではと。でアテナさん。当事者としての道義的責任は果たされたわけですが、研究者としてはどうだったですか」

「もう刺激的だったわ。私は人間が選択する生き物であることを失念していた。歴史を起こった事実の積み重ねとしか見ていなかったけれど、人間が選択して来た足跡だということに気付かせてくれたのは、あなたよ」

「私もです。大学で担当教官から独立戦争を研究するように課題を受けたのですが、図らずも実地で体験することが出来、独立に関わった沢山の人の足跡をこの目で見る事が出来ました。とても勉強になりました。先生からの助言、本当にありがとうございます。」

深々とお辞儀をするジェニー。

「また会えるかしら。あなたとはもう一度、一緒に研究がしてみたいわ」

「恐らく。ちよつと時間がかかるかも知れませんが」

「じゃあ、それまで。また今度ね」

「はい！」

もう一度お辞儀をして、ジェニーはアテナと別れた。

「ジェニー♡」

「リン！」

お互いに駆け寄り、次には熱い接吻が！ とみんなが期待したが、今回も手を握り合うだけだった。

「帝国のお尋ね者がどうしてこんな所まで来ているのよ。中央も中央、核恒星系の主星系連合の中なのよ」

「まあ、ライブラリーにこの時代のレーダー波は全部載ってるからな。無いと誤認させる波長を流してやれば認識できない。光学観測だって電子補正を掛けてない大昔の望遠鏡か余程の至近距離じゃないと見えやしない。こちらの装備はいろいろ充実してるんで、恐らくわたしがここに居るって事に気付いてないと思うぜ」

そんな二人のやり取りを見つつナツシュフォールは鼻白む。

「先日のクラッキングの件といい幻影艦隊といい、その気になれば帝国中枢部を奇襲し放題なわけですか」

「私達にそんなつもりはありませんわ」

「諜報部の人間としては、この事態を見て見ぬふりをするのが結構苦しいんですよ。まあ事態を知っても帝国は大恐慌をきたすだけでしょうが——」

鼻白んだ表情から真顔になり、ジェニーや茉莉香らと向き合う。

「ここらで、この件は帝国に預けてもらえないでしょうか。植民星連合併合のことは、非公式ながら宗主星側に知らせてあります。帝国政府の正式な手続きには時間がかかるでしょうが、今回の件の重大さから承認は确实かと」

確かに銀河帝国併合で戦争を終結させるという目的は達した。宗主星では相手が銀河帝国になったという事で、大慌てで戦争終結に動き出している事だろう。恐らく植民星連合と同様に併合を願い出るだろう。自分たちの、この時空での役割は終わったのだ。

でも——。

「一寸よろしいでしょうか。」

会話の合間にグリユーエルが確認を求めた。

「今回の黒幕、元老院議員バク・リーの所在は確保されましたか」

「いえ、情報部からの話では既に逃亡した後だったそうです。

ヒュー社に捜査が入る前に高跳びしたと。恐らくアテナ女史による公開と同時にです」

「そうですか——」

「行き先は、辺境海賊ギルド」

茉莉香はまだ片が付いていないと思った。

「そうですね、帝国のことは帝国にお任せするのが一番だと思います。でもこれは元々私たちの文明圏が引き起こした戦争で、最後まで付き合うのが筋だと思うんです。それに白鳳海賊団は銀河帝国に宣戦布告したままです。このまま手終いすれば、白鳥号は銀河のお尋ね者で終わっちゃう」

「白鳥号は独立戦争末期に二隻いたという事では駄目なのですか」

「電子記録では二隻が同一であることまで誤魔化し切れません。それに、引つ掻き回したただけで後は知らんぷりっての嫌なんですよ。海賊として」

かぶりを振りながら茉莉香は言う。

「では、どうあっても同行すると」

「あら、私たちに誘拐されたのですから、あなたの方が私達に付き合ってもらわんです」

ニコリと営業用の笑みを浮かべる茉莉香をよそに、グリユーエルが外交の表情でナツシユフオールに向かった。

「白鳳海賊団提督としてお尋ねします。帝国は本当に事態を終わらせることが出来ると思いますか」

「どういう意味でしょう」

ナツシユフオールも諜報員の顔に戻っている。

「そのままの意味です。帝国は内政不干涉が原則。今回の事件はそれに抵触する犯罪でした。しかし犯人は逃亡して帝国の版図外に居



る。この意味はお判りでしょう。外交ルートで犯人の引き渡しを求めようにも相手は海賊。そのまま乗り込めば一方的な侵略行為であり内政干渉になります。謂わば犯罪を犯罪で解決しようとするようなもので、帝国内の各星系政府はその矛盾に疑問を感じるでしょう」

「帝国で活動する海賊は、それを撃滅する。海賊掃討戦争時の海賊法はまだ生きています」

ナツシユフォールは反論した。だがグリユーエルは構わず指摘する。

「帝国内の海賊に対してでしょう。辺境海賊ギルドは帝国の範囲外です。それに領内で活動する海賊は全て居なくなることが銀河帝国公式見解のはず。帝国艦隊が乗り出すとは、たかが掃討戦争の残党風情にしては規模が大きいです。いったいその海賊はどうやって力を得たのか。——ここでも疑念が出てきます。つまり、領内で波紋を立てずに帝国が動くことは難しい」

「グリユーエル・・・」

茉莉香もナツシユフォールも、グリユーエルの指摘に沈黙した。

「さて、ここからが本題です」

一呼吸おいてグリユーエルが続けた。

「帝国が動くことが出来ないならば、帝国以外の勢力が動けばいい。これは、海賊の領分です。」

## 第26話

ヒュー社の社長が示した座標は、海賊ギルドが跋扈する帝国領外の辺境宇宙域。一二〇年後でもこの領域はまだ帝国の埒外。そうあのスカルスターがある宙域だった。

「すみませんでした。茉莉香さんを差し置いて差し出がましい真似をして」

グリューエルが申し訳なさそうに謝っている。

「ううん、そんなことないよ。私ってさ能天気な方だから、帝国艦隊が乗り出せば一気に解決って思っていて、帝国が動けない場合の選択肢を失念してた。」

「じゃあ白鳥号の指名手配はどうするつもりだったの」

しおしおと頭を掻く茉莉香を横目に、チアキが問いかける。

「帝国艦隊と同行して、共同作戦って事で既成事実化しちゃえば、後は有耶無耶に・・・」

「有耶無耶につて、・・・呆れた」

「——海賊らしいですわ。」

クスクスと笑うグリューエル。

「帝国が動けない場合、一番リスクの少ない方法は、全ての罪をオリの腕側に被せてしまう事。植民星で実験しようとした宗主星は、ステラ・スレイヤーを使って帝国に進出を目論んでいたことは事実なんだし、辺境海賊ギルドと通商を行っていた。敵対に対する防衛は立派な軍事行動で大義名分は立つ。危険な文明と勢力つて事で証拠もろとも抹消すれば万事解決、帝国は安泰。」

椅子に深く腰掛けながら、茉莉香はもう一つの選択肢を思い返す。

「なんの解決にもならないじゃない。船長失格だわ」

はあと溜息をつく茉莉香。

「帝国がそこまで愚かだとは思いたくないですが、戦争で儲けようという考えを持つ者がまだ一掃されたわけではありません。政治は時に偏狭で冷酷な判断をするものです。私達のセレニティー連合王国もそうでした。保守派と改革派に別れて内戦の一手手前まで行っ

たのです。そして私は安易に弟の命もろとも破壊を選ぼうとしました――。それを救ってくださったのは茉莉香さんです」

「いやあ、たまたまだって。あの時だってそんなに深く考えて行動した訳じゃないもの。解り合えないんだっただら目で見て判断してもらった方がいいって思っただけ」

それにしても御先祖の船を見て解り合えたセレニティーの人たちは凄いと思った。そして説得したグリューエルとグリュンヒルデも。

「でもグリューエル、敵の本拠地へ乗り込むのにオデット二世もって危険すぎるわ。弁天丸で十分よ。ヨット部員を危険に晒すわけはいかない。これは弁天丸クルーの一致した意見よ」

「私も止めたのですが・・・」

辺境海賊ギルドの本拠地に海賊しに行くこと決まった時、ヨット部員たちはオデット二世で行くと言い出したのだ。オデット二世のお尋ね者の汚名返上に『白鳥号』が居なくては意味がないというのが理由だった。

「そりゃそうでしょうけど、だからって無茶よ。武器もなんにも無い女子高の練習帆船なのよ！」

「だけど、以前も辺境海賊ギルドとやり合ったぜ、あんどきヤラキオンや七つ星連邦の艦隊も一緒だったか」

部長のリンが顎をさすりながら不敵な笑いを浮かべる。仕草はもう立派な海賊だ。――白鳳ヨット部のパーカーを着ているが。

「だからあ、あの時は梨理香さんが指揮執ってくれたからでしょうがあ」

「それにいくら弁天丸でも、一隻じゃ電子戦で力負けするんじゃない」

ハラマキが後に続く。

「サイレントウイスイパーは連れて行きます。だから十分ですつ」

「茉莉香が弁天丸で行っちゃっても、あたしらは後を追い掛けているからね、座標もクルーも揃ってるから」

レーダー席で先輩のリリイが手を振る。

「操舵なら任せてください。ケイン先生のようにはいかないかも知

れませんが、グリユーエルやチアキ先輩のサポートがあれば、立派にやりとげてみせますっ」

「そんな、アイちゃんまで・・・」

「仕方ないんじゃない。みんなやる気満々よ。止めるんならオデットⅡ世ぶっ壊すしかないわ——帰れなくなるけど。」

つんと澄ました顔でチアキが締める。

「チアキちゃああんん」

「だからあ、ちゃんじゃないってえー!」

結局チアキ・クリハラは、盛り上がるヨット部員を止めなかった。

かくして、白鳳海賊団は辺境海賊ギルドの本拠地に乗り込むことになった。

「やる気満々だぜアイツ等、顧問はどんな教育してたんだ」

「三代目、オレが女子高の先生なんて、こりこりだって言ってた訳が解っただろ。今度からはお前がやれ」

メインモニターに映るオデットⅡ世を見ながら、弁天丸を操舵するケインが愚痴る。

「確かに第七艦隊や核恒星系の中でも、あの子たち私達（プロ）と阿吽の呼吸で対応しちやっってたわ。でも今度の相手は本物の海賊よ。しかも明確に敵意を持ったね」

「実戦経験でいえば、オデットⅡ世は練習船にはあり得ない回数だ。恐らく星系軍より多い。」

ミーサの不安を受けてシュニツアが言う。

「演習より実戦経験ってか。帝国の第七艦隊だってあんなに頻繁にはガチンコしてねえぜ。まさに海賊船並みだ。・・・ってオイ、俺達より多くないか?!」

指折り数えていた百目が驚く。それに三代目が反論する。

「セレニティーの星系軍やら海賊狩りとかオデットⅡ世が絡んでない戦闘も結構あるんじゃないか。それに帝国じゆうに賞金首掛けられたこともあるぜ」

「ありや帝国情報部の出来レース。一発も撃たれなかつただろ、

ノーカンだノーカン」

「でも、全部に船長は関わってる」

怪しげな水晶玉型宙間ディスプレイを手にしてルカが一言。

「あの子も戦闘経験豊富って事ね」

母親のような眼差しでミーサが呟く。

「ホント、大きくなっちゃって」

「またここに来るとはね。しかもヨット部のみんなと一緒に」

感慨深げな茉莉香。クーリエの幼馴染だった帝国の情報部員と前に訪れたことがある。今回はそのご先祖様と一緒に。

「この時系列では初めてですね」

あの時は再訪だったんですねと、茉莉香と行動を共にしたグリューエルが訂正する。

一二〇年後では黄金の幽霊船のように亜空間を移動するスカルスターだったが、この時代では通常空間にいる固定港のようだった。見た目は髑髏の姿だが、ひとまわり小さい。

武装を持つ弁天丸を先頭にオデット二世、その北天にサイレントウイスパーという隊列でスカルスターへ侵入航路を取る。

「まだ電子戦は仕掛けないように。先手は取れないけど相手に付ける隙を与えたくないもの。相手の電子攻撃に対してはきっちり応対お願い。——相手の射程ぎりぎりまで近付いて」

茉莉香がオデット二世と弁天丸に下命する。

接近すると、スカルスターから停船命令が入った。

茉莉香が海賊服で応答に出る。とびつきりの営業スマイルで！

「こちらはくじら座宮からやって来た白鳳海賊団、船長の加藤茉莉香です。当方に攻撃の意志はありません。そちらにいらっしやる帝國貴族さんに用があります。引き渡していただけませんか」

しかし相手は何の返事も寄こさない。しかしこちらを探る電子攻撃はビンビン来ている。

「茉莉香、スカルスターにエネルギー反応増大。砲門が一斉に照準をこちらに向けてる」

「こちらはいつでも撃てる。しかし装甲から効果は期待できない」

弁天丸から報告が入る。

「こちらからは撃たないわ。あくまで交渉に来ただけ。喧嘩しにきたんじゃないから。でも対抗処置は執つといてね」

「了解」

少しの間ののち映像が切り替わった。

モニターに出たのは、凄艶な美女。

「白鳳海賊団？ 聞かない名だねえ。元老院議員に用つて事は帝国の犬かい」

見透かすような瞳と流れる蒼い髪を持つミューラ・グラントだった。

「辺境海賊ギルドの代表をやっているミューラだ。」

モニターに映る彼女は、茉莉香が知っているミューラよりも若く、自分たちとさほど変わらなく見えた。しかしあの眼光は変わらない。茉莉香は思わず海賊帽を深めに被り視線を逸らす。思考を読まれることを警戒してだが、あの長命種に顔を覚えられたくないせいもあった。

「お宅さんとここに御厄介になっているもと元老院議員ですが、ウチのシマにちよっかいを出しましてねえ。こちとら大迷惑だったんですよ。きつちりオトシマエを取らないと締まる所も締まらないんで。」

「おや、お嬢ちゃん。顔は見せてくれないのかい。それじゃあ話が出来ないぜ」

冷徹な目が細められ、茉莉香を見つめる。モニター越しでも刺すような視線を感じる。

「あなたは、相手の心を読むそうですから」

フンと鼻を鳴らし、茉莉香を見下す。

「帝国の使い走りに『差し出せ』と言われて、海賊ミューラ様ともあるうものが『はいそうですか』と言うと思うのかい。」

「帝国は関係ありません。くじら座宮の海賊に喧嘩を吹っかけて来た相手がたまたま帝国の人間だったってだけです。身柄は帝国に引き渡しますが、勿論帝国にも落し前は着けてもらいます」

「言うねえ船長。」

固唾を飲んで見守る弁天丸のクルー達が口笛を吹く。

「あれで視線を逸らしてなかったら、なんだけどね」

「帝国の威光も届かない辺境までのこのこやって来たんだ。それなりの覚悟は出来ているんだろうねえ」

ミューラの目が細くなる。

「辺境海賊ギルドともあろうものが、何時から駆け込み寺を営業するようになったのですか。」

「窮鳥懐に入らずんば、獵師もこれを撃たずつてねえ」

「武士の情けが聞いて呆れます。ミューラさん、ご自分のことを海賊って名乗られましたけど、地位を悪用して一儲け企むようなスカンク野郎のお零れにあずかろうとされているだけではないですか」

「挑発かい？　だがここでお前らを消してしまえば、後腐れなく闇に葬れるとは考えないのかい」

「でもまだ攻撃されてません。貴方にとつても、事が露見した黒幕はお荷物なのではありませんか」

「匿うと決めちまったんでね。契約は守らないと、この業界やって行けないんだよ」

目を落とし、はあと息を吐くミューラ。

「あくまで保護するぞ?」

「海賊なら力づくで奪うんだな」

そう言ってミューラは通信を切った。

双方睨み合いが続くなかで茉莉香が決断する。

「行きましょう。このまま睨み合っても状況は動かない。なら前進して相手に口火を切らせる。火力は向こうが圧倒的。でも電子戦ならこちらが有利。出来るわよねアイちゃん!」

「はい!　全部躲して見せますっ!」

コマンド入力でなく手動に切り替えたオデットⅡ世の舵輪を構えてアイ・ホシミヤが即答する。

「ビーム攻撃は躲せても、いざ白兵戦になったらどうするんだ?

そっちは女の子ばかりだろ、弁天丸にしたって要塞相手じゃ人数が足

りない」

戦闘担当のシュニツツアが言う。

「その前に決着を着ける。電子戦で相手の動力を奪取する。それが出来なかつたら大人しく白旗を上げましょう。でも帝国が乗り出せる理由にはなるわ。相手が撃てば、黒幕との関係をおおやけに認めたことになる！」

「自衛のためでなく攻撃したってことか」

そこまで行きたくないんだけど・・・と茉莉香は思った。出来れば抗争関係にはなりたくなかつたし一二〇年後まで遺恨を残したくない。敵の動力を切るという事は明らかな敵対であり相手にとつて屈辱も大きい。

「前進！」

細身のオデット二世が帆を一杯に広げて進みだし、武骨なシルエツトの弁天丸が続く。

有効射程を切り、そろそろ有効弾を心配しなければならなくなつて来たところでスカルスターが火を噴いた。

「あちゃー撃つて来たか。電子妨害最大出力！」

照準を電子妨害でずらされたビームがオデット二世を掠めていく。

「電子妨害はうまくいってる！」

電子戦コンソールで部長のリンが敵のレーダー波を攪乱する。

エネルギー波の線条が幾本も飛び交う中を、縫うように二隻は進んでいく。

「十一時方向実効弾、距離一七〇万、二時方向からも距離一五〇万、挟差時間一、三秒。一七四度仰角一二、第五宇宙速度で！」

グリニューエルのサポートに小柄な一生懸命にアイが舵を切る。

閃光とミサイル弾が間一髪のタイミングでオデットのマストを擦り抜けていく。

「回避成功！」

「まだまだ来るわよ！ アイ気抜かないで」

「はい！」

戦況をモニターしているチアキが櫂を飛ばす。



「いい腕だ。操舵も電子妨害も」

玄人はだしの腕前に弁天丸のブリッジから讚嘆の声上がる。

「海千山千の海賊でも、なかなかこうは行かないわ。電子戦の手際なんか見てて複雑な気分。」

サイレントワイスパアのクーリエがぼやく。

小型艇ながら戦略戦艦以上の処理能力を持つサイレントワイスパアである。空間への電子妨害にサポートを行っているが、にしてもである。

「レーダー波から敵の回線は確保したわ。ほとんどオデット二世からの情報だけだ」

「オデット二世、お前さんとこの格納領域とレーダー借りるぜ。コマンドはこちらに任せてくれ。サポートをよろしく頼む」

「よろこんで！」

クーリエからの報告に、百目がラインを確認しオデット二世に伝える。オデット二世をアンテナに使い、その巨大な電子領域をサイレントワイスパアのバックアップにして攻撃を仕掛けるのだ。勿論受ける側との呼吸が合わないと出来る事ではない。それだけ相手の腕を信頼しているという事だった。

「よし、電子攻撃開始！」

茉莉香（せんちよう）の一声と共に、白鳳海賊団は反撃を開始した。

## 第27話

号令一下、オデットⅡ世のマストから強力なレーダー波が放たれた。

「敵妨害電波、出力上がります。」

「射撃管制波から侵入開始！」

レーダー担当ヤヨイ・ヨシトミからの報告に百目がコマンドを入れる。オデットⅡ世と弁天丸のブリッジは双方解放回線で一体化されている。

「忘れじの行く末までは難ければ、今日をかぎりの命ともがな。…

さっすが要塞、対抗のプレッシャーが半端ない」

「でも、まるまる電子戦出力アンテナと化したオデットだよ。余裕で押せる。アイちゃん上手く避けてくれよ」

オデットの電子攻撃を取りまとめるリン部長にアスタ・アルハンコが出力を上げる。操帆担当はいまレーダー調整班だ。

「チアキ先輩とグリューエルのサポートがあれば万全です。それに皆さんの電子攻撃もあるから掠りもしません。——あまつかぜ（攻撃波）フネの通り路吹き閉じよ、オデット（おとめ）の姿しばしとどめん！」

てきぱきと応対していくオデットⅡ世のヨット部員たち。

「敵のハッキング率、隔離領域に八七パーセント。船体及び航行に支障なし」

船体情報をモニターし続けるチアキ・クリハラ。

「しのぶれど上に出にけり我が腕は、ものや何ぞと敵の問うまで。

——乗っ取り八二パーセント終了、相手の射撃管制はこちらにありまーす！」

ウルスラ・アブラモフが歓声を上げる。

「もう一息いい！」

スカルスターでは大混乱になっているだろう。いくらハッキング率を上げて相手も航行やレーダーに何の変化もない。しかしこちらのコマンドは次々と奪われていく。斉射の命中率がガタンと落ち

ビームがあらぬ方向に撃ち出される。相手は何故かまだ撃つてこないが、このままいけば動力源まで奪われて生殺与奪権を握られてしまう。

「春の夜の夢ばかりなん海賊に、かひなく立たむスカル惜しけれ。——ん、敵の射撃が変わった。精度は落ちてるけど管制が戻ってる」  
ナタリア・グレンノースが報告する。

「まさか、光学照準？　まずい！」

以前光学照準で攻撃された時のことを思い出したジェニーが叫んだ。部長だったあの時は、茉莉香の機転でマストの帆の透過率を調整し、相手の目を潰すことが出来た。だがこの空間には集束させる光源、恒星が無い。オデットⅡ世も帆船で無く通常推進で航行している。だから帆を丸々アンテナに使うことが出来ている訳だが。

「アイちゃん！　より細かな操船お願い。グリューエル、チアキ、詳細なサポートを！」

「はい!!」

距離はライトニングⅪの時より離れており、光学照準も赤外線センサーもだいぶ甘いが確実にこちらを狙える。

「ビームを回避するため拡散幕を張るか」

シユニツツアが発射ボタンに手を伸ばした時、茉莉香が制止させた。

「駄目、ビームの拡散光でこちらの的が大きくなる。そこに目掛けてミサイル飽和攻撃されたら避けきれない」

敵の射撃はオデットⅡ世、弁天丸、サイレントウイスパーのそれぞれを狙うだけでなく、それぞれの間を縫うように撃ってきている。

「奴さん、こちらの連携に気付いた。三隻を分断して通信のタイムラグを狙ってる。超光速回線に切り替えるか？」

百目が唸るように茉莉香に聞く。

「もつと駄目！　タイムラグ無しの超光速回線にしたら、乗っ取られはしなくても、逆にこちらの出力がダイレクトに伝わって相手の機関が暴走しちゃう!!」

電子回路にいきなり高圧電流が流れるようなもの。回路が焼き切

れ全停止する。火のついている転換炉が安全装置無しでストップしたりエネルギーが逆流を起こす。どちらもスカルスターは無事では済まない。

「シヨート・ダウンバースト現象か」

「効率は落ちても、散開して光速回線のままで行きましよう」

「ネットワークは良くても、電子妨害が影響を受けるぞ」

固まったままの隊列では、的が大きくなり相手も照準をつけやすい。下手な鉄砲でも数撃ちや当たるの喻えもある。散開して狙いをつけにくくし各艦が回避行動を執る。しかしそれは一体となつていた電子攻撃も鈍くなる。特にアンテナに特化しているオデットⅡ世ではそうだ。回避運動とレーダー指向を同時に行うため操舵が難しくなる。

「俺があつちに乗っていた方が良かったんじゃないか」

弁天丸の操舵手ケインが心配する。

「彼女らを信じましょう。事実これまでの攻撃には全部対処し切つてる」

船長代理のミーサが表情を硬くした。

赤外線照準を避けるため、メイン推進を切つて慣性航行で進むオデットⅡ世と弁天丸。速度は落ちたが確実にスカルスターには接近している。ビーム砲やミサイルはスルスターでの回避行動で避けているが出力は弱い。それはあまり動かないのと同じで相手の照準も距離と相まって徐々に正確になりつつある。

スカルスターの要塞砲塔に照準を定めているシュニツツアが言った。

「船長、本当に撃たなくていいのか？ 今なら正確に敵の砲塔を沈黙させられる。相手もプロだ。早晚修正値を補正されて有効弾が出て来るぞ！」

「こちらから物理攻撃はしません。あくまで話し合いをしに来たんだから。海賊流に電子攻撃に徹します」

操舵を担当するケインもアイ・ホシミヤも徐々にきつくなつてきた。特にアイは弁天丸以上の繊細な操船が要求されている。チアキ

やグリユーエルの助力もあるが、交差するビーム砲やミサイル弾にはほとんど反射神経に近い操舵だった。

「アイちゃん・・・」

肩で息しながら舵輪を握るアイに茉莉香は焦った。これまで完璧に対処し続けてきたが彼女の限界も近い。

「弃天丸！」

「どうした船長」

「ビーム砲でオデットⅡ世を撃って！」

なんだってえと一同驚く。

「船長、プレッシャーでイツちゃんじゃないだろうか？」

ケインが訝しがる。

「失礼なこと言わないでよ。ビームは威力を落とした拡散、照明弾程度でいいんだから。光が無いんだったら光源を作ればいいだけ。オデットⅡ世をレンズにして相手の目を潰す。そりゃ帆の何枚かは逝っちゃうかもしれないけれど」

「成程、光学照準を無効化させる訳か。営業用のフラッシュビーム、あれを使う」

射撃管制のシュニツツアが、海賊営業で相手の船に接舷するときによつ放す空砲をセレクトする。船体装甲には問題ないが、繊細な太陽帆には影響するだろう。

「オデットⅡ世と弃天丸を軸線に乗せる必要がある。斉射する一〇秒ほどは回避行動が取れなくなる。いいか」

「その間、敵の攻撃が当たらないことを祈りましょう」

「よおし、弃天丸前進。」

ケインがメインブラスターを吹かして舵を切る。

スカルスター、オデットⅡ世、弃天丸が同一線上に来るように回頭が始まった。敵の攻撃もその軸線に集中する。

「x〇, 一二五度、y一, 〇三度、z三, 七度修正。もうちよい！」

その間にも、衝撃波が船体に響いてくるほどの至近弾がオデットⅡ世を掠めていく。

「十三、十二、十一・・・四、三、二、一、乗った！」

弁天丸が主砲を斉射しようとしたその時、  
背後の空間が爆発した。

## 第28話

「何が起きたの？ 飽和攻撃の至近弾？」

茉莉香が尋ねる。

茉莉香の問いに確認を取るチアキ。

「違う。これは・・・後方に多数のプレドライブ現象発生！」

空間に次々と宇宙船がタッチダウンして来る。

「部長、またあれやっただんですか」

茉莉香がリンに聞く。

「やってない。あれは全部実体だ！」

通常空間に復帰してくると同時に、あたりに強制入力である「海賊の歌」が流れる。

予期せぬ援軍の到着だった。

「当事者置いといて一人で突っ走っちゃってる訳？ 茉莉香。」

海賊の歌に乗って聞こえてきたのは

「スズカちゃん！」

「だあからあ、ちゃんじゃあないって！ 海賊相手に、なに甘っちょろい事やってんのよ！」

そう言うがはいいか、いきなり船団から一斉射撃が放たれる。強制入力されたままに。

幾筋ものビーム砲やミサイル弾が、空間を切り裂き、スカルスターに集中する。

眩い閃光がスカルスターを包む。

「きゃあああ」

一呼吸おいてやって来た轟音に、ヨット部一同耳を塞ぐ。宇宙空間に音は無いはずだが・・・。

「効果音。」

突然の新手出現にスカルスターの砲撃が止んだ。閃光がおさまると、見たところ派手な爆発の割にはスカルスターに損傷が無い。

「演出。」

シュニツツアがぼそりと解説する。

「白鳥号以下私掠船免許状を頂く海賊一同、只今参上!!」

「私掠船免許状だつて。アンタ達雇い主に反旗を振りかざしたんじやな たつた?」

スカルスターのミューラ・グラントから通信が入る。

「よくご存じで。この度無事併合が成つたものですから、私達は無罪放免。独立した星系連合海賊として存続が認められました」

「じゃあ」

茉莉香の顔がぱつと明るくなる。懸案事項だつた最悪の選択肢は回避されたのだ。

「ええ、オリオンの腕は宗主星含めて銀河帝国への編入が正式に決まつたわ。異例な手続きの早さだつたそうだけど」

「帝国がよくそんな茶番を認めたものだわね。何より帝国は海賊の存在を認めてない筈」

「あら、あつさり認められましたよ。なんでも内政不干渉だからだとか。それに帝国も急いだ方が都合が良かったんでしよう。あなた方のような存在と帝国の内部事情に対処するためには。——帝国のやんごとなき方面からのトップダウンだつたそうです。」

アテナのメールとセレニティーのお陰だ。とジェニーは思った。

当のミューラは何事かを考えて黙っている。

「何故か行きがかり上、降伏文書を預かつた私が正式な手続きつてやらをするためにポルト・セルーナに行ったのよ。そしたら、あなた達がスカルスターに向かつたつて言うじやない。何突つ走つてくれる訳、これは私たちの時代の問題よ!」

「それは一体どなたさんから・・・」

ぼそぼそと茉莉香が尋ねる。

「帝国情報部のナツシユさんとかいう人。カンカンだつたわよ。いきなり核恒星系で置いてけぼりにされたつて。」

・・・自分たち海賊の仕事ですつて、丁重にお断りしたつもりだつたのだが・・・。

「でも白鳳海賊団に掛けられていた誘拐の容疑は晴れたわ。『誘拐されたと思われていた三人が、降伏文書受け渡し現場に居た事で外



交渉に就いていたと解った』ってことだそうよ」

帝国からの正式な依頼ではないのだから単独交渉するのに帝国政府の人間が一緒では何かと不味いと下船をお願いした。でもナツシユフオールさんも帝国中枢部を動かすために尽力してくれたのだと茉莉香は判った。情報部が動いていたことを公けにしないためにスズカには怒ったふりを見せたのだ。

「で、スズカちゃん達は どうしてここに？」

「だからちゃんじゃ・まあいいわ。正式に併合がなってから銀九龍さんから海賊依頼があったのよ。第七艦隊では海賊征伐の越境許可が下りないから動けないって。で、白鳥号は白鳳海賊団として帝国の私掠船免状貰った」

「で、ていこくのしりゃくせんめんじょおお!?!」

茉莉香が面食らう。

「だから、白鳥号と一緒にお仕事してる植民星連合の海賊一同は、いま帝国お墨付きの海賊って訳。帝国内何処へも行けるし帝国外でも仕事出来る。もつとも非合法は駄目だけど」

じつと二人の会話を聞いているミューラ・グラント。

双方無事ではすまないが、一〇〇隻近い戦艦とやり合うとなると要塞として分が悪い。現状でも電子戦では相手の方に押されている。代表と言っても所詮辺境海賊ギルドは寄り合い所帯だ。ミューラの面子より損得勘定が何より優先される。

「てことで、ミューラさんだったかしら。お初にお目にかかります。海賊船白鳥号の船長、シラトリ・スズカです。」

面と向かってスズカが口火を切る。

「ほお、私を見据えるかい。いい度胸だ」

ミューラの目が冷たく光る。なんでも相手を見透かしてしまう目だ。だが、スズカは物怖じしない。真っ直ぐミューラの目を見て話している。

「御望み通り力づくでもいいのだけれど、ここは海賊同士、取引と行きましよう」

「取り引き?..」

「そう、お仕事の話です。こちらは先般からの話通りそちらが保護している人物の引き渡しが目적입니다。誰とは申しません。その方がお互いのためでしょう。先程の砲撃はいわばご挨拶。辺境海賊ギルドと事を構えるつもりはありません。身柄さえ渡していただければ私たちはすぐ引き払います。髑髏星の座標は知られてしまいました。が、重要犯罪人の身柄確保に協力したという事で、銀河帝国も今回はそれ以上関与しないでしょう」

「すごい」

やり取りを見つつグリユーエルが呟いた。

相手が嘘を言っているかを見抜く力がある彼女だったが、あのよう  
に心を凍らせてしまう眼光に耐えられる自信は無い。

やり取りを見つつグリユーエルが呟いた。先程からスズカはあの  
長命種の目を見て話をしている。ミューラの見透かす睨みをも  
もせず。

「それが私たちになんの利益があるのかい。担保が無いんじやこれ  
までと何ら変わらないんだがねえ。取り引きつてのは、お互いにイ  
ブンで成り立つモンだろ」

ミューラは敢えて取り合おうとはしない。だが打ち切りもしない。  
確たるものを得るまで腹を探り合う。

ミューラを見て、やつぱり美人と茉莉香は思った。以前会った時は  
妖艶な美しさを湛えており母と同じ年恰好に見えた——勿論梨理香  
さんの方が美人だが。いまのミューラはそれより若い。そうジエ  
ニー先輩と同年代に見える。でも自分に近い年頃とはいっても受け  
る貫禄が段違いだ。

「でもスズカちゃんも素敵」

そんなミューラに堂々と渡り合っている。

「じゃあこうしたらどうでしょう。私たちと協定を結ぶのです」

「そんなことが出来るのかい。アンタ達は帝国の使いっ走りだろ」

「使い走りでも私達は軍には縛られない。帝国政府とは独立した存  
在、それが海賊です。違いますか？ 海賊が独自で協定を結んでも政  
府が口を差し挟む立場にはない」

「——話を聞こう。」

「辺境海賊ギルドと対立状態にある銀河帝国第七艦隊は、スカルスターの掃討がお仕事のようですが、あなた方と私たちの間に不戦協定が結ばれたという事になれば、第七艦隊の進出を牽制できます。私掠船免状を押し頂く海賊は軍務に準じますから、戦力の同盟関係と見なされます。帝国領内での犯罪行為は内政って事で取り締まるでしょうが、これまでのように海賊だからという理由での掃討作戦は打てなくなる。この辺境宙域でのお仕事はやりやすくなるのでは。——いかがですか」

スズカの提案を聞いたミューラの目がすうっと細くなり、口元に凄艶な笑みを浮かべる。

「そこが落としどころのようねえ。それにしても、いい目をしてるわね貴方」

「ついさつきまで、現役で戦争やってましたから」

スズカもミューラに負けないほど凄みのある笑みを浮かべた。

## 第29話

役目を終えたサイレントウイスパーは弁天丸に格納され、クーリエも戻っている。

パク・リーは白鳥号に引き渡された。

その時ちよつとした騒ぎが起こった。スズカが彼を眼にした途端、リボルバーを抜いて撃とうとしたのだ。

「お前のせいで、どれだけの人が傷つき死んだと思うんだ！」

脅しや駆け引きで無く、本物の殺意をたたえて。

——海賊は丸腰の相手を殺さない——

茉莉香の言葉がなければ引き金を引いていただろう。

「海賊が手を下す価値もない人間よ。あなたに人殺しになつて欲しくない」

帝国に戻れば確実に「処分」されるだろう。この世界に存在した痕跡すら残さずに。

スカルスターを後にした白鳳海賊団ことオデットⅡ世、弁天丸と、白鳥号以下海賊連合艦隊は、統合参謀本部のある核恒星系の第二星系まで跳び容疑者パク・リーを送り届けた。私掠船免状があるとはいえ銀河帝国の中枢部に海賊が現れたのは、実に一千年ぶりの事だとう。

そして、ポルト・セルーナに跳んだ。

辺境を管轄する第七艦隊最大の軍港。

ここから先は帝国の領外。いやオリオンの腕が版図に入りたいま、拡がった帝国領の中継ジャンクション。そのうち帝国艦隊に再編があり担当宙域が変更されるだろう。

ポルト・セルーナではピエトロ・ホーガスと銀九龍が待っていた。

「今回は本当にありがとうございました。追っていたジャッキー・温を逮捕することが出来、宿敵だった辺境海賊ギルドも牽制することが出来ました」

銀九龍がスズカの手を取ってお礼を言う。

「でも、勝手に協定を結んでできてしまいました。辺境海賊ギルドを

潰すことが念願だったのでしよう」

「いえあれで良かったのです。今あるギルドを潰しても、似たような組織は生まれて来る。まさに魑ごっこですよ。それならいまの組織を利用して新たな勢力が出て来る抑止にした方がいい。それに帝国内に海賊が居る、これが大きい。海賊はお互いのシマには手を付けないという不文律があるでしょう。勿論今後もギルドの動向については監視を緩めませんが」

銀九龍とスズカのやりとり、茉莉香とジェニーは、一二〇年後まで私掠船免状が更新され続けて来た訳を見た気がした。

「ジェームズ・ナツシュフォールに代わって、私からも謝意を述べさせて下さい。」

ピエトロ・ホーガスが茉莉香とジェニーの前に進み出る。

「貴方たちのお陰で、帝国は大きな過ちを犯さずに済みました。しかも平和裏に版図を拡げることが出来たという栄誉でもって。今回の過ちを公けにすることは出来ませんが、帝国は百年先まで肝に銘じる筈です。これは私の気持でもあります」

確かに帝国は学んだ。だからファウンテンブロウの時もいち早く海賊に依頼が来、領外であっても艦隊が動いたのだ。しかし戦争をプロデュースするという思考の芽まで摘むことは出来なかった。一二〇年のスペインでは思考を変えることは出来ないのだろう。しかし過ちを繰り返しつつ人間は変わっていくと信じたい。現にグリユーエルのセレニティー連合王国は変わったではないか。

「これを貴方に帰します。」

銀九龍がスズカに文書を手渡す。それはあの降伏文書だった。海星中継ステーションの中華屋で見た時と同様に、降伏相手が記されていない。

「これは——？」

「今回の併合は、オリオンの腕文明圏として為されました。それには一方だけの降伏文書では都合が悪いと……。例の、ステラ・スレイヤーの件もありますし。色々と後世詮索されてはまずいという事だそうです。この期に及んでも帝国の大人の事情ですな。——いや

はや、このように貴方の努力を顧みない帝国のやり方、今回の事で宮使いには愛想が尽きました。軍人は軍務の事だけ考えていればいいと思っていたのですが、政治的に動けと——軍人を辞めようと思っております。」

深々と頭を下げる銀九龍。

「・・・」

黙って受け取ったスズカだったが

「では、これは貴官が預かって頂けませんか。帝国と植民星政府がおかしなことをしないように見守ってください。」

そう言って返した。ただただ押し戴く銀九龍。

「貴方は核恒星系まで乗り込んだ伝説の海賊として語り継げられるでしょう。その方からの餞としてお預かりいたします！」

今も黒く煤けた額縁が油煙に塗れて掛かっている由来だった。

ポルト・セルーナで、旧植民星連合の海賊たちは白鳥号と別れて、それぞれの星系へと帰路に就いた。

白鳥号がオデットⅡ世と並んで飛ぶ。同型の（同一だから当然だが）優美なシルエットが双子のように宇宙空間に映えている。

「——なあミーサ、俺達浮いてないか」

「そりゃあ機能性を追求した伝説の海賊船だもの。浮いてて当然」  
随伴する寸胴な弁天丸。

三隻が飛ぶのは、あのガーネットA星域。

赤色巨星の軌道上には廃墟となったプラントと黒鳥号の残骸が浮かんでいる。

「茉莉香、前に言ったわよね。『決断は、自分が選んだベスト』って」  
白鳥号のシラトリ・スズカからオデットⅡ世に通信が入る。

それは、スズカを励ますためにヨット部員たちと歓迎会を開いた時、何でそんなに即決できるのと聞かれて言った言葉だ。

「あの時は、なに後先考えないご都合主義な子なのって思った」

「いつもご都合主義でスミマセン」

茉莉香が頭を掻きつつ謝る。

自分より彼女の方が場数を踏んでいる。回数がどうのじやなく、彼女の場合は、どんな小さなことでも人の生き死にが掛かっている。それに比べれば、自分は保険会社に保障され、そりやあ危ないお仕事も多いけど予定調和のお遊びみたいなものだ。

「ううん、違うの。あの言葉は、自分が決断したことをベストと信じるんじやなく、選択した結果をベストにするということなのよね。茉莉香を見て解ったわ」

小さい頃から母親に言われて来て、そんな意味には感じていたけれど、いつも心掛けていたわけではなかった。茉莉香の方こそ今回強くそれを意識させられた。特にばらばらな海賊たちを纏め上げ、ステラ・スレイヤーの破壊と戦争終結に動いたスズカを見ていて。

「前にも言ったけど、お父さんが倒れて本当に心細かった。そんなとき茉莉香やヨット部員たちに囲まれて嬉しかった。けど羨ましいとも思った。なんでそんなにのびのびとしていられるんだ」

「そりやあ背負っているものが違うもの。クルーだけじゃない、星の運命まで」

「それは茉莉香たちだって同じじゃない。時空は違っても自分の未来を背負っていた。でもその時判ったの。自分が海賊にいる理由は自由でいるためなんだって。」

二人が会話する中に、百目からの報告が入った。

「船長、空間に変化が生まれている。あの時の揺らぎと一緒のものだ」

空域に停泊した二隻の太陽帆船と弁天丸の正面には、青白い光を放ち空間を歪める時空の亀裂が生じつつあった。

それを見てスズカがお別れを言う。

「もう会えないわね。」

「ええ、多分・・・。」

茉莉香も今生の別れを返す。が、素っ頓狂な声が続いた。

「ああっ忘れるところだったー」

慌てて一二〇年後に向けた通信筒を宇宙空間に放つ。

相変わらずの様子にスズカの苦笑が聞こえて来る。

「これでし忘れたことはないわよね？」

すぐさま見えなくなつて行つた通信筒を見送つて、茉莉香はスズカに通信を送る。

「いろいろ有難う。この時代の海賊さんたちのおかげで、私達の世界は守られたわ」

「こちらこそ礼を言うわ。貴方たちのお蔭で、私の故郷と未来が約束されたんですもの」

スズカの答礼を合図に弁天丸から通信が入つた。

「船長、亀裂に変化が生じてる。さっきの通信筒で時空のエントロピーが解消されたんだ。時間は余りない」

別れの刻が近づいていた。

「じゃあ、お別れね」

「ええ、さようなら。お元気で」

最期の挨拶を終え、二隻は白鳥号を残して亀裂の中に飛び込んで行つた。

その時空に飛び込んで行きたい衝動を、スズカはぐつと堪える。――

あの向こうは茉莉香の世界。自分たちの領分ではない。

時空の歪とともに消えていくオデットⅡ世と弁天丸。

見送りつつ、スズカは呟いた。

「本当の海賊になれたのは、茉莉香。あなたのおかげよ。時間は、私

達の味方――」



## 第30話

年老いた赤色巨星がぼつんと輝く孤独な空間に、青白くゆらめく時空の歪。その歪に突如爆発が起こり、宇宙船がタッチダウンしてくる。

時空震の輪から抜け出て来るのは、細身の白い船体と寸胴な赤い戦闘艦。オデットⅡ世と弁天丸だ。

「跳躍終了。現在位置確認ガーネットA星域、前回突入した同一地点。銀河ナビゲーションも戻ってる」

「クロノメーター銀河標準時です。跳躍前との誤差プラス三分二秒」

跳躍から通常空間に復帰すると同時にサーシャとハラマキが報告する。

「こちら弁天丸、こっちの計測でも同じだ。ただし時間はプラス三日。」

「オリオンの腕統合戦争の十二日余りが、即席麺が出来る時間か・・・」

二隻の背後では、いま出てきた時空の歪が徐々に弱まり消えようとしている。

「スズカちゃん。これから大変だろうけど、私たちの未来のためにも頑張って」

消えゆく時空の歪に茉莉香は言った。

「船長、弁天丸のライブラリーを調べたけれど、特に目立った変更点は見当たらないようだわ。この時空で私たちがエイリアンでない限りはね」

弁天丸のミーサから連絡が入る。この時空がパラレルワールドで自分たちがこの時空から隔絶された存在ならば、スタンドアローン（孤立）となりライブラリーに書き換えは起こらない。

「戻って確かめるしかないわね。海明星へ帰りましょう」

最後の超光速跳躍を終え、たう星系外惑星領域に設けられている亜空間からのタッチダウンポイント、通称海明星インターに復帰する

と、オデットⅡ世の航行システムは星系管制センターと通信を始めた。今のところエラーは確認されていない。星系内に流されているテレビ番組や情報サービスも旅立つ前と同じものが流されている。

「事象改変もパラレルワールドもなさそうね」

茉莉香がそう告げた時、オデットⅡ世のライブラリーを確認していたリンが叫んだ。

「おいみんな、面白いもんが出てきたぞー！」

「面白いものってなに、なにー！」

ヨット部の面々が食いつく。

「オデットⅡ世のライブラリーって、色々不明なファイルがあるだろ。前回時間跳躍した時も幾つか開いたんだが、今回も新しいのが出てきたんだ」

「ぶちよー、なに調べてるんです。事象の変更点起きてないか確認してるんじゃないんですか」

「いやあ、それはそれで。でも変更点と言えば変更点だぜ」

さつと茉莉香が蒼くなる。あれだけの事をしでかしたのだ。歴史改変が起きていても不思議ではない。弁天丸からは見当たらないと来ていたが、歴史が得意な方でないリン部長のざつと見で解る位の変更点ならどんな影響が出ているか。

「で、出て来たものがコレ。」

リンが皆のコンソールに映像を送る。それぞれのサブモニターに映し出された画像を見て、驚きの声ブリッジに響き渡った。

「ええええええ!!！」

見覚えのあるものだった。

「なんで帝国の私掠船免状が、まだここ（オデットⅡ世）にあるんですか!!！」

茉莉香が声を上げる。確かに白鳥号は私掠船免状を貰った。それは帝国が辺境海賊ギルドに介入するための苦肉の策だった。オデットⅡ世の前身は白鳥号。記録映像としてなら残されていても不思議ではない。しかし今映し出されているものには『Copy』の刻印がなく弁天丸のものと同じだった。

「またまたあく部長、私達をかつごうとしてませんか？」

「嘘だと思うのかい。だったらその私掠船免許で帝国公文書館にアクセス掛けてみるよ。偽物か本物かすぐ判るぜ」

クラッキングが得意なリン部長の事だ。吃驚（ビククリ）映像などお手のもの。しかし一二〇年前ならいざ知らず、オデットⅡ世で現代の帝国に書き換えは通用しない。茉莉香は通信ディスプレイに私掠船免許を出し公文書館に繋いでみる。

すると弁天丸の私掠船免許と同じように『公示』が出た。それはその私掠船免許の現状を示すものだ。ただ弁天丸と違うのは公文書館が帝国で、公示に『TOP SECRET』の刻印が押されてある。帝国公文書でトップシークレットが開けるのは現物のみ。つまり本物。

「さらに重要なのは、（ここ）」  
と書類の下部を示すリン。

「有効期限が、無い……」

「そ、白鳥号に与えられた帝国お墨付きの海賊免許はいま現在も有効ってわけ。」

口をあぐあぐさせる茉莉香。

「つまりオデットⅡ世は、いまだに現役の海賊船だって事。銀河広しと云えども帝国の海賊船なんてうちだけじゃないか。だって公式では掃討作戦からこっち海賊は居ないことになってるんだから」

「田舎の女子高の練習帆船が、現役の海賊船って何なんですかあ。」

茉莉香の非難をよそに、白鳥号の私掠船免許が生きていると聞いてジェニーは目を輝かせた。

「白鳳海賊団はアリってことね。わたし大学卒業したら白鳳女学院の教師になるわー！」

「宇宙大学の学士様が、辺境惑星（田舎）の女学校の先生？」  
ジェニーの宣言にリンが返す。

「そうよ。そしてヨット部の顧問になるの。そうすれば帝国お墨付きの海賊免許を持つオデットⅡ世で海賊営業ができるー！」

「フェアリージェーン星間旅行会社はどうするんだよ」

「海賊をプロデュース出来るのよ。『海賊が体験できるのはフェアリージェーンだけ』——もう引く手あまただわ!!」

「センパイ! それ乗った!」  
すかさず数人から手が上がる。

「乗ったじゃありません! あり得ません! だいいち部活の顧問で営業なんて、教師に副業は認められてないですっ」

「あら学校の経営権があれば何の問題も無いわ。現在でも白鳳女学院の資本率はフェアリージェーンが四〇パーセントだし」

何気に母校の乗っ取りを宣言しているジェニー。新参でありながらヒュー星間運輸を乗っ取ったドリトル家の血は伊達じゃなかった。盛り上がるヨット部員を載せて、オデット二世は海明星に還つて来た。

管制空域に入ると、懐かしい声がみんなを迎える。

「お帰りオデット二世、弁天丸。」

計器上は大丈夫と出ていても、梨理香さんの肉声を耳にして安心する一同。

「おいっ誰だ? 『海賊船オデット二世』なんてトランスポンダー載せたのは。とつとと戻しな!」

鬼管制官の怒声が飛ぶ。

「いけねファイル閉じるの忘れてた」

私掠船免状を開示するという事は、その船が海賊船であることを宣言する事である。当然動いているときに開いていればトランスポンダーには「海賊船」と表記される。新たな発見に盛り上がってファイルをそのままにしていたリンは慌てて私掠船免状を閉じた。

「銀河帝国艦隊司令部からメールが入ってるよ。『ご苦労様でした。ご協力に感謝します』。お前たち一体なにやらかしてきたんだい」

「いや、まあ色々。ははは・・・」

一二〇年後の帝国統合司令部のライブラリーに、色々記録されていないことを願うばかりだった。

海明星に帰還して、茉莉香とジェニーは新奥浜空港の最下層、港の最も古いブロックに降りて来た。この宇宙港の元締めがいる中華屋

を尋ねるためだ。

「この降伏文書。植民星連合が正式に併合された時に、銀九龍さんに手渡されたものなのですよね」

厨房の壁に掛けられてある、古ぼけて煤けた何の変哲もない額を、感慨深げにジエニーが見つめる。

「ああ、そうだ。俺の若い頃、帝国士官をやってた時にね」

それこそ茉莉香の幼い頃からずっとそこにあった額。

「なぜこのまま此処にあったのですか。」

「何故って、使われなかったからさ。併合って一般には言われているが正確には合併だったんだよ。白鳳海賊団からあのままの流れで降伏を認めてしまうには、帝国政府も都合が悪かったんだろう」

老コックは懐かしそうに答えて、ニツと茉莉香に微笑み返す。思わずどきまきする茉莉香。

そう、それは数時間前に茉莉香たちが目にした光景。

「ああ、植民星連合は銀河帝国に降伏していない。もつとも海賊には降伏したけどね。」

あつと茉莉香は気付いた。

スズカが植民星連合政府に宣戦布告して、(偽の)帝国艦隊が出現してあつけなく降伏。でも植民星政府が降伏文書を渡した相手はシラトリ・スズカ。そしてスズカは降伏文書を帝国側に渡した。あの時は帝国との連合勢力として。

「そして署名が無いまま此処にあるのですね」

「そうだ。伝説の海賊に託されたんでね。」

以前ジャッキーが降伏文書を狙ったように、この空白に名前を書けば、かつて植民星連合政府にあった領域は書かれた名前の持ち主のものになる。正式な外交文書である以上、先行された文書の方が帝国の併合より効力を発する。もしそうなれば、なぜそんな事になったのかを詮索されて帝国も困ったことになる。

託すときスズカが銀九龍に言った言葉の意味が解った。そして彼がこの宇宙港の真の顔役である訳も。食べ物強いなんてものじゃない。彼は帝国とオリオンの腕の御目付で、これはまさしく今も爆弾

なのだ。

「あの、その……。親父さんは、私か小さい頃から知っていたんですよね？」

茉莉香が思い切って質問した。

「ああそうだよ。自転車に乗れるようになった時。泳げるようになった時。お前さんが梨理香に連れられてくる度にずっと見ていた——梨理香には内緒にしていたが。本当にこの子が思っていたが、お前が海賊になるって訪れた時は内心ドキドキしたよ。でも史実通りよくやつてくれた。——しかし、ずっと妙な気分だったよ」

歴戦の戦士がとびっきりのウインクを返す。

「そうですね、親父さんとは幼いころからの知り合いで、今回の事があつて、私も妙な気分です。」

バルバルーサ船長ケンジョー・クリハラが弁天丸の帰還を知ったのは、娘チアキ・クリハラからだだった。そしてオデット二世の私掠船免状の事も。

「そうかい、ご苦労だったな。俺達の間伝わっていた伝説は本当だったんだな。」

「伝説？」

チアキが父親に訊く。

「旧植民星連合の海賊免状がなぜ今も更新され続けているか。それは海賊艦隊の旗艦を務めた白鳥号が帝国の私掠船免状を持っていたから。白鳥号と行動を共にした船は、帝国公認と見なされ、だから併合後も星系政府は私掠船免状を更新し続けた。いわば俺達は帝国公認の海賊だ、てね。——私掠船免状は船に与えられる。白鳥号が海賊船籍を外した時、その免状は失効したと思われてたんだがなあ。そうか、まだ生きてたのか。」

「ミューラ・グラントがオデット二世を狙った理由も、その辺りだったかも知れませんか。」

バルバルーサの副長ノーラが指摘する。

「ファウンテンブロウでお嬢さんがブラスター梨理香——加藤梨理香さんと一緒に向かい合った時、ミューラは単結晶を奪うだけなら船

を破壊すれば事足りたはずです。でも攻撃しなかった。あくまで白鳥号の船体に拘っていたのはそれが理由です。辺境海賊ギルドが帝国お墨付きの赦免状を手に入れば利益は計り知れませんが。一二〇年前の盟約を破棄しても余りあるものがあります。——白鳥号が田舎の女子高の練習船になっていると知って、与し易しと思つたのでしよう。しかしそうはならなかった。白鳥号だった時と同様に。」

「ノーラは、鬪鬪星の時あそこにいたんでしょ」

「……ええ、伝説の戦いでした。白鳥号が二隻もいたなんて。そのうちの一隻はその後忽然と姿を消した。あの時は弁天丸のゴーストも現れたとか何とか。これも伝説に輪を掛けました。」

二の句のつけないチアキをよそにノーラが続けた。

「キャプテンだった加藤梨理香さんと、オデットⅡ世、当時と同様に僚艦だった弁天丸へギルドへの招待状を送つたのも、盟約破りに対する彼女なりのお詫びだったのではないのでしょうか。もつとも一度ならず二度までもしてやられた恩讐も多分に含んでのものと思いますが」そんな招待状を持つてスカルスターに向かった茉莉香、よくまあ無事だったなど、今更ながら思うチアキだった。

「でも、あまり公言されるべきではないと思いますよ。いまでも帝国にとつては最高機密に属する事柄ですから」

二人のやりとりの傍らでケンジョーが言う。

「だがチアキよ、大っ好きな船長との冒険はどうだった？」

「ぼっ、ばか親父！ 何言って!!」

にやける髭面に、顔を真っ赤にするチアキだった。

姉妹が実家（王宮）へ帰省した際、枢密院侍従長ヨートフ・シフ・シドーは、いつものように恭しく皇女を迎えた。

跪く老臣を前に、セレニティー連合王国第七正統皇女グリユーエル・セレニティーが一言だけ言葉を掛けた。

「あの折は、大儀ご苦勞様でした。」

彼女の言葉に「お傍に居れず、己の不明に恥じ入るばかりで御座います」と答えたという。

それともうひとつと言ひ添えた。

「ただ、今回の事が王宮の新たな火種とならないことを祈るばかりでございます。こればかりは私ごとで何ともありませんので・・・」  
二人のやりとりに、今回も置いてけぼりを喰らったヒルデの冷たい視線があった。

「ずるいです」

「・・・」

「お姉様ばかり、ずるいです」

「・・・」

「ヒルデだつてお仕事(海賊)がしてみたいです。そりやお姉さまのようにいかないかもしれませんが、私だつて茉莉香さんのお役に立ちたいんです」

「あのおヒルデ。ヒルデが居てとっても助かったのよ。オデットの出港準備の手配は、貴方で無かつたらああはいかなかつたわ」

二人の間で茉莉香がとりなす。弁天丸の失踪を受けてオデットⅡ世が救援に向かうと決まった時、練習航海にかこつけたフライトプランの捏造や航星局への虚偽手続き、積荷その他の手配の差配一切を、グリユンヒルデが取り仕切ってくれた。時間が無いにも関わらずその手際の良さには部員一同讃嘆した。

しかし一同が白鳳女学院に戻つて来てみれば、ずっとこんな調子である。

「茉莉香さんは黙っていてください。聞けばお姉さまは、白鳳海賊団の提督をなさつたとか。いやしくも連合王国の皇女たるものが海賊の提督をするなどと、私もしたいですっ！」

「ねえヒルデ落ち着いて。今度のオデット(海賊船)の練習航海(営業)には、きつと一緒にに行けるから。ですわよね茉莉香(船長)さん。」

「えええ!?!」

いきなり話を振られて、部員みんなに助け船を求めるが、みんな「次の営業はなんだろうね」とか「今度は正調海賊コスプレで行こう」とか、茉莉香とは別の方向に盛り上がっている。

そんな中でグリユンヒルデがとんでもないことを言い出した。

「茉莉香さんが卒業なされてお姉さまが部長となつた暁には、私が



護衛をいたしますわ。オデットが海賊するのに弁天丸の代わりが居なくてはなりません。お姉さまが海賊衣でオデットに、私はクイーン・セレンディピティで後衛に就きます。王家に伝わるいにしえの戦衣でもって」

「まあ」と、手を前に合わせ目を輝かせるグリユーエル。

「この際、王国の名前も変えましょう。セレンティー海賊連合王国！海賊に和解の道を示されたセレンティーです。きっと解つてくれる筈です。それにオデット二世の優美な姿を見れば国民は納得するでしょう。」

「だとすれば、連合議会への根回しや国民世論作りなど、しなくてはならないことが一杯ありますね！」

「時間はあるようで短いものです。まずはお姉さまが部長になります」と

オデット二世の私掠船免状を狙うものは、辺境宇宙だけではなく、

## 第31話

「ただいまああ——」

茉莉香は半月振りに、実時間ではオデットⅡ世がガーネットA星系への超光速跳躍練習航海を終えての三日振りに家に帰った。

「ふあああ——」

帰るなりリビングのソファーに座り込む茉莉香。

「おいおい、制服ぐらい着替えておいで」

「はああい。」

キッチンから梨理香の声が掛かるが動きたくない。

何やかんやと疲れた。一二〇年前の出来事も大変だったが、それよりも帰還した後の方が色々疲れた。

「ねえ梨理香さん。オデットⅡ世って伝説のオリジナル・セブンの生き残りだったんでしょ」

「何だい、いきなり」

「実はね、白鳥号だった頃の私掠船免状が出てきたの」

キッチンで梨理香の手が止まる。

「いままで閉じたままだったファイルが開いて、それが銀河帝国の私掠船免状だったの。白鳥号って海賊免状を政府に返上して民間船になったんでしょ。輸送船、調査船、そして最後に白鳳女学院の練習船になった。なのに帝国の私掠船免状は有効のまま。これって、帝国の怠慢？ 結構いい加減だなんて」

茉莉香の言葉に梨理香が返す。

「そうかい、ファイルが開いたのかい。さてはお前たち、練習航海にかこつけて海賊営業したね」

いきなり凶星を突かれる。

「私掠船免状は海賊船に与えられるもんだ。民間船になれば当然閉ざされる。しかし免状は船が廃船にでもならない限り失効はしない。星系の免状には長子相続という付帯条件が付けられているけどな。民間船だった船に私掠船免状が復活するのは、その船が海賊した時だよ。トランスポンダーに『海賊船オデットⅡ世』って出てたのはそん

な訳だったんだね」

しかしそれ以上何をやったんだいと聞いてこない梨理香に、茉莉香はほっとした。

「オデット二世はお前が知ってる通りいにしえの海賊船だ。弁天丸と同じ独立戦争当時からだね」

「うん。」

「なぜ帝国の私掠船免状がそのままになってるんだって言ったよね」

キッチンからの梨理香の問いに身を起こす。

「別に帝国が忘れていた訳じゃないんだ。オデット二世は中系ステーションに専用ドックを持つてるだろ。——ヨット部の年次予算に使用料は計上されているかい」

「ううん。他に使い道が無いから格安で借りれるんだって、先代部長（ジェニー）が言ってた。学校の運営費の方に入ってるんじゃない？」

「——そうかい。でもあのドックの使用料は、もともとタダなのさ。何しろ軍用だからね」

「ただ？」

梨理香が夕餉の支度の手を休めずに続ける。

「オデット二世のためだけに、軍用の閉鎖ドックを提供している。どうしてだか解るかい」

「それは、ステラ・スレイヤーがあったから」

「ファンテンブローでオデット二世は単結晶を失った。本来ならそれで終いになる筈だ。——請求書は来たかい？」

被りを振る茉莉香。

「その後もオデット二世はドックを使い続けられている。使い続けさせなければならぬ理由があるんだろうよ。その一つが私掠船免状だ。まあ答えになっていないが、帝国が私掠船免状をそのままにしてる辺りにあるんだろ。お前の学校（白鳳女学院）は、元は植民星連合の艦隊総司令部だった。オデット二世はその練習帆船。いずれにせよ、あの船は帝国の最高機密扱いになってるって事だ。星系政府

も含めてね。」

ジェニーと見たあの降伏文書を思い出していた。

久し振りのポトフの香りが茉莉香を包む。

スズカや、ちるそにあん（ひいお爺ちゃん）や、あの時代の海賊たちの尽力が無かつたらこの日常は無かつたわけで、私も貢献出来たのかな。

「梨理香さん。キャプテン・スズカって統合戦争のあとどうなったの」

いくら調べてもシラトリ・スズカの足取りは戦争終結を最後に、ぷつぷつりと歴史から消えていた。あれだけの活躍をしたのにもかかわらずだ。

「ポトフ出来たよ。席につきな」

「わお♡ 久し振り〜」

茉莉香のお腹が鳴る。

「さっきの続きだが、白鳥号はいっぱい秘密を抱えていてそのまま海賊船でいるわけにはいかなかった。そこで当時の政府と銀河帝国は考えた。どう秘匿するかってね」

うんうんと頷く茉莉香。

「キャプテン・スズカは、統合戦争のあと白鳥号から降りた。つまり海賊を辞めたのさ。彼女は白鳥号を手放すかわりに条件を出した。植民星連合の総司令部に女子高を建ててくれてね。まさにキャプテン・スズカの提案は渡りに船だった。帝国の最高機密が田舎の女子高にあるとは誰も思わないし、政府としても総司令部にそれまでの記録やら植民の歴史やらが大量に保管されてたから壊すわけにもいかなかった。そのまま女子高に転用した方がいってね。そして白鳥号はその練習帆船になった。白鳳女学院って名前も、彼女がつけた名さ。——これは公文書には残ってないがね」

「白鳳女学院って、キャプテン・スズカが創設者だったんだ」

「彼女が経験できなかった学園生活を、後世の世代には体験してほしいって願いからだそうだよ。」

「……………」

その願いは叶えられた。一二〇年後のいま、茉莉香たちは高校生活を満喫している。

「その後彼女は、小さな宇宙船で宇宙を駆け巡った。物資の輸送やら鉱物資源の探索やらを請け負ってね。辺境海賊とも渡り合ったこともあるらしい。もつとも自分がキャプテン・スズカだとは名乗らなかったそうだが。彼女は海賊はやめたが、亡くなるまで船乗りをやめなかった。宇宙（うみ）に生きた女だよ」

「結婚して子供をもうけたが旦那とは離婚。女手一つで育てたその子も、孫が物心つく前に夫婦揃って事故死で結局残された孫娘を育てる羽目に。つくづく家族縁のない人だったんだねえ。」

「私も親の顔は知らないからね。幼いうちから船に乗って、そら（宇宙）で育って、学校には通ってない。私も色んなことを仕込まれたよ。海に生きるって事がどういうことかという事をね。一寸した判断の遅れや迷いが致命的な事故に繋がる、決断は常に自分でしなくちゃならない、その結果も含めてね。決断は自分が選んだベスト、これは学校では学べない事だ。しかしお前にはキツチリ高校を卒業してもらわないと。」

「いやいや、もう留年の危機は過ぎました」

二年の春頃、赤点街道驀進中だったのを打ち消す茉莉香。でも記録に残っていない事をどうして梨理香さんは知っているんだろう。話も途中から自分の事になってるし。

「でも梨理香さん、どうしてそんなにキャプテン・スズカの事を知ってるの？」

「え、知らなかったかい。私の母方の旧姓はシラトリ。シラトリ・スズカは祖母さ。さつきも言っただろスズカに育てられたって」

言ってるの、言ってるの。でも話の流れではそういう事になるのか？

「決断は自分が選んだベスト！ これもおばあちゃんから教わった事さ。彼女は恩人からの受け売りだって言ってたけどね。なんでも本当の海賊になれたのは、その人のお陰だって」

嫌な汗が出て来る。あの言葉は梨理香さんから教わった言葉で、梨

理香さんは祖母から学んだって、で祖母がシラトリ・スズカで、スズカちゃんに言ったのは私で……って、ええ!?

何やらこんがらがって来る。

「お前が生まれるずっと前、おばあちゃんが無くなるときに、私に子供が出来て、もし女の子だったら、名前は『茉莉香』って付けなつて微笑みながらの遺言だった。それでお前を茉莉香って名付けたんだよ。キャプテン・スズカは、お前のゴッドマザー（名付け親）さ」

「ええええええ!!」

ジェニーは課題をまとめたレポートを携えて宇宙大学に戻った。

大学への帰還に対して、ヒュー&ドリトルからの妨害は無かった。それどころか、彼女とフェアリージェーン星間旅行会社への圧力の一切が消えた。オデットⅡ世が海明星に帰港してからである。

統合戦争で先祖の関与を知ったジェニーは、その後のヒュー&ドリトル社のことも調べてみた。そこで解った事は、辺境のちっぽけな会社が当時帝国でも大手だったヒュー社をどうして乗っ取れたのかだった。

あの事件のあと、ヒュー星間運輸の社長は逮捕され無期刑、会社は規模を縮小されて政府の観察下に置かれた。経済への影響を考慮されて潰すわけにはいかなかったのだ。そこに乗り出してきたのが新たに帝国版図に加わった辺境惑星のドリトル商社。もともとヒュー社と関係があり帝国が隠しておきたい事情の一方の当事者だった会社だ。内政不干涉もあり、そのままドリトル社に乗っ取らせたのだ。その後は歴代社長の辣腕もあり会社は急成長。元の規模を凌ぐ会社になった。しかしヒュー社から代々社長に伝えられた秘密の言葉があった。

『ジェーンに気をつける。ジェーンは破滅を呼ぶ』

ジェニーが『フェアリージェーン』を立ち上げた時、異常に過剰反応した理由もそこらあたりがあったようだ。

それがピタリと止んだ。帝国からの圧力が掛かったことは容易に想像できた。統合戦争を直に見てきたジェニーは、帝国とご先祖さま

の秘密を知る当事者だから。

ユニバー星系第四惑星、タニア、情報都市アカシア。

旧市街外縁部の古い石畳が並ぶ官舎街のうち、特に教師や教授たちが多く住む一角は閻魔横丁の別名で知られている。

ジェニーは、その中でも特に勤務期間の長い教授たちの住居が並ぶ、地獄の一丁目と呼ばれる区画を見廻した。

庭に置かれた正体不明のオブジェも、広い車道に駐車待機している、乗り物であろう機械類も、前に来た時と同じように統一感もなにもない。しかし、朽ちつつあるものがあまりないところを見ると道の上のものは大部分が生きているらしい。

ジェニーは、蔦に覆われた古い官舎の前で脚を止めた。車道には、前に来たときと同じように、派手な色の車体の低いスポーツタイプのコミューターが駐められている。

あまり手入れのされていない庭の歩道を歩いて、ジェニーは周囲にいつさい最新機器が見当たらない玄関に立った。分厚いドアの上には、長い牙の肉食獣の首が重い金属環をくわえたノックカーがある。

ジェニーは、ためらいもせずに金属環を持ち上げて、その下の瘤に打ち付けた。鐘のような重い金属音が鳴る。

余韻が消えないうちに、ドアの横に取り付けられている漏斗からくぐもった声が聞こえた。

「はい、どなた？」

「二年生の、ジェニー・ドリトルです」

ジェニーは、用意していた台詞を口にした。

「帰ってきました。オリオン統合戦争に関するレポートを作ったんですけど、個人的に見ていただけですか」

返事が返ってくるまでに、ずいぶん長い時間が流れたような気がした。

「お帰りなさい」

伝声管の向こうから聞こえるアテナの声が、懐かしそうに言った。

「待ってたわ。鍵は開いてるから、どうぞ」

「で、オリオン統合戦争についてのレポートはまとまったかしら」

「一応、自分なりの答えは出来ました」

「そう。」

担当教授は、ジェニーからレポートを受け取ると時間をかけてレポートに目を通した。

鈍重に時を刻む柱時計の音とともに時間は過ぎていき、ときおりページをめくる音だけが書類に埋まったりビングに響く。

窓の夕陽が部屋を朱く染め抜いたころやっと初老の教官はレポートを読み終わって生徒に顔を上げた。

「よくまとまってるわね。曖昧だった記録が解りやすく整理される。その時代人の選択という着眼点がいい。しかし論文としては落第よ。なにより理論展開の裏付けとなる物証が少ない。これでは類推の域を出ないわ」

厳しい判定にも関わらず、ジェニーは気落ちしなかった。

「物証は出てきませんでした。当時の人たちの動きを見て感じるところを書きました」

公文書館でも記録庫でも、ジェニーが体験した事柄はひどく断片的なものでは残されていない。そのほとんどが極秘に関することだからだ。

「そうだね。」

アテナが微笑みながら言う。

「ちよつと時間がかかるかも知れないって言ってたけど、随分待たされたわよ」

「覚えていらつしやつたのですか！　じゃあ先日お伺いした時は既に私を御存知だった——」

「ええ、あなたがこのゼミを選択した時からね。でもそれを言う訳にはいかないでしょ、あなたにとつてはまだの事だったもの。あの時は『戦争の終らせ方について考えてみなさい』って言うことしか出来なかった。おかえりなさい。ジェニー」

古い友と再会できた表情で迎えるアテナ。

「はい。ただいま戻りました。先生の御助言、大変助かりました。」

一二〇年前と同じくジェニーは深々とお辞儀をする。



「あなたに渡したいものがあるわ」

アテナは一枚のカードをジェニーに手渡した。

ラザルス・カード。メトセラ同士に伝わるカードだ。

「ハワード・ファミリーによるこそ。悠久の時を超えて再びまみえ逢えた貴方に、このカードを贈るわ」

広い宇宙空間で再びまみえることは奇蹟に等しいが、長命種であることから、再会あるいは自分の子孫らが出会えることが有るかも知れない。その時に、お互いに奇蹟を讃え合ってカードを交換した。

そのカードの名がラザルス・カード。メトセラが宇宙に乗り出したころから続く習慣で、メトセラのネットワークにもなっている。アテナが暴露メールを送った時に使ったものだ。

「メトセラ以外でこのカードを持つのは、多分あなたが初めてでしょうね。しかも再会した時は私（長命種）の方がおばあちゃんだなんて」

何気に恐ろしいことを言う。（つまり私は百二十歳を超えた大婆ちゃんという訳？）

すっかり日が落ちた室内に、オレンジ色の暖かな明かりがともった。アテナがつけた照明はガス灯を思わせるアンティークな光だった。雑然としながらも研究者の気品が漂う室内が柔らかく照らされる。

二匹の龍が輪になってお互いを噛み合う絵柄の年代物のティーカップにアテナがお茶を注ぐ。出されたカップからハーブの心地よい香りが漂ってくる。

「前に、時間旅行に関する研究が行われているかと聞いたわね」

「はい。それに対する答えは、行われている、でした。過去への情報伝達で、まだ僅か五秒前が目標だと」

「そう、恒星規模のエネルギーを使っても簡単な信号を送るだけで五秒前がやっと。それでもこの研究は大学内でも超が付くほどの極秘なの。まともな学舎ならパラボックスの輪に嵌まることを恐れて手を付けようとしないうテーマよ。仮定歴史学がやっとだわ」

でもそこは魔術が起源だった宇宙大学である。

知性にはそれに相応しい資格が必要、が基本の宇宙大学で、それほどの研究内容を初回生にあっさりと見せたアテナ。

「貴方の出身校の教育方針について、褒められたものじゃないって言ったけど——」

「たとえわずかであったとしても可能性が残されている限りそれを否定しない。ですか？」

こくりと頷くアテナ。

「この研究はまさにそれがきっかけだったのよ。」

「未来からの情報伝達は、あの統合戦争直後からささやかれていたの。統合参謀本部や帝国艦隊全艦に起きた電波ジャックや、中枢部まで覗き放題のハッキング。後で解った事だけど核恒星系まで気付かれずに乗り込まれていた形跡すらあって、はじめは未知のエイリアンによるものだと思われたわ。でも断片的なノイズや侵入の在り方を精査していくうちに、自分たちと同じ言語と思考形態を持つ者による可能性が出て来た。」

「それが、もしかしたらになったのは今から七〇年ほど前よ。技術革新によつてとても微弱な漂流電波が捉えられたんだけど、それが自分たちの文明のもので、当時の技術より数段進んだ方式によるものらしいと判った。しかし問題なのは電波の減衰率から換算すると発せられたのが統合戦争時代であることだった。それが確信に変わったのが二〇年前。大昔のクラッキングも漂流電波も、現代の規格とピタリ一致したの。つまり未来から過去へ時間旅行が行われた形跡があるってね」

——全部あの時やった事よね。とアテナが首を竦める。

「未来から過去への干渉があった事実を前に、宇宙大学では科学者だけでなく歴史学者も社会学者も大混乱になったわ。それこそ恐慌と言つていいくらいに。そのときに以前私が書いた論文が注目されたの。そして過去への情報伝達に対して本格的に研究が行われることになった。私が実験にオブザーバーで関わっているのはそんな経緯があるのよ」

「もともと学位論文だったのだけれど出した当時は赤点を貰った

わ。論旨は、『未来から過去への情報伝達があつた場合、それを意思決定するのは当事者である現時代人の選択に拠る。』よ」

どうぞと一冊の本をジェニーに差し出す。

表題を見てジェニーはげつとなつた。

『ジェニー例題における倫理的側面と現実的課題について。』

「私が若い頃に担当教官から出された問題で、過去の選択が未来へ影響を負うといことは倫理的にクリアできたけど、未来における情報伝達が現代に責任が負えるのかという現実的課題がまだなの。ああ、選択における不確定性は、この例題では当事者の能力や意思により千変万化するということで柔軟性を持つてるわ。——偶然にもあなたと同じ名前だけでも。」

顔には出ていないが、絶対アテナはこの状況を楽しんでいる。

「というわけで、一緒に答えを見つけて下さらないかしら。私の担当教官さん」

にっこりと微笑みながら、細い指を組んでアテナ・サキュラーは言った。